

大正三年三月發行

校友會雜誌

第拾貳號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立
萩中學校

校友會雜誌第拾貳號目次

口繪

○展覽會出品優等書畫 其一 其二

會報

○長距離競走○修學旅行○各部長委員の改選○第十
三回陸上大運動會○劍道部記事○柔道部記事○辯論
部記事○書畫道部展覽會記事附書畫展覽會參考品の
記○庭球部記事○野球部記事○漕艇部記事○會友計
音○大正元年度會費收支決算報告○惠贈雜誌目

藝苑

○第一學年選拔文 田中政太 竹内八郎
○第二學年選拔文 藤井健三 松尾剛介 須子英
一 長嶺元二郎 三輪杉門 進藤常雄 三好忠良

目次

表面題字は松陵先生手
寫稿本中より選びて積
大撮影せるものなり

兒玉義清

○第三學年選拔文 三戸英介 久保田幸事 増野
兼寛 井上光 河野道 櫻井義彦 中村貞夫 松
浦梁作 吉田操

○第四學年選拔文 中山節郎 村岡淺一 藤井四郎
松原淨二 横山繁介 西林鴻介 柴田省三

○第五學年選拔文 小澤亮一 三輪一輔 平山茂
幸月富士昌 山下真一 小川義雄

The Winter Exercises. ... 2nd year. M. Nagamine.

The Chivalrous Crane. ... 2nd year. Y. Nakamoto.

Hagi Town. ... 3rd year. S. Morishige.

Account of a Journey. ... 3rd year. R. Kawasaki.

The Autumn Walk. ... 3rd year. K. Matsuura.

A Merry Trip. ... 4th year. A. Inoto.

Don't Lose Your Temper. 4th year. S. Kodama.
Mt. Shizuki 4th year. T. Kaneko.
Our Ancestors' Great Plot in the Middle Ages.
5th year. J. Ito.

講壇..... 八十三頁

「示諸生」解..... 粟屋 周祐
馬淵本縣知事訓諭要旨..... KA、生筆記
海軍記念日に於ける白井海軍大尉の講話.....
..... 平山 茂 筆記
古谷少將訓話要旨..... 兼重政輔筆記
開校記念式に於ける村上校長訓辭..... H、F、生筆記
村上會長の陸上大運動會評..... 筆記
松陰先生追慕會に於ける村上會長講演要旨.....
..... 平山茂筆記

校報..... 百二十一頁

○元朝廢賀○始業式○澄田教師紹介式○共通入學試
驗規程○馬淵知事來校○卒業證書授與式 附賞品受與
式○新學年始業式、紹介式、伍長選舉○木田教諭紹
介式○入學式○毛利男來校○山口中學校修學旅行團
來校○松本江頭兩教諭告別式○明治天皇遙拜式○第
二學期始業式、紹介式○久原氏獎學金給與○上山氏
來校○古谷少將來校○校長訓話○記念式○藤井技手
講演○本保教諭告別式○天長節祝日拜賀式○久原氏
獎學金給與規程追加○松陰追慕會○足立教諭紹介式
○澄田教師西川教諭告別紹介式○一坪農園

附錄..... 百三十三頁

○山口縣立萩中學校沿革略○職員表○學級數及生徒
數表○武學貸費生表○卒業生一覽

寶祚之隆當與天壤無窮矣

第五學年

寶祚之隆當與天壤無窮矣

寶祚之隆當與天壤無窮矣

寶祚之隆當與天壤無窮矣

寶祚之隆當與天壤無窮矣

寶祚之隆當與天壤無窮矣

How's Love Your Temper. 4th year. S. Kojima.
 Mr. Shiraki 4th year. T. Kuroko.
 Our Ancestors' Great Plot in the Middle Ages.
 5th year. J. Ito.

講壇 八十三頁

元朝曆賀 栗屋 周祐
 馬淵本縣知事訓諭會 K.A. 生筆
 谷谷少 平山 茂
 岡崎完全式に於ける 小川 茂
 村上會長の陸上大運動會評 重政 誠
 松陰先生遺囑會に於ける村上會長講演要旨 平山 茂

校報

○元朝曆賀 ○始業式 ○澁田教師紹介式
 驗規程 ○馬淵知事來校 ○卒業證書授與式
 式 ○新學年始業式、紹介式、
 介式 ○入學式 ○
 來校 ○
 式 ○
 講壇 ○本保教諭會別式 ○
 贈學金給與規程追加 ○
 澁田教師西川教諭告別式 ○

附錄

○山口縣立萩中學校沿革略 ○職員表 ○學級數及生徒數表 ○武學貸費生表 ○卒業生一覽

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第五學年 飯田治郎

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第四學年 渡邊 壽

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第五學年 磯部千尋

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第五學年 兒玉義清

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第五學年 山川恒久

寶祚之隆當與天壤無窮矣
第五學年 河村宜介

同



第四學年 阿部 賴香

第貳學年 須子 榮一



(二 其)



第五學年 渡邊 佐



第三學年 渡邊 佐



第五學年 渡邊 佐



第三學年 渡邊 佐



第一學年 西永 彰治

山口縣元
中學校

校友會雜誌第拾貳號

會

報

(自大正二年一月
至大正二年十二月)

長距離競走

二月八日、例年の如く、大井村に向つて長距離競走を行ひたり。此日の競走は各小隊にて行はれ、中隊としての勝敗は各所屬小隊の成績を平均して定むることとせり。先づ抽籤に依つて出發順を定め、第四中隊第三小隊の八時三十分出發を劈頭とし、十分置きに順次出發し、各隊共に凜冽たる寒風を凌ぎて進行せる有様は實に壯快なりき。かくて大井村に到着すれば、兼て用意の蒸甘薯を分配せらる。全部到着の後、約二時間の隨意休憩を許され、午後二時前歸途に就きぬ。當日の成績左の如し。

- 第四中隊第三小隊 柳屋良輔外二十六名 一時二十分十秒
- 第三中隊第三小隊 赤川勝外二十六名 一時三分五秒
- 第一中隊第三小隊 堀信一外三十一名 一時五分

會 報

第四中隊第一小隊 香取敬藏外三十一名 一時五分
以上入賞

- 第三中隊第二小隊 上岡謙照雄外二十名 一時五分三十秒
- 第二中隊第一小隊 篠田直武外二十七名 一時六分
- 第一中隊第一小隊 河崎松之助外二十七名 一時七分三十秒
- 第二中隊第二小隊 馬場健一外二十六名 一時八分
- 第一中隊第三小隊 上利祥介外二十五名 一時九分十五秒
- 第一中隊第二小隊 梅武忠外三十名 一時一分十秒
- 第四中隊第二小隊 松尾謙外二十四名 一時五分十五秒
- 第三中隊第一小隊 枝村英介外二十六名 一時五分三十秒

修學旅行

四月二十三日、午後九時、第五學年生五十七名は藤原本保中村の三教諭に引率せられ、大牟田に向つて修學旅行の途に就けり。初は明二十四日早朝、濱崎より乗船の筈なりしが、風烈しく浪高く航海困難なるべき恐あるを以つて、俄に豫定を變更し、夜を徹して山口に強行軍を試み、小郡に出て乗車西下する

一

こととなりたるなり。かくて一行は豫定の旅行を終へ、二十七日、午後五時金谷に歸着し、校長慰勞の辭を受け解散せり。一行中の紀行文もあれど大體に於いて昨年のもものと大差なければ略して載せず、日程の全文を掲げて之に易ふべし。

日程

第一日、(二十四日)午前零時半萩濱崎川口に集合す。午前一時出船下關港に至る。乗船中、航路航海圖羅針盤信號角島無線電信所燈臺等に關する事項の實地見聞若くは説明をなす。同九時、下關に着し上陸す。此地の地理歴史に關する重要なものを討究し、且要塞水道港灣商業に關する事項の實地見聞若くは説明をなす。正午下關を發し、連絡船にて門司に渡る。此地の地理人文特に海陸連絡及び貨物の集散に關する事項を見聞せしむ。午後零時五十分門司を發し、同六時大牟田に着し、午後七時半より同九時半まで外出を許し、十時就寢。
第二日、(二十五日)午前五時起床、六時半出發、午後二時半まで炭坑を觀覽す。炭坑にては石炭の起因用途採掘運搬等に關する事項の實地見聞若くは説明をなす。同三時二十四分大牟田を發し、五時五分二日市に下車し、徒歩にて太宰府天滿宮に参拜し、菅公に關する事蹟の講話をなす。馬車にて二日市停車場に至り、午後八時三十二分發の汽車に乗り、同八時五十三分博多驛に着し、住吉旅館に投ず。同九時半より十時半まで外出を許し、十一時就寢。

第三日、(二十六日)午前五時起床、六時半出發、市中を觀覽し西公園より東公園に至り、元弘記念館に入り歴史を説明し、箱崎八幡宮に参拜す。午後一時半吉塚驛を出發し、同四時十五分門司に着し、連絡船にて下關に渡り、同四時五十五分下關を出發し、同八時三十分山口驛に着し、中川旅館に投宿す。同九時三十分より十時まで外出を許し、十一時就寢。
第四日、(二十七日)午前六時起床、七時より八時三十分まで外出を許す。同九時出發、佐々並にて餐食す。此間に於いて植物礦物を採集せしむ。午後六時萩に歸着す。
右日程の中にて、第一日の海路は、天候の都合により前記の如く變更せられたれども、其他は遺憾なく實行せられたり。尙大牟田炭坑觀覽の際は、該社の優遇を受け、特に藤村茂林新作林俊香諸氏よりは、一行に菓子を寄贈せられたり。附記して感謝の意を致す。

各部長及び委員の改選

五月六日、本會各部長及び委員の改選行はれ、左の如く決定せり。

- | | | | | | |
|------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 劍道部長 | 長東教諭 | 委員 | 下瀬 一郎 | 藤井 武 | 後藤 琢一 |
| 委員 | 飯田 治郎 | 加藤 萬壽夫 | 中村 一郎 | | |
| 委員 | 坪井 六郎 | 津田 實 | 見島 健次 | | |
| 桑道部長 | 中村教諭 | 委員 | 數藤 直衛 | 岡村 頑祐 | 植田 源熊 |

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 土肥 健三 | 西村 鴻介 | 小池 千里 | |
| 來島 眞介 | 松本 勝利 | 和田 義忠 | |
| 辯論部長 | 松本教諭 | | |
| 委員 | 下瀬 一郎 | 光本 照夫 | 杉山 顯正 |
| | 平山 茂 | 馬庭 長一 | 岩武 了 |
| | 清瀬 勘一 | 吉田 稔 | 宮津 精一 |
| | 上利 兵治 | | |
| 書道部長 | 安藤教諭 | | |
| 委員 | 野上猛三郎 | 永松 元治 | 横田 國香 |
| | 宮國 武嗣 | 小川 義雄 | 小澤 亮一 |
| | 三上 勝象 | 渡邊 壽 | 磯部 千尋 |
| | 池田 末治 | 山川 恒久 | 兒玉 義清 |
| | 齋藤 剛 | 河村 宜介 | 金子 武 |
| | 吉田 博 | | |
| 書道部長 | 田總教諭 | | |
| 委員 | 渡邊 佐 | 秋山 節一 | 安部 寛 |
| | 飯田 治郎 | 杉原 時雄 | 伊藤 實三 |
| | 阿部 頼吾 | 田總 時敏 | 松本 正人 |
| | 松村 正一 | 須子 英一 | 進藤 常雄 |
| | 三輪 杉門 | 今田 泰 | 平川 太助 |
| | 瀧口 純 | | |
| 庭球部長 | 田中教諭 | | |
| 委員 | 永松 元治 | 堀尾 嘉市 | 石津 渚 |
| | 上田 九一 | 坂田 義亮 | 村岡 語朗 |

- | | | | | | |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 野球部長 | 江頭教諭 | 委員 | 中野 常二 | 上利 勘介 | 津森 篤介 |
| | 數藤 直衛 | 堀尾 嘉市 | 土肥 健三 | | |
| | 三宅 十六 | 益田 兼施 | 武林 治郎 | | |
| | 河野 通 | 田中 忠介 | 木島 清七 | | |
| 漕艇部長 | 山本教諭 | 委員 | 植田 源熊 | 山下 眞一 | 飯田 治郎 |
| | 金子 潤介 | 三好 市郎 | 松浦 時行 | | |
| | 木武 清 | 梅田 秀起 | 二見 喜一 | | |
| 游泳部長 | 相島教諭 | | | | |
| 雜誌部長 | 藤井教諭 | | | | |
| 委員 | 光本 照夫 | 小川 義雄 | 兼重 政輔 | | |
| | 長谷川 濟 | 平山 茂 | 横田 國香 | | |
| | 柴田 省三 | 松原 淨二 | 吉田 操 | | |
| | 松浦 梁作 | 齋藤 清治 | 木村 幸一 | | |
| | 倉重 義雄 | | | | |
| 褒賞掛 | 藤原教諭 | 栗原教諭 | | | |

五月八日、學友長の改選
學友長の改選を行ふ。結果左の如し。

- | | | | |
|-----------|-------|----|-------|
| 東萩區 第一小區長 | 藤山 二郎 | 副長 | 兼重 政輔 |
| 第二小區長 | 長谷川 濟 | 副長 | 士肥 健三 |

西萩區	第一小區長 下瀬 一郎	副長 石津 清
	重枝 猛夫	
	第二小區長 野上猛三郎	副長 境 三輔
	堀 勘市	
南萩區	第一小區長 光本 照夫	副長 安田 安
	第二小區長 友森 文彦	副長 伊藤 實三
	三戸 新熊	
	第三小區長 竹重 保術	副長 郷田 周隆
	第一小區長 渡邊 壽	副長 中山 靜太
	第二小區長 後藤 琢一	副長 馬庭 長一
	持山太兵衛	
中萩區	第三小區長 杉山 顯正	副長 秋山 節一
	第一小區長 藤井 武	副長 堀 幸一
	第二小區長 永松 元治	副長 善市 陽一
	第三小區長 飯田 治郎	副長 阿部 精吾
椿東區	第一小區長 三輪 一輔	副長 田中 健藏
	中村 芳政	
	第二小區長 植田 源熊	副長 戸倉 吉郎
	植村 美人	
	第三小區長 熊谷 謙介	副長 山田 雪三
椿區	第一小區長 三宅 十六	副長 石川 長介
	第二小區長 江本 敏武	副長 藤田 慶三
	第一小區長 野原 英一	副長 來島 眞介
山田區	第二小區長 山下 眞一	副長 勝野 秀信

第十三回陸上大運動會
十月二十日、陸上大運動會を舉行せり。當日の狀況は、左の記文に譲る。

十月十八日の記念式當日は、天候險惡にして、暴風篠つく雨と共に襲來し、刻苦して作りたる柴門も、枯草を折るが如く吹倒し、萬般の設置皆亂離骨灰の慘狀を呈せしかば、中一日をおき、設備を改修し、二十日に於て開催しぬ。前日と同様清透徹の秋晴は千里雲なく、霽風光日、小春の陽光は、照々輝々として、體幹かに氣和かなり。されば出場戦士は、生氣滿面に躍動して校庭に集合し、點檢を終へ、さらに中隊旗の受授あり、五年級首席伍長の全般に對して鼓舞的演説をなし、校歌を三唱し、劈頭先づ活氣の流露を見る。午前九時四十五分、殷々たる煙花の響秋曼を劈くを待つ間遲しと、逸れる健兒は、颯爽たる英姿を場裡に現し、其より、競技の進行水の流るゝ如く、迅速に、確實に、些の障害なく役員を命令よく行はれ、審判の一言は、秋霜烈日の概あり、觀る者をして快談を叫ばしむ。かくて競技の進行すると共に、展覽會と兩々相まちて、觀者堵の如く、輕塵場の四周を抱擁せり。かくて、日山に入り、西天の紅霞色褪せて、蒼然たる暮色の四邊を籠る頃、萬歳聲裡無事に解散しぬ。

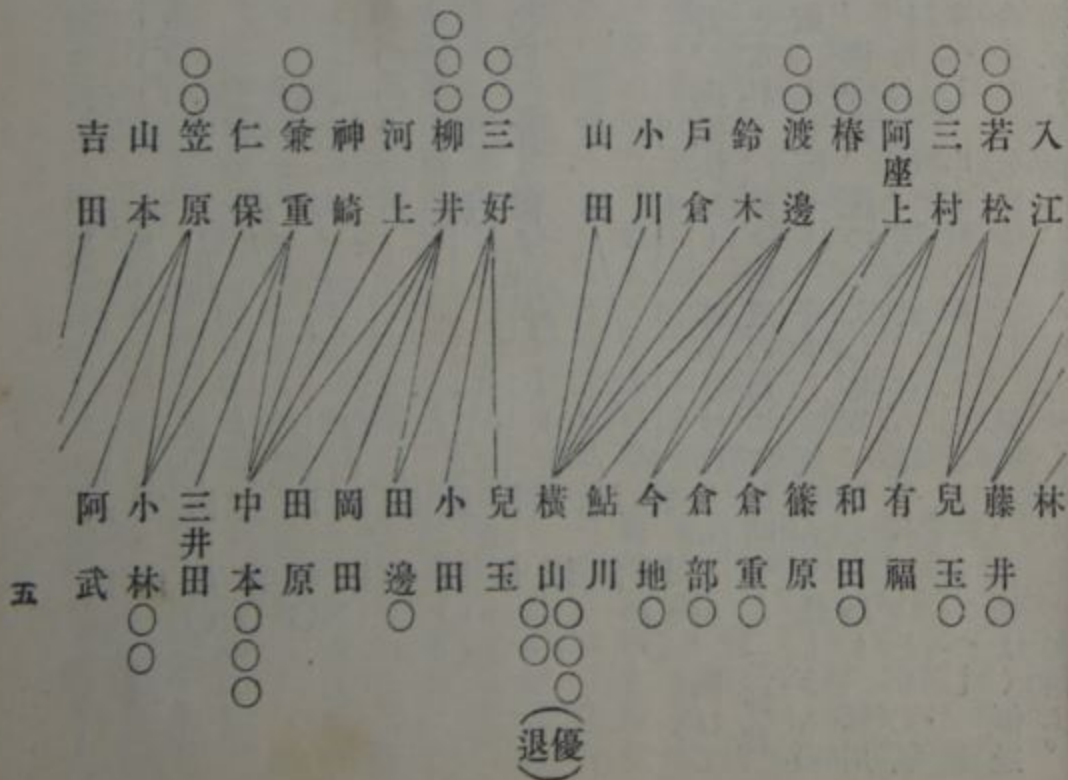
本日の主なる競技及び優勝者は次の如し。

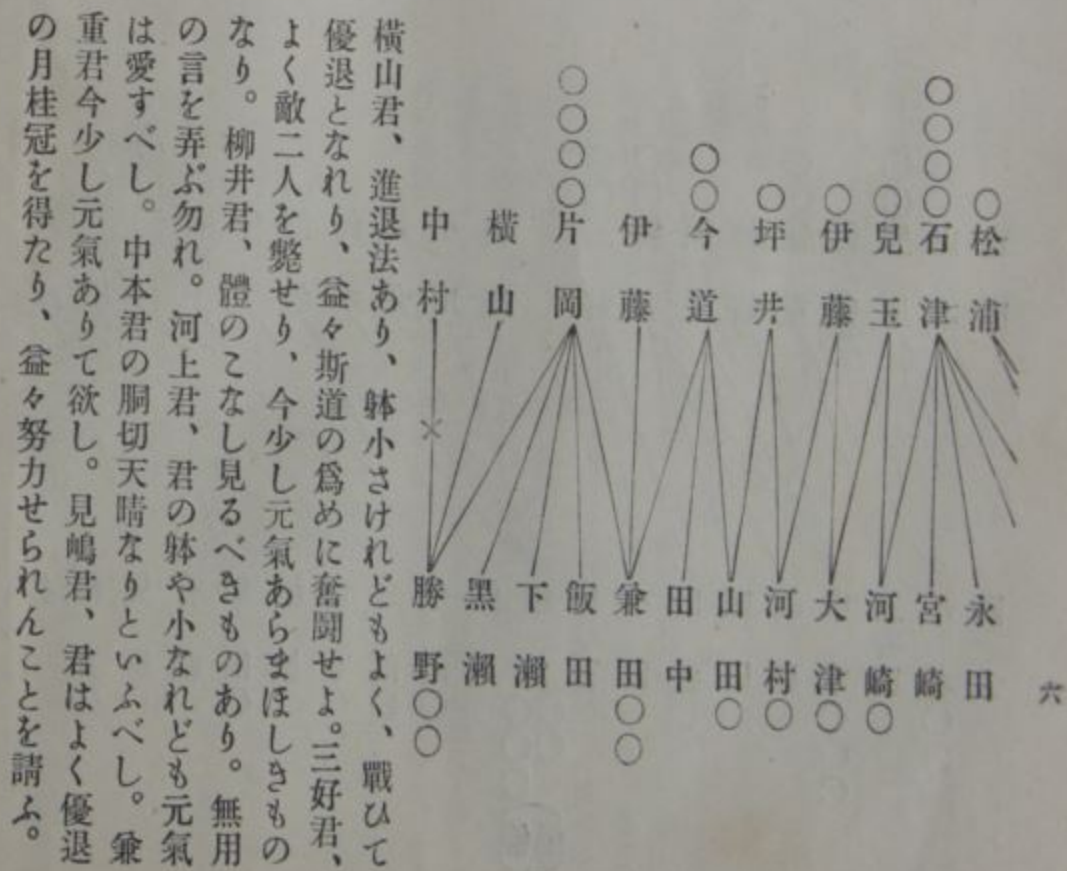
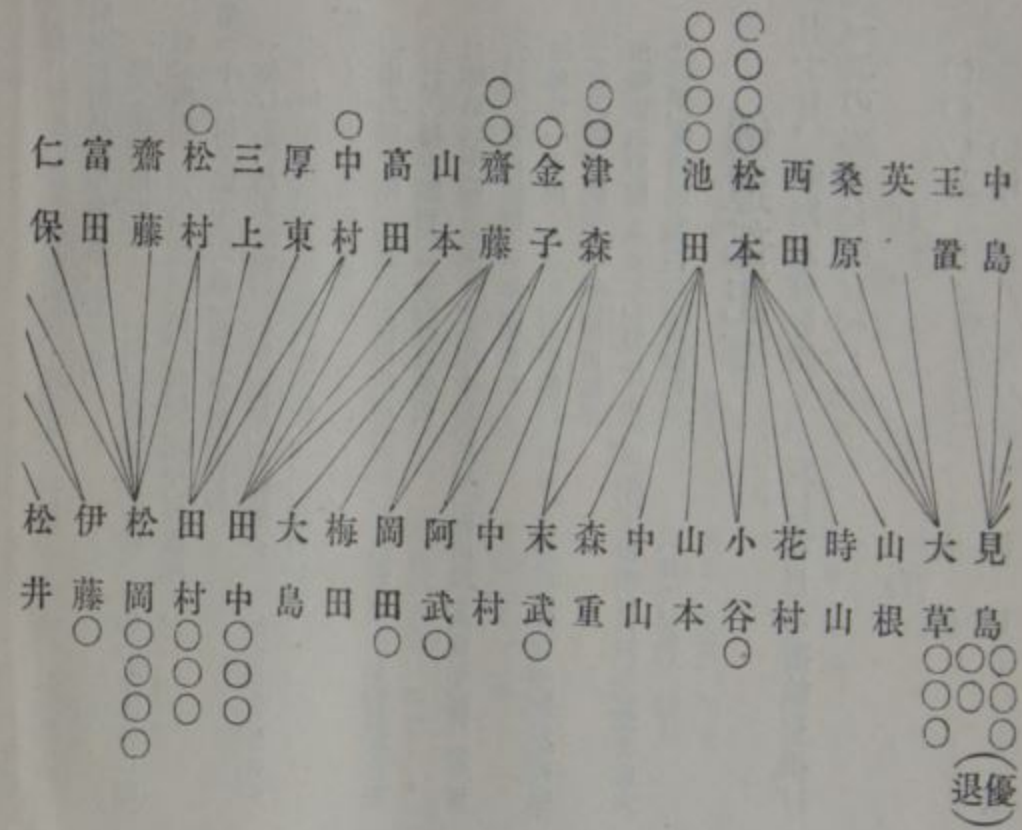
第十一回特別障害物(第一着四分)
一等(三年)大谷音久、二等(三年)阿部時彦、三等(五年)横田國

劍道部記事

二月十日、春期大會を開く。左に當日の番組を掲げ且一二の妄評を試むべし。

- 香、四等(三年)伊藤文亮、五等(五年)堀勘一、第十五回早駈千米(第一着三分)
- 一等(五年)田中健三、二等(五年)戸倉吉郎、三等(五年)杉山顯正、四等(三年)藤村正亮、五等(五年)後藤琢一、第六十一回早駈千米(第一着二分四十五秒)
- 一等(二年)松本勝利、二等(四年)西林鴻介、三等(三年)笠井義夫、四等(三年)大谷直彌、五等(四年)益田兼施、第九十回中隊選手競争(第一着五分六秒)
- 一等第四中隊 (五年)飯田治郎(四年)益田兼施(三年)河村作熊(二年)松本勝利(一年)河田榮治
- 二等第二中隊 (五年)三宅十六(四年)西山鴻介(三年)河野道(二年)高田盛穂(一年)林雅助
- 三等第一中隊 (五年)田中健三(四年)三好市郎(三年)大谷直彌(二年)松井政平(一年)和田義忠
- 四等第三中隊 (五年)石津清(四年)上田保則(三年)笠井義夫(二年)來島眞七(一年)山中英夫 (S.O生)





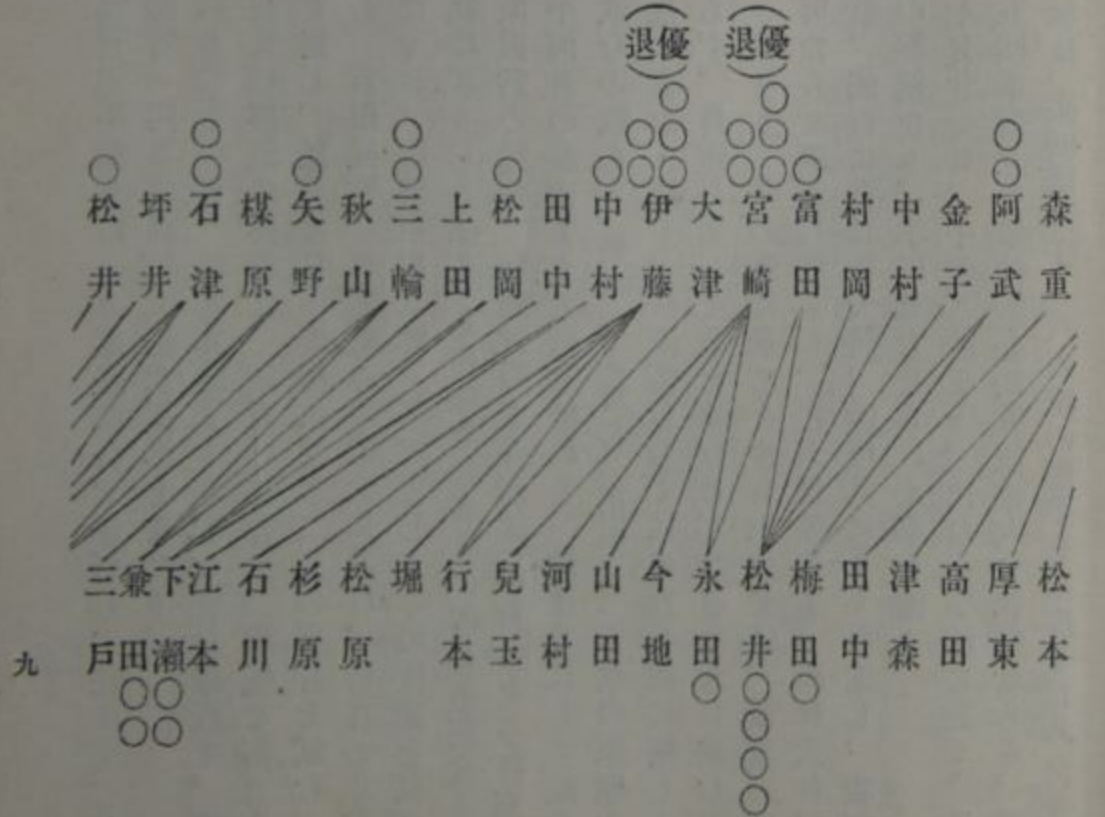
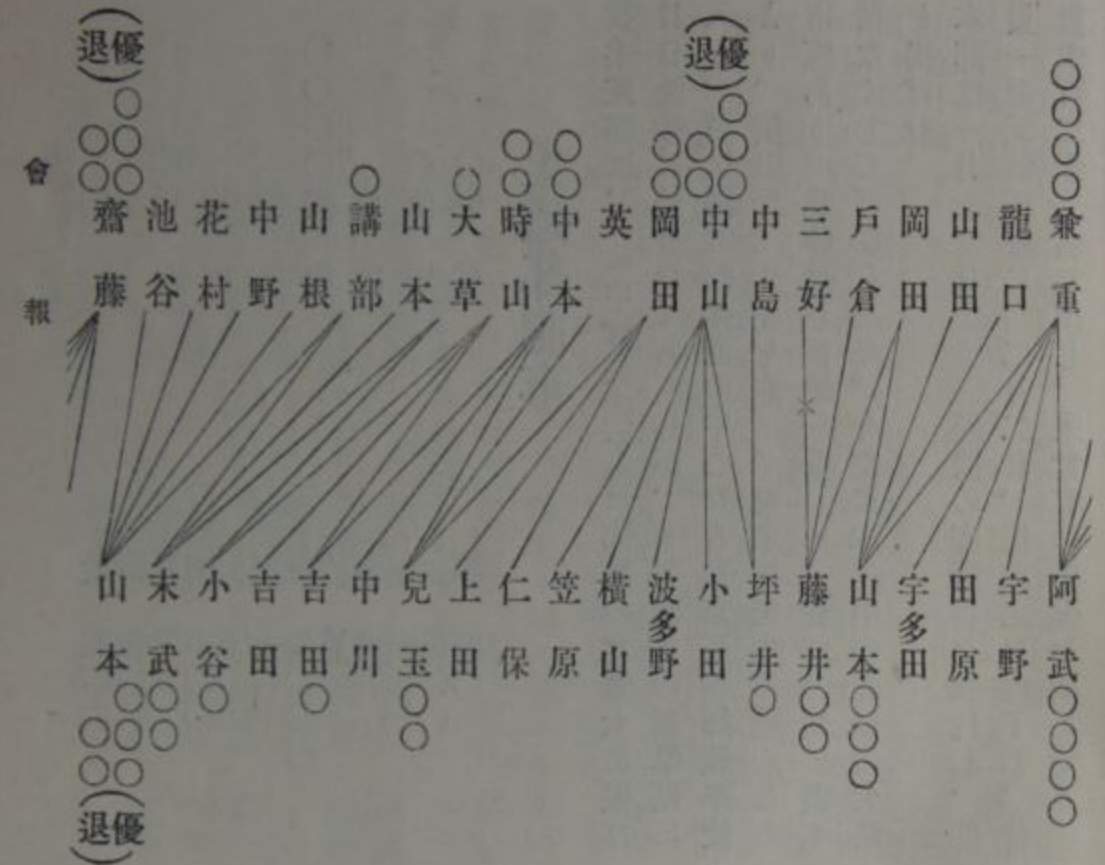
横山君、進退法あり、躰小さけれどもよく、戦ひて優退となれり、益々斯道の爲めに奮闘せよ。三好君、よく敵二人を斃せり、今少し元氣あらまほしきものなり。柳井君、體のこなし見るべきものあり。無用の言を弄ぶ勿れ。河上君、君の躰や小なれども元氣は愛すべし。中本君の胴切天晴なりといふべし。兼重君今少し元氣ありて欲し。見嶋君、君はよく優退の月桂冠を得たり、益々努力せられんことを請ふ。

西田君、進退を謹みて、剣道は禮儀を主とすること忘れざれ。松本君、池谷君、將に優退の月桂冠を得んとして果さざりしは遺憾なりき。田村君對厚東君の試合は今日の花とも謂ふべく、場中の情氣を興奮せしめたり。片岡君、元氣あり、太刀のさばき躰のこなし共に遺憾なし、君の躰の小ささを恨むのみ。然れども技は必ずしも躰の大小に由らず、請ふ奮勵已むこと勿らんことを。宮崎君、敗れたれども奮勵せば、三年後には一方の雄たらん。飯田君、君は新進の剛の者、前途有望なりと謂ふべし。横山君の業振はざりしは敵強かりしが爲か。黒瀬君の大業惜むべし。中村君は斯道の老將、我輩感服の外なし。折角斯道の爲めに益々切磋せられんことを請ふ。今日の試合に於て如何にも残念なりしは五年級諸君の出演せざりしことなり。下瀬後藤藤井國弘杉山の諸君請ふ自愛せよ、斯道の君等に待つことある決して淺しとせざるなり。

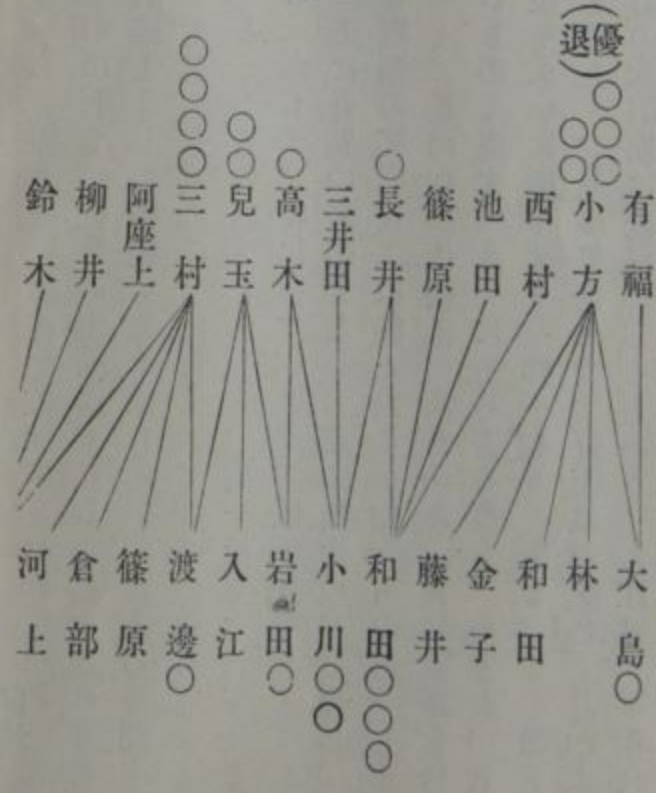
六月二日、午後一時より、末永長束兩師範審判の下に大會を舉行す。觀衆極めて多く、實に近來の盛會なりき。余は是より當日觀し所に就きて聊か妄評を試

むべし。抑武道は精神を鍛錬するを以て目的となすものにして、技巧の波紋は末たるべし。されば若し武道よりして禮儀を取り去らんか、蕃人の争闘と選ぶ所なからんのみ。此會に於ては、禮儀も常よりは見るべきものありしかども、尙一層意を致す所なかるべからず。特に排すべきは、競争中や、もすれば特更に奇異の容體をなし、或は無用の言を發し、只管觀衆の笑を買ふに汲々たるが如きものありし事是なり。是の如きは藝人の所爲のみ。眞に武術を修むるもの、爲すべき所にあらざるなり。小方君、君の技や大いに進歩せり。躰小なりと雖も、よく敵五人を斃して、見事優退せり。好漢益々勉めよ。兒玉君、君の太刀筋は鷹揚にして力あり。入江君、不幸にして敗れたりと雖も、その技や觀るべきものあり、奮勵せんことを望む。三村君、君が當日の働きは天晴れなり。然れども敏活を缺くの憾なきにあらず。柳井君、平常修行の熱心なるにも關らず、不幸にして敗を取れり。然れども勝敗は敢て顧慮するに足らず。君の太刀の構へと掛聲とは今少し研究を要するが如し。兼重英君、病後に似ず、よく強敵四人を斃せり。

君が技の凡ならざるを見る。小谷君、進退法あり、吾人は君が將來に屬望す。齋藤君の技近來大いに發達し、よく優退の榮を荷へり。つとめて已まざるば、一方に將たらんこと難からじ。宮崎松井兩君、共に幼年組中の翹楚たり。自覺せよ、本部將來の盛衰君等の雙肩にかゝれることを。伊藤(俊)君、新進氣鋭、態度動作共に宜し。よく敵五人を斃し、優退の榮を負ひしは偶然にあらず。石川君矢野君元氣賞すべし。下瀬君平素勵精の程も知られてゆかし。兼重君日頃の熱心の効表れ、其働實に天晴なりしが、不幸にして敗れたりしは實に惜むべし。松井君津田君、共に本部未來の重鎮たるべきを知る。今少し斯道の爲め精勵せられんことを請ふ。山下君元氣旺盛掛聲力あり。藤山君亦進歩の見るべきあり。横山君、さすがに本部の重鎮、體のこなし法あり、太刀先鋭く、實に當日の白眉たり。松浦君、病後復往年の元氣なく、不幸敗を取れりと雖も、實に斯道の將器たり、勉勵一番せよ。黒瀬君態度太刀筋共に一言を挿む餘地なきも、今少し籠手に注意せらるべし。加藤君、君の業の綺麗なる、人をして爽快を感ぜしむ。横山片岡



の二雄を挫きしは見事なりき。飯田君、太刀筋鷹揚にして力ありと雖も、業には尙反省を望まざるを得ざる所あり。君態度動作共に範とすべく、技も亦妙。平素刻苦の効果か。勝野君、技は必ずしも中村君に下らずと雖も、機會を捕ふるの敏をかぐを恨む。當日の番組並に勝負左の如し。



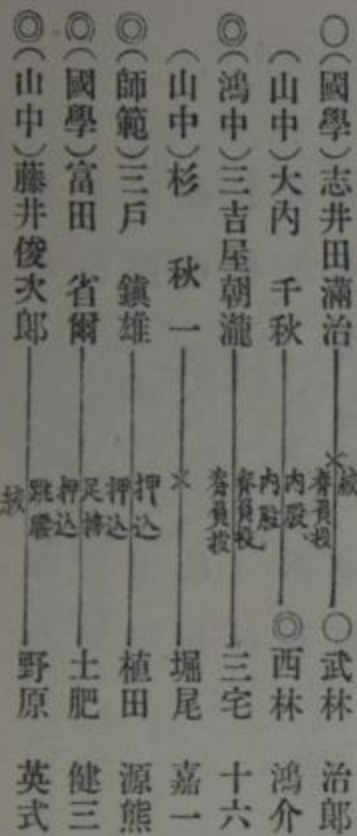


柔道部記事

我柔道部は、先に中村先生を得、部員の意氣大に振ひ日日隆盛に赴きつゝありしが、本年四月の新學期に入り、更に講道館柔道の中心たる東京高等師範學校より、廣田近三先生を迎へ、爾來兩先生の熱心なる指導あり、我等何ぞ奮勵一番して、我部の爲に盡す所なくして可ならんや。今左に本年中の記事の大略を掲げむ。

本部は一月十三日より三週間の寒稽古を執行し、部員一同元氣旺盛に、二月二日、無事之を終了し、皆勤者百二十二名を出し、未曾有の盛況を呈したり。

十九日正午、各選手は、廣田先生指揮の下に、三臺の馬車に分乗して校門を辭し、午後十一時頃、山口上立小路中川旅館に投宿せり。翌二十日、各選手は山口高等商業學校、山口中學校或は山口武徳會支部の道場に於て練習せり。明くれば二十一日、各選手は、定刻前に山口中學校道場に向へり。然るに、如何せん、從來優勝無双の名を縣下に轟かし、吾校柔道部の選手は連戦皆利無く、西林君獨り纔に勝てり。憶何の面目ありて我部の先輩諸兄に見えむ。余輩當に臥薪嘗膽以て之の恥辱を雪ぐべきのみ。當日、吾校出身の高商在學諸兄より、選手一同に菓子を寄贈せられたり。附記して其好意を謝す。今、左に、當日勝負の、我部に關するもののみを記さん。

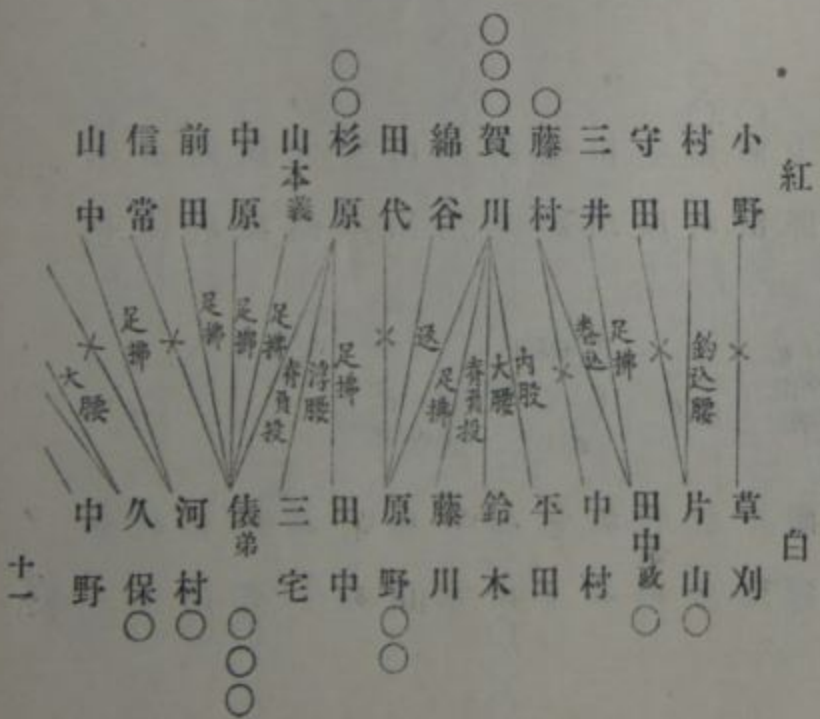


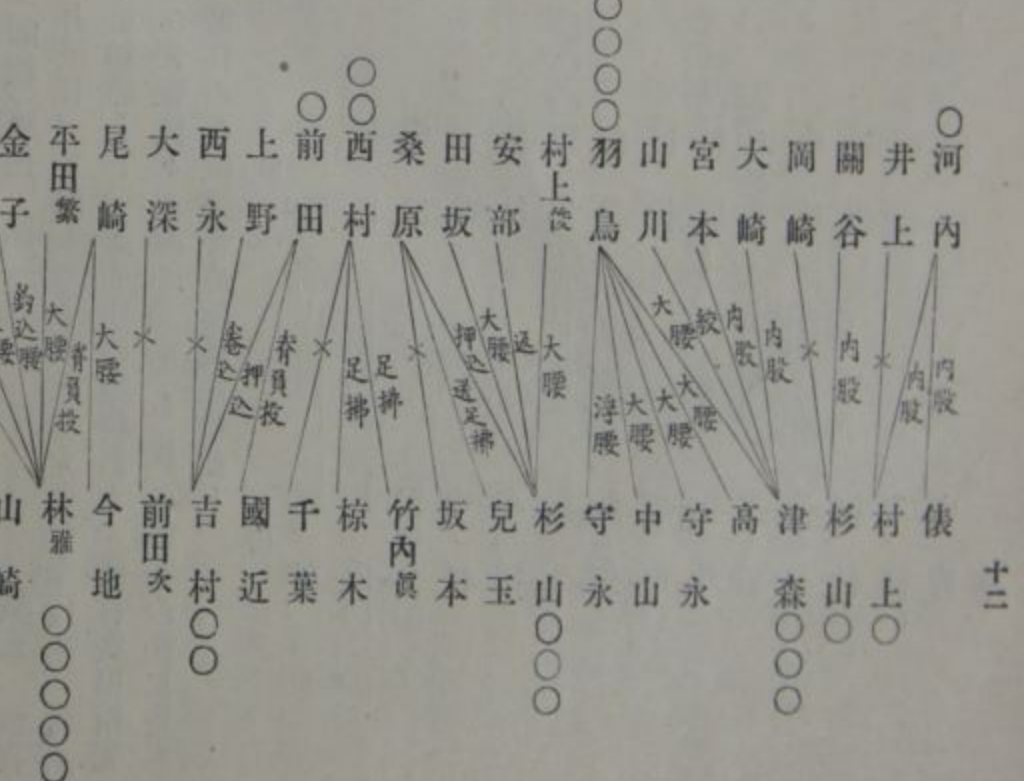
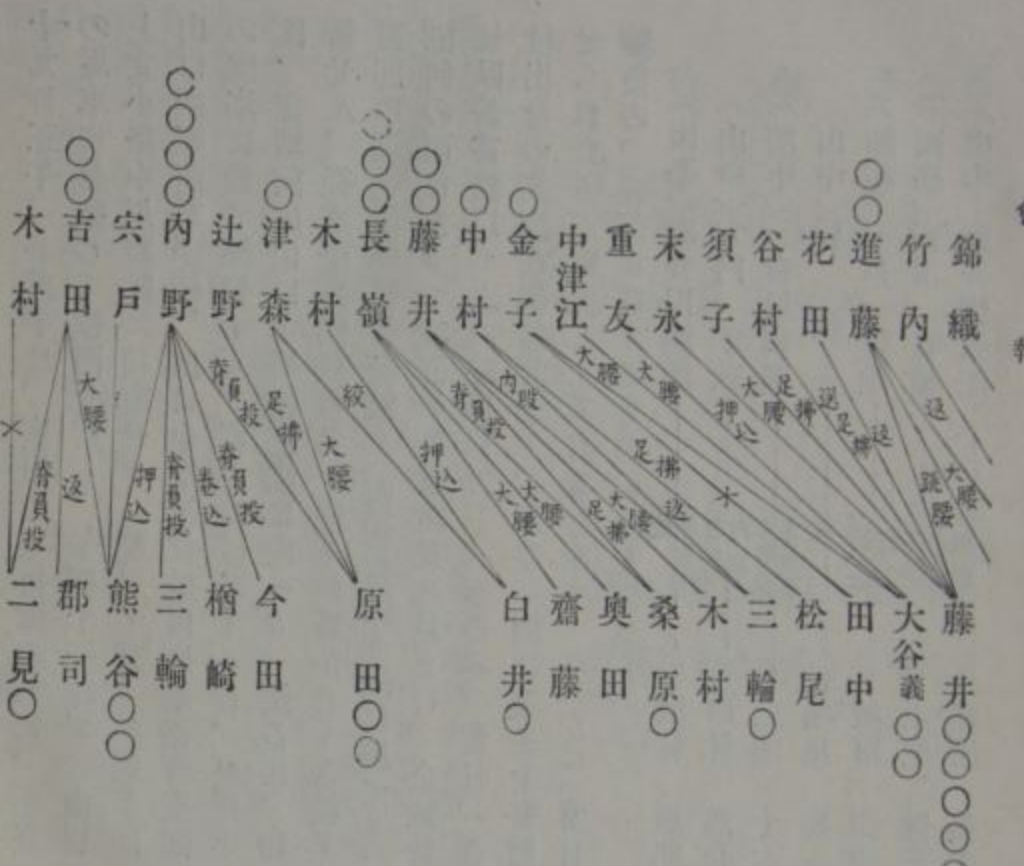
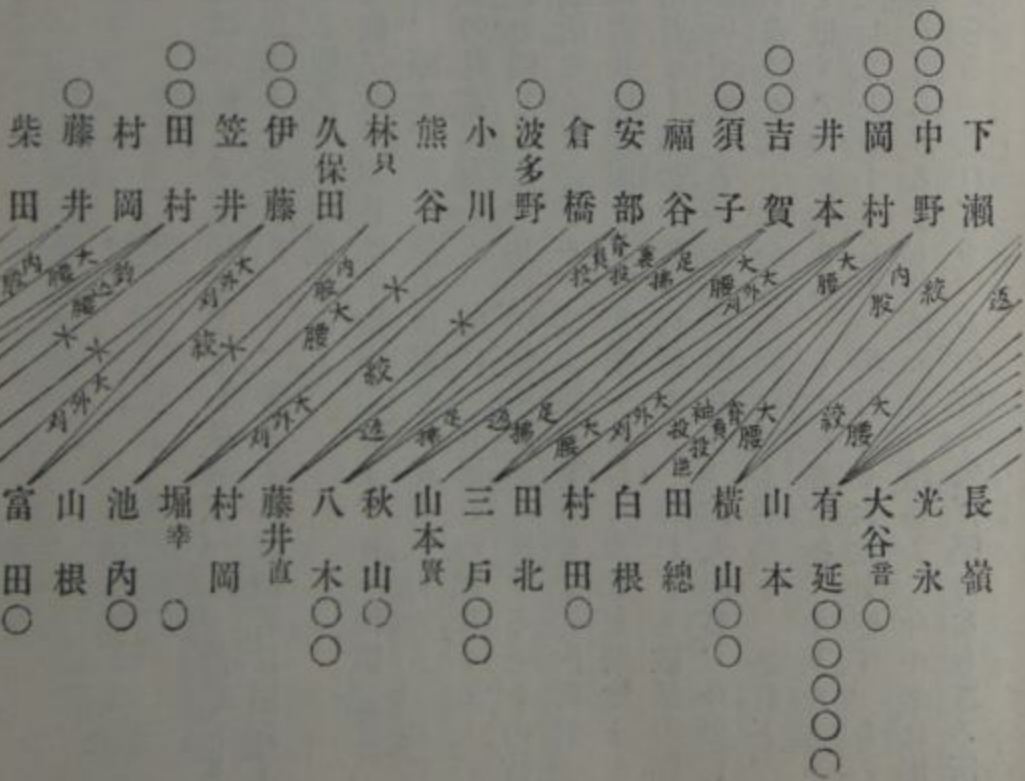
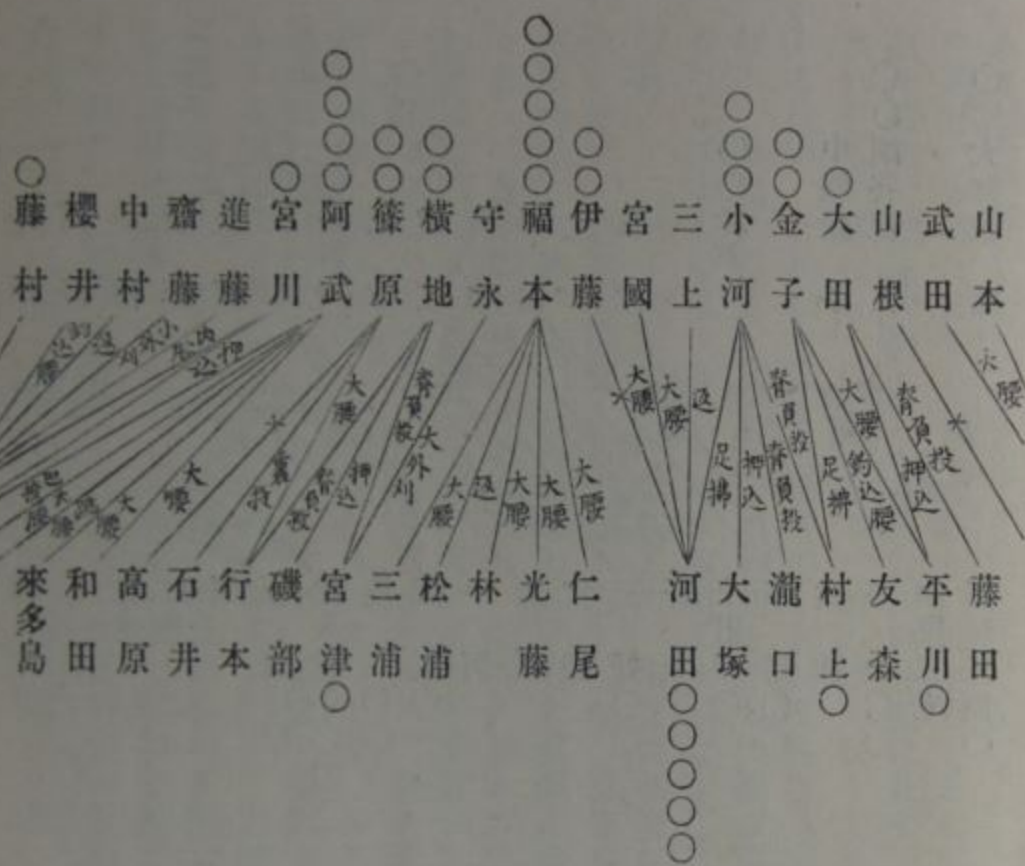
當日、午前九時より進級試合を舉行し、終りて、皆勤者一同道場前にて記念撮影をなせり。

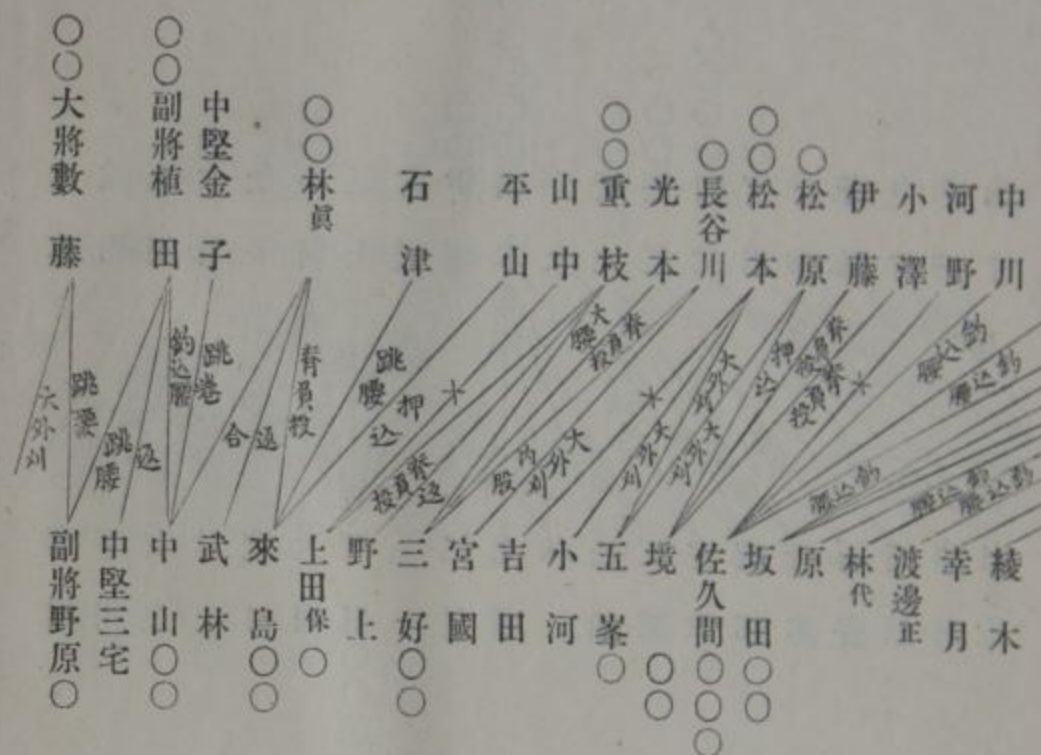
六月二十一日、午前九時より春季大會を舉行す。番組及び勝負の様子は、紙面の都合上、遺憾ながら之を略し、茲に當日の成績につき二三の妄評を試むべし。吉田操君、平素熱心の効大に見れ、當日の花形たりき。吉田中川二君、不運にしてその技倆を見ず能はざりしと雖も、その熱心は吾人の認むる所なり。坂田君の袖投、村岡君の大外刈、作間君の大小外刈、小河君の裏投よく大敵を破れり。蛇は寸にして蛙を飲むの概あり。將來想ふ可し。山中君、天稟の偉軀力量に富むと雖も、好漢惜むらくは未だ兵法に精しからず。自體を崩して敵を攻むるが如きは大に戒む可き所なり。是の點に於て今少し工夫せば、斯道の驍將たらん事蓋し難らじ、乞ふ自愛せよ。西林武林二君、流石に當日の大將、體技共によく發達し、我部の重鎮たり。幸に努力せられん事を請ふ。

七月廿一日、午前八時より、山口中學校に於て、第五回本縣立各學校聯合武道競技大會執行せらる。我部は、柔劍道部より八名宛の選手を出席せしめたり。

(師範)福住 禎一 數藤 直衛
十一月三日、午前十時より秋季大會を舉行す。村上會長を初めとし、諸先生の臨場あり、中村廣田兩先生及び先輩佐々木四郎氏代る代る審判の任に當らる。當日の番組試合の様左の如し。







あり。君將來の大成は堅實なる技に在りと知るべし。松原君、守勢に偏する嫌はなきか。五峯君、その元氣や感服、益々練磨せよ。小河君作戦計畫に長ず。然れども、惜むらくは短軀なり。敵の襟を取りて掛くる技中、脊負投を除きては、餘り有効ならざるが如し。裏投は得意、又以前君の得意とせし大腰は侮る可らざるものなりき。三好君氣象あり、體格あり、技あり、三拍子兼備せり。然れども、未だ開拓終れりとせず。體軀を鍛鍊して大成を期すべし。重枝君君の拂腰、大腰、よくその要領を得、實に感服の至りなり。數年間一技に孜々として、流行に顧みざりしを以ての故ならんか。上田君君の技今や堅實にして完璧たらんとす。本日の手腕天晴なりき。益々進取の氣象を養ひ努力して吾部のためにつくせ。山中君本日は振はざりき。君の仁王立は、敵之を如何ともする能はざるも、今少し恐れず侮らずして、大膽に技を出さんことを望む。今後、君は我部の重鎮として活動せざるべからず。來島君、本日驥足を延ばすを得たり。益々奮勵せよ。林君、平素の實力表れたり。今日まで養ひ來りし潜勢力の發現なるべし。

構造館柔道投之形

取

大將土肥 植田源熊 野原英式

當日は一般に元氣旺盛なりしは喜ぶべし。然れども勝負に重きを置き過ぎて、動もすれば陋劣に陥らんとする觀ありしは憾むべし。賀川倭二君、本日幼年組中の勝士、林河田、藤井、羽鳥、福本、有延諸君は優退の榮譽を得たり、共に進歩の見るべきあり。殊に、有延君の難なく五人の強敵を倒ししは、是君の體格斯道に適するとその技の敏活なることによる。請ふ益々努力せよ。内野君、阿武君共に有望なり。奮勵一番して大成を期せよ。坂田君よく強敵を破るの技あり。然れども敏活の點に於いて缺くる所あるに似たり。佐久間君、今少し大兵なりせばとは余輩の常に思ふ所なり。されど、敵を厭するの氣象あり、その技亦敏捷、小兵たりとも決して失望す可らず。境君よく大敵を倒す、その技侮る可らざるなり。松本君、體格よく今や衆に屬目せらる。然れども、その技や未だ堅實ならざる所

武林君本日は振はざりき。練習を怠りし爲か。中山君、君の跳卷や實に大敵二人を倒し、猛將植田君をも屠らんとせり。將來の進歩想ふべきなり。植田君君は體軀偉大にして力量に富み、今や吾部の重鎮にして、實に本日試合中の白眉たりしなり。野原君、短軀とは云へ、その體の發達極めてよし。大敵植田君を倒し、は誠に天晴なりき。妄評多罪(N.S.生)

辯論部記事

五月卅一日(土曜日)、我部は、第貳拾貳回大會を講堂に開く。登壇辯士及び演題左の如し。

- 一 權謀術數と正義誠實 五小川 義雄
- 二 儉約 一上利 兵治
- 三 人格修養 二宮津 精一
- 四 美的情操 五矢野 壽造
- 五 正氣之歌 五平山 茂
- 六 警 二中津江延彦
- 七 露軍に付きて學ぶべきこと一瀧口 純
- 八 大和魂論 五植田 源熊
- 九 日露の關係と我國の最大急務

- 十大牟田土產
- 十一福岡めぐり
- 十一 English
- 十三運動と校風
- 十四程々
- 十五偶感
- 十六英文朗讀
- 十七東隣西隣
- 十八春之姿
- 三吉田 操
- 五杉山 顯正
- 五安倍 寛
- 4. R. Tawakko.
- 五光本 照夫
- 四富田 穰
- 五下瀬 一郎
- 四兒玉 才三
- 五竹重 保衛
- 五藤井 武

先ぶ松本部長の開會の辭あり、終るや小川君直に壇、權謀術數は一時的にして、大成を期するものは正義誠實によらざるべからずと、古今の英雄を拉し來りてこれを論證す。理路整然、論旨穩當、態度亦落ちつき、將來有望の辯士なり。上利君、語るにあらずして朗讀なり。然れども、大聲疾呼して、眞の儉約を説く、勇氣や愛すべし。宮津君、矢野君共に練習の足らざるを惜む。平山君はすらすと正氣の歌を朗讀し、中津江君はやさしき響を傳へ、亞いて瀧口君立ち、露兵の大膽と服從の精神とを稱賛し

たり。沈着の態度、流暢の辯、初陣とは思はれざる程にして、天晴將來の好辯士たるべきを示せり。益々奮勵せんことを望む。植田君、音聲朗々、元氣満々、大和魂の大氣焰を吐く、宛然美しき日本の美をいふ美文の如し。されど、時に辯窮して躊躇する大男の態度亦滑稽、初陣の爲か、また練習の不足か、折角練習せよ。吉田君は、現今の日露の親善は偽りである、彼等の大計畫は復仇の準備なれば、我國民は奮起せざるべからずと説く、熱烈の意氣愛すべし。杉山君、大牟田全部の説明いたらざるなく、聽者をして恰も大牟田を巡遊するの感あらしむ。安倍君、眞面目なるが如く又滑稽なるが如く、聽衆をして倦ましめざりしは感心。岩武君、巧妙なる發音を以て、ファイターのリーディングをなし、光本君は、運動は元氣の本にして、元氣は校風を左右す。而して運動と勉強とは離るべからざる密接の關係ありと説き、大に運動界の爲に氣を吐きたり。富田君、熱心に語り、下瀬君は、過ぎつる修學旅行を例にひき、徹夜の強行軍に、一升谷一の坂の險を踏破したる意氣を以て、日常の困難を排して向上すべく、食はず嫌ひ

の如く、試みぬ前に困難に僻易する勿れと説けり。兒玉君の英語のリーディングの流暢なること、岩武君と好一對なりき。竹重君は、米國と清國との現時の状況より、將來の事をも併せ論じたり。君の豫言は果して的中せんか否か。藤井君、語辭の巧妙、辯舌の流暢、感服の外なけれども、君の論旨のいづこにありしかは、我等をして揣摩に苦しましめしは惜むべし。

終りて、部長の簡單なる批評ありて閉會せり。本日の優等者左の如し。

- 二等賞 五、下瀬 一郎
- 三等賞 五、小川 義雄
- 同 一、瀧口 純
- 同 三、吉田 操
- 同 五、杉山 顯正

十一月二十九日、第二十四回大會を講堂に開く。辯士三十名に上り、本部創立以來未だ曾て見ざるの盛況を呈せしは、本部の爲めに賀せざるを得ざるなり。更に本部將來の發展を希ひ、左に赤裸々に批評を試みんとす。請ふ其不敬を咎むるとなからんことを。

例の如く部長の簡單なる開會の辭ありて、三宅君先づ壇に登り、徳川家康韓信其の他古今東西の例證を擧げ、堪忍は積極的なりと論結せし所、大なる缺點は見ざりしが、今少し練習を積みたらんにはとの感なき能はざりき。永峰君の英語誦讀はおぢず隠せざりし點は賞賛に値するも、唯其講談的なりしを嫌ふのみ。今少しく演題の選擇に注意せよ。中津江君のは流暢なりしも、音聲に高低なかりしは缺點なり。矢野君、君の説や聞く可かりしも、態度いかに不熱心なりし爲、人をして傾聽せしむるを得ざりしは惜むべかりき。瀧口純君、一年生としては眞に畏る可き辯士なり。君の辯舌、態度、共に君が將來の經驗に依つて益々光輝を加へん。横山君、語調甚だ急速にして、聽者は全く君の意を解するを得ざりき。吉田君も横山君に鑑み、深く省みられんことを切望す、堀君の修身訓は聞くに値せしも、聽衆の耳をかさざりしその責任は君の音聲にあり。富田君、人に説くには、例證は素より必要なり。然れども、演説を長からしめんがために、不必要なる例を多く擧ぐるは徒に聽衆を倦ましむるのみ。聽衆を倦まし

むると否とは、一に辯士の伎倆にあり。小川君は今日の明星とも稱す可し。唯時間の君を急がしめたるは、君のために惜みて止まざる所なり。高木君中村君山本君共に一年生としては上出来なりき。希くは奮勵一番、將來の大成を期せよ。阿部君、余輩は敢て一言す。辯論會を利用して、人を中傷するが如きは、本部の甚だ迷惑する所なり。反省を乞ふ。植田君、藤公の最後を弔ひ得て餘す所なし。音聲の朗なるは君の特有なり。植田君に次ぎ、瀧口吉春君立ち、平凡に語り終る。梅田君の説は終に要領を得ずして終りぬ。君よ輕擾なること勿れ。平山君、希望ある死は幸なる死なりと説く。思想の高遠なるは君の專有物か。光本君、長閑の瓦解を嘆じ、更に先輩の偉業を擧げ、之が恢復を説く。論旨痛快を極む。木島君、今少し練習を積みたらんには、優に一等に入るべかりしならんを。兼重君、重枝君、共に平素沈黙の人にして、斯の如き整然たる説あり。安倍君、諸君は英雄の卵なり。されば馬車馬的に一直線に進めと説く。態度逼らず、言語明晰、將來想ふべし。兒玉君の英語諳誦は流石に敬服に堪へず。最後に立

ちしは杉山、下瀬の兩君なり。無用の言を費さず、必要の辭を落さず、本部の驍將たるに愧ぢず。午後四時半、部長の閉會の辭を以て解散せり。登壇辯士及受賞者左の如し。

一ならぬ堪忍するが堪忍 參等 五、三宅 十六
 一 Kind People have Friends 參等 二、長嶺元次郎
 三白駒の足 二、中津江延彦
 四貧なる哉我が國庫 五、矢野 壽造
 五乃木將軍は何故露都を訪はかりしか 貳等 一、瀧口 純
 六侵略 三、横山 義秀
 七人世 五、堀 勘 一
 八服従と獨立 一、高木 彦三
 九佛教 參等 四、富田 穰
 十萩城址に立ちて 貳等 五、小川 義雄
 十一 The Ungateful Soldier 三、大谷 音久
 十二長州人士の將來 一、中村 博
 十三偶感 四、阿部 賴音
 十四藤公の最後を弔ふ 參等 五、植田 源熊
 十五進め進め南米へ 參等 二、瀧口 吉春

- 十六戦前の曲 二、梅田 秀起
 - 十七死 參等 五、平山 茂
 - 十八暴君イバン 三、吉田 稔
 - 十九郷黨の樂 二、松井 政平
 - 二十運動と勉強 一、山本 義雄
 - 廿一長閑を再興せよ 參等 五、光本 照夫
 - 廿二英語諳誦 貳等 二、木島 清七
 - 廿三鞠躬盡瘁死而後已 五、兼重 政輔
 - 廿四成功する人 貳等 五、重枝 猛雄
 - 廿五桂公 二、關谷 等一
 - 廿六諸君は英雄の卵なり 參等 五、安倍 寛
 - 廿七 The Story of a Porter. 壹等 四、兒玉 才三
 - 廿八日本帝國の危機 參等 五、杉山 顯正
 - 廿九強き精神 貳等 五、下瀬 一郎
- (A.S.生)

書畫道部展覽會記事

委員 小川 義雄 同記
 小澤 亮一

書畫道部展覽會は、十月十八日の本校開創記念日に

於て、大運動會と相伴うて催さるゝ筈なり。然るに、本年は折悪しく前日の風雨にて、運動會場の設備破壊せられたるもの少からざりしを以て、十八日の記念式には、唯だ展覽會のみ開かれたり。當日は、午前中觀覽を許されたれども、運動會行はれざりしが爲に、觀覽者としては、吾等生徒以外には多く見受けざりき。越えて二十日には天氣晴朗にして、運動會も早朝より開かれしかば、展覽會も、午前第九時半より開場して、午後四時まで一般公衆の觀覽を許したり。さて、本年展覽會の例年に比して特異なる點は、書道部にては、書くべき文字を豫め一定して、「寶祚之隆當與天壤無窮矣」としたることと地理歴史科の作品の陳列せられたる事となり。又本年は、此地にをける古來の書畫家の筆蹟を別に陳列せられたるも、會に於て多大の光彩を放ちたり。吾等は彼等名家の遺墨に接して、精神上に受けたる感化の力僅少ならずと信ずるが故に、この貴重なる品を貸與せられたる有志諸賢に對しては滿腔の至誠を以て感謝せざるを得ざるなり。また本年の成績を一覽するに、書道部に在りては、一等六人、二等三十三人、三等五

十一人、書道部に在りては、一等七人、二等三十六人、三等六十人、歴史理科に在りては、一等無く、二等十四人、三等四十六人なりき。吾輩は、諸友の努力によりて、來るべき展覽會には、更により以上の好結果を見んことを切望して已まざるなり。

書畫展覽會參考品の記

書道部長 安藤 紀一

八月十八、廿日の兩日に、書道書道兩部の行ひし展覽會に附帶して陳列せし參考品は、書道部長田總教諭と余との間に協議して蒐集せしなり。蒐集の方針は、萩の古來の名ある書家畫家の作を陳列して地方に於ける斯道の過去の模様を知るに便せんとするにあり。幸にして、吾人の發意は、多數諸人の同情を得、掛幅に、横披に、はた帖冊に、所藏者諸家より貸與せらるゝことを得たるは、誠に感謝の至なり。今その陳列品と其藏弄者と書画家の事蹟の明なるものとを左に列記して永く誦れざるの資とす。

書の部

○山縣周南書掛物 井上要二君所藏

正徳元年遊於赤間關感秋風之興愀然作吊古十首

其一

豐東秋色充山海落日蕭條滿日空天子西巡終不返鸞輿長在水晶宮

其三

一族朱輪三十餘平家去國關廷虛承相無言謝天下強懷幼主海西徂

銀鶴朝天紫陌長禁城春色晚蒼蒼千條弱柳垂青項百韻流鶯連建章
銀佩聲隨玉屐步衣冠身惹御爐香共沐恩波風池上朝朝集翰侍君王
鶴臺名は長霞、通稱は彌八、本姓引頭、出でて醫師瀧養正の
養子となる。初め小倉尙齊に師事し、後山縣周南服部南郭
に従ひ學ぶ。博覽にして、書名亦高し。安永二年歿す。年六
十五。

○草場大藏書掛物二幅 (鹽田清助君所藏)

條封姑射千秋雪蓋擁幽臺萬里風 草大藏

開儀署有青山色對酒人如白雪枝 草大藏

大藏名は安世、字は仁甫、通稱は周藏、父を仲山といふ。仲
山は即ち居敬の養子にて、その家業を繼ぎしが、大藏幼にし
て父を喪ひ、書道に勉強して、その父祖の業を隆さざるを得
たり。享保三年歿す。年六十四。

○坪井彦左衛門書掛物 (教諭藤井百輔君所藏)

(朗吟集中の詩歌を列ね書きたり)

この坪井彦左衛門は事蹟詳ならざれども、元文の頃の人にて
藩公の習字の師たりし事は確實なり。持明院流の習道を傳へ
し坪井嘯山といふは、即ち是なるべし。

○山縣景徳書掛物 (同前)

純 暇 (大字)

景徳名は資、字は貞父、景徳は其號、又た西溪釣徒とも號す通
稱は慎平といふ。本姓は城村。出でて山縣鶴江の養子となる。
文化六年二十四歳の時、藩命にて靖恭公の石棹に書してより
書名大に揚る。尋て明倫館に出仕し、清徳邦彦景文三公の石棹

其三 散樂清經誦叙柳浦事其地在豐前州
太古茫然處々悲西風吹落老松枝曉來休唱清經曲柳浦煙橫秋色哀

其四

宸宮北在紫微下內裡蕭條海上雲天幼神何解事侍臣猶奏水鄉君
內裡地名在豐州即文治行在所又二位禪尼將抱帝投海先奏白水
底有玉京帝當君之

其五

勇蓋三軍源廷尉關東將士悉驚駭上皇非不哀孫帝平民自爲天下響

其六

三宮粉黛真家子一月觀花內苑春誰識秋風西海月錦花無色赤間濱

其七

欲問水濱煙霧流潮聲薄暮滿山樓君王不與朝廷事一二國臣自結體

其八

赤旗如火白旗茅馬上健兒多在舟可憫平家衰老嫗淚痕雙鬢翠雲裘

其九

詔旨空傳西土兵羽林諸將盡諸平覺與玉聲無消息滄海茫茫花風雨鳴

其十

平氏墳塋何景景松嶽嶺倚九巖雲秋風不盡行人淚浩浩烟波晦水濱

萩府後學縣孝需拜題

周南名は孝需、字は次公、通稱は少助。年十九にして徂徠に
從學す。毛利泰桓觀光二公に仕へ、明倫館の創立には、大に
力を盡し、小倉尙齊に次ぎて第二代の祭酒となり、育英の功
高く、卓として、師儒の泰斗たり。寶曆二年歿す。年六十六。

○瀧鶴臺書掛物 (教諭藤井百輔君所藏)

にも書し、歷仕して忠正公の時に至り、忠愛公幼時の習字師
となれり。弟子二千餘人に及ぶ。明治六年歿す。年八十八。
○草場晉水書手本 (長尾慎造君所藏)

(唐詩選中の詩を書せり)

晉水名は謙、字は士亭、又た萩江と號す。通稱を良藏といふ
大藏の子なり。天保二年歿す。年五十一。

○山田原欽書掛物 (繁澤寅之助君所藏)

(大寧寺十境詩并序を書せり其詩は世に多く傳ふる所なれば今
こゝには略す)

原欽名は頼照、通稱又三郎、原欽は其字、又た舜命と字す。
幼より聰慧にして、神童の稱あり。學を好みて記憶に善し。
十三歳にして天台山の賦を作り、十四歳にして始めて壽徳公
に仕ふ。この大寧寺の詩は、廿三歳の時なり。交遊の士字都
宮遊庵具原益軒雨森芳洲等あり。元祿六年歿す。年二十八。

○羽仁稼亭書手本 (中津江春三君所藏)

(歐陽修の觀山亭記の文を書せり)

稼亭は安政年間、萩に塾舎を設けて、教授をなしし人なり。其
塾舎を塾故堂と云ふ。

○小野石書手本 (同前)

(傳説上の文を書けり)

石書は、もと三田尻の人。萩に來りて敬心堂に教授せり。
○本村鶴巢書手本 (石光新兵衛君所藏)

(日用書翰文を書せり)

鶴巢名は資、字は伯猛、鶴巢はその號。通稱を藤太といふ。

御家流の書を善くするを以て名あり。享和三年二十六歳の時習字の教授を始む。弟子四千七百餘人、文政十二年明倫館習字師となる。萬延元年八十三歳にして歿す。

○野村素軒書掛物 (教諭田總百合之助君所藏)

故國有遺風土人稱館公山河形勝在兵馬瀾闊空社風終成禍家豚忽憑功低回古城下落日弔英雄

甲府懷古

素軒居士

素軒名は素介、素軒は其號。少時福山の小島成齋に就きて書法を學ぶ。今は錦雞間祇候正三位勳一等男爵たり。

○草場居敬書掛物 (安藤紀一所藏)

長 詳 (大字)

居敬名は中章、通稱豹藏、居敬は其字なり。もと長崎の人。

書を林道榮北島雪山に學び、書名世に高し。寶永年間來りて泰桓公に仕ふ。享保二十一年歿す。年五十九。その子孫世々藩の書家たり。

○高島醉茗書手本 (同前)

清の王漁洋の詩を列記せり

醉茗名は恭、字は敬叔、墨潭又た杏園などの別號あり。通稱は良俗といふ。藩の醫員にして、頼山陽晩年の門人なり。

畫の部

○雲谷菴等額畫掛物三幅 (菊屋剛十郎君所藏)

(中 善化 右 山水 左 山水)

等類姓は原、初の名は直治、通稱治兵衛。もと肥前の人にて雪舟の畫法を學び、其筆意を得たり。是より先、雪舟の弟子

惟馨、師につぎて雲谷菴主となり、その弟子等羅また之を繼ぐ。畫統中ごろ絶えしが、天正年中毛利天樹公、直治を用ゐて菴主たらしむ。乃ち容膝等額と稱し、法橋となる。元和四年歿す。年七十二。

○佐佐木縮往書掛物二幅 (有吉次三郎君所藏)

右 梅に鷹 左 梅に鯉

縮往七十七歳寫

縮往字は洵眞、通稱平太夫。經學文章を善くし、その餘暇に畫を好み、明人の筆蹟に法り、自ら機軸を出して一家をなす

菴生徂徠その畫を賞し、王綱川文衛山に比す。享保十九年六月十八日歿す。享年八十六。縮往好て關羽を畫かく。これを

描かんとするや、先づ擔端に大鏡を掛け、庭に床几を置き、自己之に腰し、妻女をして箆を執りて侍立せしむ。岡倉の青龍刀を捧持するに擬するなり。しかして鏡中を窺ひて姿勢を

繕ひ、意に適すれば筆を取り、然らざれば、誦時を過ぐるも止まず。妻女之に困却せり。門人に張天然井上親明あり。

○山縣鶴江畫掛物三幅 (菊屋剛十郎君所藏)

中 住吉 右 衣通姫 左 人丸

鶴江、名は英、字は子榮、通稱俊平。書畫を善くす。容德精恭清徳三公に仕ふ。遊歴中長崎に在りて、沈南蘋張秋谷と交

る。自ら其風あり。享和二年歿す。年四十九。

○林百非畫掛物 (有吉次三郎君所藏)

蘭竹石を描けり。上に左の記載あり。

谷口春殘黃鳥啼辛夷花落杏花飛獨倚幽竹山窗下不改清陰待我歸

山外山樵寫三愚併係以錢起詩

○義寛齋畫額 (教諭田總百合之助君所藏)

水景山水。 上に近藤芳樹の贊歌あり。

かへり來る泉郎が鶴舟の席帆や暮るれば閑の衾かゝらん 芳樹

寛齋また晩山、桃溪と號す。公畫は其字なり。本姓杉山氏。師なる義徹山の家を嗣ぐ。大政維新に際し、大に盡す所あり

後、帝室技藝委員に擧げらる。明治廿七年八十一歳にして歿す。

○同人畫手本 (同前)

○吉屋等額畫掛幅

福内鬼外の意を描けり 等額通稱權右衛門。その事蹟詳ならず

○藤山八眉畫 (教諭田總百合之助君所藏)

菊を描けり

八眉の傳記明ならず

庭球部記事

九月二十三日、放課後、秋季大會を、田中部長、永松、石津兩君審判の下に、第一「コート」に舉行せり。白軍波多野組、紅軍大草組にて、兩軍の決戦は開かれしが、紅軍は才連戰連敗するに反し、白軍にありては、光本組、安戸組の優退軍を出し、意氣頗る旺なり、其後數番の決戦ありしも、共に平凡にして、特

百非名は詰字は通、一字は愚公、通稱は眞人、又た太平山人如是、百是、百飛將軍などの別號あり。其書室に山外山房、無垢城、古香精舍、山更幽處などの名あり。防府の醫莊原養安の第二子。出でて、萩の林一雲の養子となる、初め畫を矢野管山に學び、萩に於ける南畫の唱首たり。然れども、これ其餘技のみ。才文武を兼ね、山鹿流の兵法を吉田氏より受く吉田氏の孫、百非の教訓を受けて、家學を繼ぐことを得たり松陰先生是なり。田能村竹田百非を稱して、得易からざる士人と曰へり。嘉永四年歿す。年五十六。國學者冷泉古風は其弟なり。

○佐伯圭山畫 (同前)

梅月を描けり。

圭山名は徹、通稱麗八郎、また擬絶と號す。舊長藩御用所の吏員たり。林百非に就きて畫を學ぶ。晩年筑後國三池に寓居し、其地にて歿す。

○羽塚西雅畫 (菊屋剛十郎君所藏)

山中宮殿彩畫。聖清宮にもあるべし。歎詠左の如し。嘉永辛亥

秋八月授筆至明年臘月始成是日丁丑於新添之寓處西雅師古

西雅名は師古、通稱宗四郎。出雲の雲鳳に就き畫を學ぶ。性

高潔、少しも街氣なし。畫は寫生に長ず。米國人、その墨梅

を激賞せりと云ふ。明治十一年四月十日歿す。年六十九。

○古山雪洞畫一枚 (教諭藤井百輔君所藏)

六老人一稚兒を描けり

雪洞の傳記詳ならず。

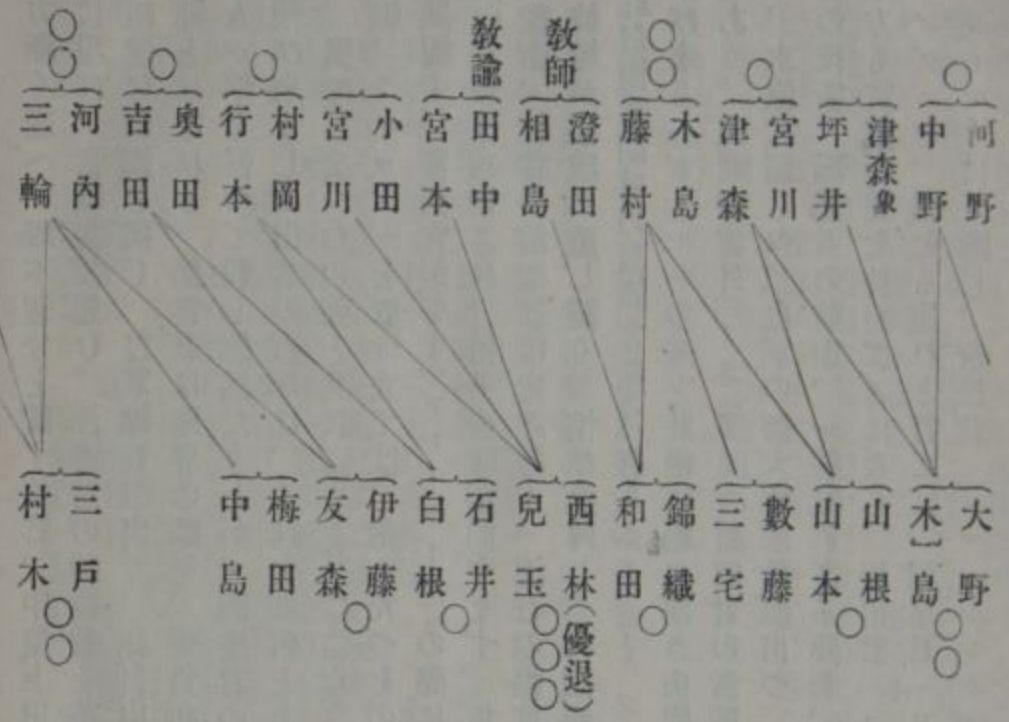
筆すべきものなかりしが、白軍西林組出づるに及び、戰漸く佳境に入り、西林君の猛球と兒玉君の「ロビン」とは、共に敵對するものなく、遂に優退せり、得意想ふ可し。澄田教師組對和田組陣頭に現はる。澄田教師は、教師中の雄將、能く防ぎ、能く戦はれしも、時利なく、遂に和田組の爲に敗北せられしぞ無念の極なる。木島組、仇敵ござんなれど、得意の猛球を送れば、和田組聊か逡巡の色あり。木島組ここぞと附入れば、和田組遂に城下の盟を爲せり時に北風や、強くなり、勇士の苦戦一方ならず。數藤組代りて對陣す。數藤君得意の「スマツシング」に敵も一時苦境に陥りしが、三宅君案外に「ミス」多く無念の涙を吞んで退く。木島組已に二雄を敗り、意氣頗る軒昂、續く山根組をも一揉に揉み潰さんと、直球を送れば、山根組もさるものにて、山根君の「カッチングボール」と山本君の「スマツシングボール」とは、効を奏すること甚だしく、木島組全力を傾注せしも、陣形漸く亂れて、遂に敗北す。木島組に代りて現はれしは津森組なり。津森君、體軀小なりと

雖も、頗る機を見るに敏に、屢々敵の弱所をつき、神出鬼没の技を弄すれば、流石の山本組も刀折れ矢盡きて降り、木島組悠然陣頭に現る。木島組は二年級の精銳、津森組を破り、坪井組を斃し、續く中野組をも打ち取らんずる勢實にすさまじかりしが、河野君と云ひ中野君と云ひ、共に三年の驍將にして、特に中野君は、誠之學舎に其の名高き後衛なりしかば、其の直球大野君の足元を衝き、木島組爲に斃る。白軍下瀬組代り、仇敵思ひ知れど、下瀬君得意の「スマツシング」を送れば、中野君「ロビン」にてこれに應じ、河野君前衛に走り出で、敵の虚を衝かんとすれば、山田君「カッチングボール」にて送り返し、戦ふこと良久し。已にして河野君「ミス」多きに反し下瀬君の前衛比類なき功を奏し、遂に凱歌を揚げたり。後藤組出づる頃、日漸く西山に傾き、戰愈々酣なり。後藤君悠然と得意の直球を送れば、山田君「スマツシング」にて應じ、植田君、猛球を下瀬君の足下に投ずれば、下瀬君得たりかしこしと、「ネット」をかすめて植田君の虚をつき、互に秘術をつくして攻め合ふ様、見るものをして手に汗を握らしむ。後

藤組力漸く衰へ、雖不逝今を賦する時、中堅上田組陣頭に現れ、奮戦甚だ勉む。渡邊君の妙技敵を苦め下瀬組遂に白旗を掲ぐ。白軍綿貫組出で、紅白中堅の對陣とはなれり。綿貫君は斯界の麟兒、勝負如何にと人々拳を握つて暫し黙然たりしが、渡邊君の足下に飛び來りし山田君の直球は、これを如何ともし難く、「嗚呼しまつたの聲と共に、恨を吞んで退陣す。坂田組、「ラケット」を取り立てば、衆かたづをのんで、默觀す。審判官が下す「プレーボール」の聲に、兩軍の宣戰は布告され、拍手少時が間やまず。坂田君の後衛、林君の前衛既に定評あり。流石の綿貫組も、彼等が猛球に敵し難く、悄然退陣し、村岡組代り、紅白兩軍副將の對陣となる。打ちふる「ラケット」と飛び來る「ボール」の音と壯絶快絶血湧き肉躍るの感あり。上利君案外「ミス」多く、村岡君の奮戦苦闘も、水泡に歸しぬ。白軍の御大將永松組出づ。永松君の後衛、堀尾君の前衛、一絲亂れざる陣形、敵も味方も賞讃の聲を放たざるはなし。坂田君「スマツシング」を、楯をも通れと打てば、堀尾君「ロビン」にて應じ、永松君「スマツシング」にて應じ、

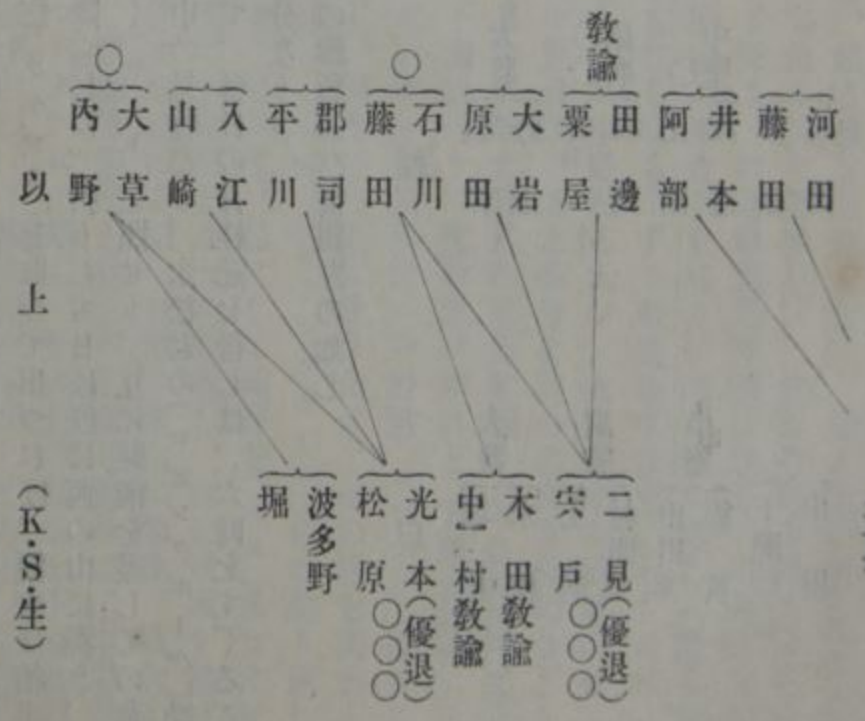
敵の虚をつけば、林君「カッチングボール」にて應じ、いつ果つべしとも見えざりしが、流石は永松組、遂に坂田組を降す。紅軍の總大將野上組悠悠「ラケット」を取つて出づれば、觀衆は拍手の雨を降らしぬ。折りしも日は既に西の山に春き、殘光長く「コート」を照せり。互に秘術を盡しての奮戦當日中の見物なり。永松君の「ロビン」功を奏して、當日の月桂冠を得しは、六時をすぐること三十分なりき。當日の勝負及び番組左の如し





五月九日、石津君の審判にて、二年對一年の對級試

野球部記事



合を舉行す。競技者は勿論、應援者も、對級マツチのこととて共に慎重の態度を取り、互に秘術を盡して奮闘せしが、遂に二年級の勝に歸したり。當日のメモバー及び成績次の如し。

紅 木須松 津宮山 山梅
 年二 島子 井森 田本 根本 田 37. 1. 3. 8. (和) 16.

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.
 打死四三得
 數球球振點

白 和二 田内 原大 穴林 平
 年一 田見 村野 田岩 戸 川 29. 1. 1. 5. 4. (木)

五月十三日、第三年級對二年級の試合を舉行す。兩軍必死の勢にて闘ひしが、憐れなるかな三年軍遂に打ち破られたり。そのメモバー及び成績次の如し。

紅 河吉 上小 坪津 行池 村
 年三 野田 利田 井森 本内 岡 34. 0. 1. 5. 8. (木)

五月十九日、數藤君の審判にて、四年對二年の試合を舉行す。三年を打ち破りたる二年軍は、茲にも其の銳鋒を向けて、四年の堅壘を衝かんとせしが、流石は四年軍、其の手は食はず、忽ち二年軍を打ち破れり。其のメモバー及び成績次の如し。

白 木須松 津宮山 山梅
 年二 島子 本森 田井 根本 本 34. 0. 7. 6. 14. (河)

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.
 打死四三得
 數球球振點

紅 武阿 西三 益坂 下藤 上
 年四 林部 林好 田田 井田 田 34. 0. 2. 3. 10. (木)

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.
 打死四三得
 數球球振點

白 木須松 津宮山 山梅
 年二 島子 本森 本井 根本 田 29. 1. 4. 6. 7. (武)

の試合を舉行す。互に秘術を盡して肉迫せしも、老功なる五年軍、難なく聯合軍を破りたり。當日のメムバー及び成績次の如し。

紅 數岡下堀石渡土野三
年五 藤村瀬尾津渡肥上宅 28. 1. 6. 6. 12. (武)

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F. 打死四三得 數球振點

白 武田松上益河山大木 22. 0. 4. 11. 5. (數)

聯合 林 中本利田野根岩島

五月廿五日、第一中隊對第三中隊試合を舉行す。審判は岡村君にて、第一中隊の勝に歸したり。當日のメムバー及び成績次の如し。

紅 數下松三坪堀山山和 31. 2. 2. 8. 13. (士)

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F. 打死四三得 數球振點

紅 渡岡西三河大津吉内 32. 2. 9. 7. 14. (堀)

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F. 打死四三得 數球振點

白 堀數下三坪松山山和 29. 3. 5. 4. 8. (渡)

第一回、二中軍先づ攻撃す。河野君三振し、津森君四球にて一壘を得、次いで大岩君四球に出て、岡村君三壘をオーバーゼンとして打ちしも、一壘に仆れ、次いで三宅君亦仆る。一中軍代り、先づ山根君四球にて進み、堀尾君三振し、數藤君の犠牲球にて山根君本壘に入りて一點を得、下瀬君死球にて出てしも、松井君の三振のため何の爲す所もなかりき。第二回、西林君中堅にグラウンダーを痛打し、渡邊君三壘を掠めて進み、吉田君の二壘オーバーの爲め、西林君渡邊君一舉に生還して二點を得、次に内野君一壘に打ちて自ら死し、河野君津森君共に凡死す。

白 土須八木石坂津上植 31. 4. 2. 5. 9. (數)

五月廿九日、第二中隊對第四中隊試合を舉行す。當日の審判は數藤君にて、第二中隊の勝に歸したり。其メムバー及び成績次の如し。

紅 渡岡西三河大津吉内 33. 0. 5. 9. 16. (武) A

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F. 打死四三得 數球振點

白 武田松上益津山宮野 20. 0. 1. 11. 3. (渡)

五月卅日、井町君審判の下に、第一中隊對第三中隊の決戦試合を舉行す。兩軍の選手熱血を注ぎて戦ひしが、月桂冠は遂に二中軍の手に歸し、名譽ある優勝旗は二中軍の得る所となれり。當日のメムバー及び成績次の如し。

一中軍坪井君死球にて一壘に進み、和田君山本君三好君相ついで倒る。

第三回、大岩君四球にて出て、岡村君一壘に打ちて死し、三宅君右翼にグラウンダーを好打して、大岩君生還、西林君亦右翼に好打し、三宅君生還。渡邊君四球に出て、吉田君一壘に自ら死するや、渡邊君亦仆る。一中軍代り、山根君百球を利して進み、堀尾君右翼に打ちしも、二壘にて仆れ、數藤君遊撃に猛打して一壘を抜き、山根君生還す。下瀬君二壘に飛球を打ちしも、二壘手の失にて進壘す。松井君坪井君和田君等の爲す所なきによりて止む。第四回、内野君四球にて一壘を占め、河野君三壘に打ちて死し、津村君遊撃を破りて一壘に進み、内野君生還す。大岩君三振し、岡村君右翼に飛球を打ち、津森君生還す。三宅君遊撃を破りしも、西林君投手にグラウンダーを送りて自ら一壘に死す。攻守地を轉じ、三好君投手の爲めに飛球を獲られて死し、山根君遊撃オーバーにて進み、堀尾君左翼に好飛球を送り山根君生還。數藤君左翼にフライを打ちて捕はれ、下瀬君ファウルを高く打ちて捕手に獲られて仆

る。

第五回、渡邊君四球に出て、吉田君三壘にグラウンドを送りて付れ、内野君四球にて進み、河野君津森君共に四球にて満塁となる。一中軍氣をいらち、大岩君の三振にて稍安心せしも、岡村君の強打手立つや、中堅に好フライを打ちて、一擧に二點を得、三宅君一壘オパーにて進み、西林君右翼を掠めて、津森君岡村君生還。渡邊君中堅に打ち、三宅君西林君生還。吉田君死球にて進みしも、内野君三振して止む。一中軍遂になす所なかりき。

第六回、河野君フライを中堅に送りしも、中堅手の失策のために進み、津森君三振す。大岩君二壘にフライを送りて一壘に進みしも、二壘にて遊撃よりの球によりて倒る。岡村君の遊撃オパーにて河野君生還。三宅君立ちしも、一壘に倒れ、一中軍代る。三好君三壘にフライを打ちて自ら死し、山根君二壘オパーにて進み、堀尾君數藤君共に倒る。

第七回、西林君右翼に打ちて一壘に進み、渡邊君吉田君内野君三振す。今や二中軍も振はずなりければ一中軍元氣を鼓舞し、下瀬君立ちしも倒れ、松井君

紅 石須 八坂 津木 土上 植

(武)

三 中津子 谷田 田島 肥田 田

25. 3. 5. 2. 17.

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.

打死 四三得
數球 球振點

白 武田 松上 益津 伊宮 野

21. 2. 2. 6. 10.

四 中林 中本 利田 森藤 本上

(石)

十一月一日、第一中隊對第二中隊試合を舉行す。本試合は未曾有とも云ふべく、九回に至る。勝敗決せず、遂に日没時となりて止むなく中止し、翌日再び試合を繼續せり。互に必死となりて戦ひしも、一點の差を以て二中軍の勝となれるぞ一中軍にとりては實に遺憾の極みなりし。當日のメモバー及び成績次の如し。

審判窪田教諭

石津君

紅 數下 松村 三坪 山山 和

(擴)

中 藤瀬 井木 好井 根本 田

47. 5. 15. 7. 27.

會報

四球にて進み、坪井君左翼に打ち、和田君山本君三好君等凡死のため止みしも、松井君生還せり。

第八回、河野君四球に、津森君死球に進みしも、大岩君岡村三宅の三君凡死せしたため何のなす所なかりき。一中軍山根君四球に出て、堀尾君投手にフライを獲られ、數藤君死球にて進み、下瀬君左翼に好打し數藤君生還し、下瀬君一壘にて投手よりの球にて立死す。

第九回、西林君二壘に進みしも遊撃手のために死し渡邊吉田内野君凡打のため皆倒れ、一中軍代る。愈々此の回を以て勝敗は定る故、各自重せしも、坪井君生還せしのみにて、竟に恢復する能はざりき。是に於て二中軍十四點一中軍八點にて二中軍の勝となり。時恰も六時過ぎ夕陽遠く西山に没せんとする頃ほひなりき。

十月廿八日、第三中隊對第四中隊試合を舉行す。四中軍の健兒一擧にして三中軍を屠らんとせしかども却つて三中軍の爲めに遂に立つ能はざらしめられたり。當日のメモバー及び成績左の如し。

審判數藤君

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.

打死 四三得
數球 球振點

白 渡三 西光 津小 藤吉

53. 9. 15. 4. 28.

中 邊宅 林本 森田 田

(數)

十一月五日、第二中隊對第三中隊決戦試合を舉行す。三中軍の大膽なる積極的策戦に對して、二中軍は消極的の策戦をなし、初は不振の如く見えしが、最後の攻撃に再び名譽の優勝旗を得るに至れり。當日のメモバー及びその模様を左に示さむ。

紅 石須 八坂 津木 土上 植

(渡)

三 中津子 谷田 田島 肥田 田

20. 0. 2. 6. 3.

P. C. I.B. II.B. III.B. S.S. L.F. C.F. R.F.

打死 四三得
數球 球振點

白 渡三 西光 津小 藤錦 吉

17. 3. 1. 4. 5.

中 邊宅 林本 森田 田 織 田

(石)

第一回、三中軍先づ攻撃し、第一打者坂田君ボック

スに立ち、渡邊君の初投球を左翼にフライを打ちて進み、津田君一壘にグラランダーを送りて自ら死し、木島君を左翼にグラランダーを送りて、坂田君本壘に入る。須子君一壘にフライを打ちて斃れ、石津君の二壘オーバーにて木島君生還、土肥君投手目がけて好グラランダーを打ち、石津君本壘に突入す。八谷君遊撃にグラランダーを送りて進みしも、土肥君二壘にて遊撃手のために斃れ二中軍代る。津森君死球にて進壘し、渡邊君右翼にグラランダーを送りて死し、三宅君中堅にフライを打ちて獲られ、西林君中堅にグラランダーを送りて津森君生還、小田君なす所なくして止む。

第二回、上田君投手にグラランダーを打ちて斃れ、植田君投手を抜き、坂田君中堅にフライを打ちて獲られ、津田君三壘にグラランダーを送りて進みしも、木島君左翼にフライを打ちて獲られ、三中軍代る。吉田君三振し、光本君亦三振、藤田君遊撃にグラランダーを打ちて一壘に斃る。

第三回、須子君投手にグラランダーを送りしも、一壘手の失策にて一壘を保ち、石津君左翼手にフライを

投手倒れよとばかりに打ちしグラランダーも、投手一壘に送りて斃る。津田君遊撃オーバーせんと満身の力をバットに注ぎてグラランダーを送りしも、其の効なく一壘の露と消ゆ。木島君かくてはならじと雙腕に力を入れ過ぎし爲めか三振したり。二中軍今やあらゆる秘術を盡しボックスに立つ。小田君左翼にグラランダーを熱打せしも斃れたれば、吉田君勇心勃勃として三壘を掠めて一壘に進む。光本君死球に出てたれば二中軍意氣漸く揚り、藤田君三壘にグラランダーを打ちて一壘を保ち、今や満壘となれり。石津君三中軍の運命を負ひ氣を落ち着けて投球するや大岩君三振す。是に於てツィアウトとなる。次にボックスに見れしは津森君なり。二中軍の運命實に君の一打にあれば、満身の勇を鼓し、砕けよとばかりに打ちしグラランダー、三壘を掠めて、遠く左翼に疾風の如く飛びしかば、壘上のランナーここぞとばかりに一舉に生還し、是に於て大勢已に定れり。續いて渡邊君進み、三宅君四球にて出て、西林君死球を利し津森君生還し、小田君竟に三振して本ゲームは終れり。二中軍が凱歌を擧げて相祝せし時は方に五時頃

獲らる。土肥君三振、續いて八谷君亦三振す。二中軍大岩君三振し、津森君三壘手に打球して斃れ、渡邊君右翼を掠めて進みしも、三宅君のフライを中堅に捕はれしを以て止む。

第四回、上田植田兩君三振し、坂田君四球を利して進壘せしも、津田君の二壘にグラランダーを送りて一壘に斃れしを以て止む。二中軍西林君三壘手に猛打せしも抜く能はず、小田君投手にグラランダーを飛ばし、一壘手、投手よりの球を逸せし爲め僅かに二壘に進む。吉田君中堅手にフライを打ちて自ら死し、光本君投手に弱打して一壘に斃る。

第五回、木島君中堅を抜きて進みしも、投手のために二壘に斃れ、須子君三振、石津君四球によりて進み、土肥君一壘に斃る。二中軍代る、藤田君三振、大岩君中堅にフライを打ちて死し、津森君三振す。第六回、八谷君上田君内野を打ち抜かんとして共に斃れ、植田君三振す。二中軍代り、渡邊、三宅、西林君等相續いて斃る。

第七回、本試合に此回を以て終りとすに依り、三中軍愈々最期の攻撃なりと大に意氣込み、坂田君の

なりき。(N.S.生)

漕艇部記事

五月二十七日、我萩中の健兒は、この記念すべき日を卜して、和船競漕會を橋本川に開催せり。午前十一時日井海軍大尉の日本海海戦講話了りて、全員、各中隊旗應援旗を先頭に翻して、橋本川畔に押し寄せたり。春日長しと雖も、今より、二十七回の競技を演じ終へんことは容易ならぬ事なれば、五年級を始め、各級の委員必死となり、互に氣脈を通じて、敏捷その度を極めたれば、さしも多數の番組を、午後六時までの間に滞りなく行ふことを得たり。この日天朗にして南明寺山翠濃かに、橋本川藍の如く湛へたり。號砲一發また一發、三隻の艇は歡呼の聲に送られて走り、歡呼の聲に迎へられて決勝點に入る橋上に、堤上に、群集は手巾を振り、紅傘を動かして應援の聲また萩の小天地を震撼せんばかりなりき。洋々たる樂聲は、十分間毎に發射せらるゝ煙火の響と相應じて、健兒の血潮沸え且つ躍れり。當日の呼物たりし中隊選手競漕の、各選手數日の猛烈なりし

練習に比しては頗る不満足なる成績なりしは残念なりき。然れども使用既に久しく、處々浸水の患ある老朽艇を以てして、能く去年のレコードを破ること二十二秒なりしは、不満足ながらも我萩中の健兒の體力技術の進めるを見るを得べし。なほ今回に於て特筆すべきは、從來萎靡振はざりし卒業生競漕が、四分五十秒なる好成绩を収めたる事と、中隊てふこととに冷淡なりし健兒の氣風一掃せられて、眞面目に中隊のために熱情を捧ぐるに至りしことと是なり。左に當日興味ある成績を挙げたる艇員並に中隊競漕艇員をあげ、あはせて、その勝負の分るゝところを略説し以て後日の參考に供せむ。

第十一回(四分四十一秒) 第十三回(六分十三秒)
 西林 鴻介 堀尾 嘉一
 松井 三雄 平山 茂
 村岡 淺一 永松 元治
 田總 時俊 兼重 政輔
 大津 藤一 八谷 茶三
 艇員力を協せて悠々敵艇を抜き終に至るまで極力奮闘せり
 堀にありし堀尾君先づ落ち平山君次で落ち残り三人にて僥倖の勝を占む

中隊選手競漕
 第十七回(九分三十秒)
 山下眞一 植田源熊
 石津 渚 坂田義亮
 須子英一
 第二十回(九分十八秒)
 村本好郎 堀尾嘉一
 數藤直衛 三好市郎
 松井政平
 第二十七回(九分二十八秒)
 村本好郎 堀尾嘉一
 數藤直衛 三好市郎
 松井政平
 (勝)第一中隊 (敗)第四中隊
 飯田治郎 金子潤介
 野原英弼 武林治郎
 河野 匡四郎
 (勝)第三中隊 (敗)第二中隊
 阿武真雄 西林鴻介
 山中尙夫 勝野秀信
 三宅十六
 (勝)第一中隊 (敗)第三中隊
 山下眞一 植田源熊
 石津 渚 坂田義介
 須子英一
 (G.U.生)

會友訃音

第四學年生中村百合藏君は、脊髄病にて久しく醫療を受け居られしが、藥石効なく、二月十日遂に死去せられたり。
 郷里三見村にて加養中なりし第三回卒業生吉田光胤君は、三月某日死去せられたり。
 第九回卒業生永松力君は、大阪高等工業學校在學中病に罹りて郷里に歸養せられしが、八月二十七日遂に死去せらる。
 第五回卒業生國重熙君は、東京私立高等農學校を卒業して、朝鮮總督府農場に奉職中、不幸にして病に罹り、十月三日を以て死去せらる。
 第二回卒業生佐伯益豐君は、外國語學校英語科を卒業し、佐賀縣立佐賀中學校に奉職中、病を獲て歸養せられしが、十月四日遂に死去せられたり。
 第八回卒業生椋木貞一郎君は、神戸高商に進學せられしが、偶々病を獲て、十月四日遂に死去せられたり。

大正元年度會費收支決算報告

收入ノ部	支出ノ部
一金七百七拾八圓八拾錢	基金蓄積費
一金百拾參圓拾壹錢	短艇新造全上
一金五拾五圓五拾八錢五厘	劍道部
合計金九百四拾七圓四拾九錢五厘	柔道部
	野球部
	短艇部
	遊泳部
	雜誌部
	辯論部
	書道部
	圖書部
	褒賞部
	生徒會費
	職員會費
	雜收入

一金九拾八圓六拾錢

一金四拾七圓六拾五錢

一金貳百拾四圓貳拾貳錢

合計金九百四拾七圓四拾九錢五厘

大正元年度基本金決算書

一金八百五拾參圓參錢五厘

一金四百八圓貳拾八錢五厘

金百圓

金四拾七圓參拾八錢

金貳百拾四圓貳拾貳錢

金四拾六圓六拾八錢五厘

合計金千貳百六拾壹圓參拾貳錢

雜費

臨時費

剩餘金基金編入

前年度繰越金

本年度實收高

小原彌一郎氏ヨリ寄附

校友會費ヨリ蓄積ノ分

全上決算剩餘金

金利子

惠贈雜誌目

本會は左記雜誌の惠贈を受けたり記して謝意を表す

友白一月號 帝國在郷軍人會本部

友白十一月號 水戸中學校

友白十二月號 中津中學校

友白一月至五月號 返子開成中學校

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

友白一月至五月號 同

藝苑

校庭

第一學年 田中政太

見よ。外は高さ白楊に圍まれ、内は諸教室に限られたる我が校庭に、我等の嬉々として遊べるを。庭球コトに、ボール低く來り高く往き、ラケット右に左に閃くあり。或は鐵棒、或は柵に身を練るあり。或は日常りよき軒下に、談笑に耽るあり。あゝ校庭は、課業に勞れたる腦に慰安を與へ、更に來るべき課業の準備の外に、身體を健全ならしむる所なるかな。されば諸子よ。大いに遊べ。大いに身を練へよ。我が校庭は、清潔なる廣場に、多くの運動諸器具を以て諸子を待てり。聞け。後に高さ白楊を負ひ、外は三方を草原に圍まれたる校庭に、耳を劈く如き躰操教師の號令の發せらるるを。靴音高く、隊伍整然として行進するあり。「一二」の掛聲勇しく、活潑に躰操するあり。或は、「右向け」、「左並び」と、規律よく動作をなすあり。或は機械躰操に身を鍛ふるあり。あゝ、校庭は活潑規律の精神を養成し、且身躰を練磨する所なるかな。されば諸子よ。大いに元氣を揮へ。大いに運動せよ。我が校庭は清潔なる廣場に、多くの運動諸機械、及び嚴格なる躰操教師を以て、諸子を待てり。

更に思へ。數日前、赤白青の小旗、高く青空に飄り、南北の綠門は、綠葉參差として、黒山の如き觀客を迎

へたる此の校庭に、我等の愉快に競争したるを。戴囊スプーンに、球を落してスゴ〜と歸るあり。或は千米、或は八百米に衆を抜き、或は障害物に、袋を潜り、梯子を登り、綱を脱するあり。或は源平試合に、竹刀の音勇しく、勝ちて凱歌を擧ぐるあり。あゝ、校庭は、活潑敏捷忍耐規律剛健の如何を試む所なるかな。されば諸子よ。大いに競へ。大いに鍛へよ。我が校庭は清潔なる廣場に、美麗なる裝飾、親切なる役員を以て諸子を待てり。

更に見よ。降雨數日を経たる爲に、我が校庭に塵芥溜り、雜草茂たるを。清潔ならしめんが爲に、我等の勞働せるを。鋏取りて草を掘るあり。箒持ちて塵を掃き集むるあり。石を運ぶあり。あゝ、我が校庭は、堅忍勞働勤勉の美風を養成する所なるかな。されば諸子よ。大いに働け、大いに勉めよ。我が校庭は、塵芥雜草の廣場に、箒箒等を以て諸子を待てり。

吾妻艦縦覽の記

前題、一
回添削

同 竹内 八郎

八月廿七日、余等數人は、小舟にて吾妻艦へ向ひぬ。新川を下れば、はや洋洋たる大海にして、遙の沖に碇泊せるは、即ち吾妻艦なり、黒煙を噴きつゝ、堂堂たる雄姿を波上に横たへたるは、實に、壯とも快とも、言はむかたなし。さて、余等の舟は、刻一刻に、艦に近よりぬ、前後左右には、艦に向ひて進む小舟の數多く、弱き女どもの呼ぶ聲、喜色満面の少年等が、威風勇く、腕を輝ふ様、大きものじや〜など言ふ大人の話聲

も聞ゆ。當日、恰も風強くして、波浪高ければ縦覽者は、多少の困難あり。磯の方を見れば、岩に碎くる白波の飛び散るに、折しも、一羣の千鳥の飛び立つ景色も趣あり。やがて、軍艦は眼前となりぬ。山かと思はるばかりの大艦體は悠悠として、波上に座せり。余等は直に其の甲板に上りぬ。かくて甲板上にて、清き海氣を吸へば、愉快いふべからず。水夫の案内にて、艦長室を始め、醫者室食堂、水夫室を巡覽し、遂に無線電信室に到る水夫は、毎事一一に説明せり。次に大砲を觀、水雷艇を見る。總ての事規模の壯大なること驚くべし。次に、余等は、日露戰役に於ける當艦の履歴を聞き終りぬ。時に午後四時なり。是に於て、余等は吾妻艦の萬歳を祝して去れり。小舟に移りて歸るさに遙に軍艦を振りかへり見れば、夕日の影ばつゝ艦長室の硝子戸より反射して目ばゆし。

紅葉狩に友を誘ふ文

前題、一
回添削

第二學年 藤井 健三

拜啓。秋色まさに深く、金風颯颯として吹き、昨日まで青葉と見し山山、何時しか錦を織り出し、夕陽照り添ふなど、山水の景その程を得、殊に美麗と相成り候て、野外散步の好時節と存じ候。幸ひ明後日は日曜日にも御座候へば、朝八時より杜牧に擬して、阿武川上流の楓林に紅葉狩を試んと存じ候。一は以つて精神を休養し、一は以つて後日長距離遠足の演習ともなし、尙又圖書作文の資料にもせんと存じ居り候。幸同志者も兩三名之れ有り候。平素健脚なる貴兄の事とて、定めて御加盟の事と存じ候。追つて集合場は金谷天神前

辨當は各自携帶のこと、相定め候。先は御誘ひまで如斯に御座候。草々頓首

余の一坪農園

即題、一回添削

同 松尾剛介

余に一坪の農園あり。こは余の一學期の始めに得しものなり。「光陰矢の如し」とか、今は早嚴寒を目前にひかへ、農園も亦寂びくれて、大根數株を残せるのみなり。余の始めて農園を得し時は、土地こそ肥沃にして新なれ、草茫茫として瓦石あること其の數を知らず。實に一つの荒地に過ぎざりしなり。草木漸く緑をこくする頃より、開墾にかかりて、其の出來上りてよりの思案こそ面白けれ。始めは大根を植ふんと思ひしが、心はいつしか茄子に、又白菜にうつりて、決すべくもあらざりしが、斯くてあるべきにはあらねば、終には意を茄子と大根とに決し、其を植ふたりき。苗は近所の農家より貰ひしものなり。其の收穫期に至れば、諸子或は茄子に爪を立て、或は大根をぬき取るものありければ、余は遂に其を收穫して歸れり。こは五六個の茄子と四五本の大根とに過ぎざれど、自ら開墾し自ら植ふ培て得しものなれば、何となく愉快にほほゑまるる心地しけり。

斯くて第二學期に至り、秋の野菜を植うる時機となりければ、之も亦農家より求めて、聖護院大根を植ふたり。始めの程は雨の爲めに流されしも、種を播くこと再三にて、漸く芽をふきぬ。斯て日頃の培養其の宜しきを得、大の大根を作るに至れり。其の間數度人のぬく所となり、或は自ら收穫して歸りぬ。今は只だ數株を残すのみとなりて、余の農園も年の暮れと共に寂れ行く感あり。

舊師に贈る文

即題、一回添削

同 須子英一

拜啓。追々寒氣相催し候處、先生には御起居いかにや、伺ひ上げ奉り候。降て、私事幸に風邪にも犯されず至極健全にて日々通學いたし居り候へば、憚りながら御安心下され度候。光陰矢の如しとかや、早や臨時試験は此の週にて終り申し候て、學期試験も目睫に通り候。此の度の試験には努力奮勵致し、天晴好成績を贏ち得て、以て前年の汚名を雪がんと、覺悟致し居り候。何時も御懇篤なる御玉章御送り下さる毎に、勉強せよと仰せられし事は、一日も忘れ申さず、常に心肝に銘し居り候。私は今日に至りて始めて學問の趣味を覺え、何となく愉快の念を生じ候。是れと云ふのも全く先生の日頃懇篤なる御訓諭の御蔭と、今更身にしみて難有、將來有爲の人物となりて、高恩の萬一にも報ひ奉らんと、日夜焦慮いたし居る次第に有之候。此の上とても何分御指導の程一重に願ひ上げ候。尙時節柄御身御大切に遊ばさるゝ様願上候。敬具

水

即題、一回添削

同 長嶺元二郎

我等が世の中に何不自由無く生活して行くには、種々必要な物もあるが、就中水の如きは、一日も缺く事の

出来ぬ大切な物である。先づ草木が青々と野山を飾り、時に白雲の様な花を咲かして人目をよろこばせ、又美味な果實を結ぶ事の出来るのも、水の恵が興つて力があると云はねばならぬ。又大洋溪谷の美を稱し、漕艇游泳の興を得るのも、皆水があつてこそ出来るのである。否水の効力は當此の様な微々たるものゝみではない。直接人類が生命を繋ぐに無くてはならぬものである。即ち我等が毎日要する飲食物は、悉く水の力で出来たものである。若し世の中より水を取り去つたならば如何であらう。木は枯れ草は萎び、禽獸は悉く餓渴にたへず悶えくるひ、或は死し、世は一望漠々たる荒野と化して、此れ等の屍は致る所に散在し、光景轉々悲惨を極むるであらう。斯の如く水は吾人に取りては極めて大切なものであるが、時としては洪水海嘯となりて人畜を害する事もある。然し此は天が下界の人民をして、安逸に流さしめぬ爲の刺戟ではあるまいか。

雲

雀

即題、一回添削

同 三輪 杉門

見渡す限り一面野も山も霞棚引きて、さながら淡紅の幕を引廻したるが如く、柳を渡る春風もいと心地よし百花瀾漫花を訪るゝ蝶も亦一段の趣を添ふ。空にあたり姿は春霞に包まれて、其の聲ばかり大なるかの雲雀は、この樂園の如き春景色を眼下に眺めつゝ、其の樂しさや如何なるべき。青々としたる麥田の中へ、飛礫の如く雲間より落ち來り、又得意の歌を歌ひつゝ大空指して上り行くは、雲雀の日日の課業なり。かくて麥實りて百姓の鎌を入るゝ時、はや雲雀の雛は大きくなりて、其の親と連れ立ち始めて春の霞の中を、遙か彼方へ飛び去るなり。嗚呼我々も雲雀の如く霞の中に其一生を送りなば、其の樂やはた如何ならん。

我が好める運動

即題、一回添削

同 進藤 常雄

緑は日に濃く、暑さ日に高まる初夏、廣き野外に出て快球を飛ばし、バットの響山彦に返され、又ダリアの花咲く庭園に、ラケットも亦快ならずや。然れども二者共に運動の技として、未だ完全ならず。又季によりて爲すこと能はざるの憾あり。余は理想的運動として、我國古來より傳はれる剣道柔道を好む。火花散らして鋭利の白刃を斬り結び闘ふ剣道は、傍觀者をして其膽を寒からしめ、六尺豊かの毛唐をば自由に弄び大地も破れむばかりに投げつくる、活殺自在の柔道を見ては、思はず快哉を叫ぶべし。兩道共に全身を勞し精神に寸分の油断なからしむ。身を斬るが如き寒中は勇しき寒稽古、鐵も鏢かさむ許りの暑夏は、苦しき夏稽古によりて、何時をも分かず勇しく戦ひ、身心を錬磨するをうべし。嗚呼武道なる哉。武道なる哉。斯道は共に我精悍なる幾多の國士を養ひたるに非ずや。毛唐輩何を以て理想となさむとも、我に武道あり。何ぞ恐るるに足らんや。

和船競漕

即題、一回添削

同 三好 忠良

花の下臥す惰眠はゆくりなく覺めて、新緑の精は凝つて滴るばかり、満天滿地皆新緑を以つて充たされた、

時は早月の下旬、丁度海軍紀念日に因みて、短艇競漕は開れたのである。前日の煙雲は霞と消えて、太陽は赫々として、今日の日を祝ふ様であつた。漸く正午過校庭に整列を終へ、中隊旗を先頭に立て、後には中隊の勇士肅々として歩いて行く、其面には有々と物々たる勇氣が表れて居る。漸く一時前に橋本橋の袂へついた。見物人は早橋上に黒山を築いてゐる。一發の銃聲と共に競漕の火蓋は切られた。一齊に起る艦を合す掛聲、舟舷をたたく音、實に快哉を絶叫せずには居られない、中隊は橋を渡つて彼岸へ陣を張つた。折から煙火一發轟くよと見るまに、中から鳥居人形風船の飛び出るのを、友と共に豫言して、的中するかを誇るのも面白い。十二三回には中隊選手競漕ありて第三中隊の勝利となつた。あちらこちら一時に萬歳の聲は百雷の響くかと思はる。次に一中隊對四中隊の選手競漕が始つた。吾等は所屬中隊即ち第一中隊の志氣を鼓舞激勵するため、大に聲援を試みた。其の効ありて遂に我中隊の勝利となつた。競漕は益進みて興は愈加はり、最後に優勝中隊の決戦となりぬ。兩者共に最優の選手我劣じと競漕する様、實に凄く肉躍り骨鳴るを禁じ得ない。かくて遂に最後の月桂冠は我が中隊選手の頭上に落ちて、歡呼の聲は天に轟いた。噫我が中隊は最後の名譽を荷ひ、燦爛たる星章は我が中隊の占むる所となつた。其時の中隊の人々は熱して狂せんばかりである時丁度流石に長さ夏の日も正に西山に暮き、燃ゆる如き夕陽は阿武の清流に映じて金波銀波をたゞよはせ、其壯觀たとへるにものがなかつた。

歳暮の感

脚題、一回添削

同

兒

玉

義

清

古人曰く光陰は矢の如しと。又或は曰ふ奔馬流水の如しと。まことに然り。一度矢を射れば再びかへらず。

河水は一度流るれば再び源泉に溯らず。世人は金錢をもつて最も貴しとなす。蓋しこれ光陰の貴重なるを知らざる小人の言のみ。古來英雄と呼ばれ豪傑と稱せらるる者は、皆この時間を惜み刻苦勉勵したるものなり。吾今この歳暮に當り往時を顧みるに、唯夢の如く碌碌として光陰を空しく過せしを憾む。今にして考ふれば、甚だ残念にして實に斷腸の思あり。我一生はこの一年のつもりつもりで成れるもの、我國家の盛衰は我等第二の國民の奮勵如何によりて決するものなり。豈に覺醒せずして可ならんや。支那古代の聖天子禹は寸陰を惜みたりと云ふにあらずや。吾人は宜しく今日より分陰を惜みて努力し、他日社會に立ち有爲の人物たらんことを誓ふものなり。

雨

脚題、一回添削

第三學年 三 戸 英 介

唯雨と云ひたる時には、何人もその何物たるを吟味せず。而れども、少しく深く之を考ふる時は、其の効用經歷の多大、或は、面白きを感じざるなり。かの、草葉の霜露も、やがては雨となりて降り、雨は地に落ちて、又、空に蒸氣となりて昇り、絶えず循環してやまざるものなり。若し、雨無からんか。此の世の生物は如何にして生存するを得ん。然れども其の餘りに降り續く時は、所謂、梅雨等にして、陰鬱となり、怠惰となり易し。或は、亦、洪水を起して、家畜、人間、人家、梁橋、農作物を押し流すに至る。適宜に降りてこそ、其の効用を果すなれ。

農作物、諸動物を生長或は發育させ、船艦を浮べ、諸種の機械を運轉せさすも、是れ雨ありての作用なり。人類に及ぼす利益も、亦實に多大なりと云ふべし。

雨に伴ふ景趣も頗る種々の絶景と覺ゆものあり。かの四五月の雨の模糊たる中に、遙に水田を望むは、其の景趣の妙を覺え、又霧に卓められ、隠れては見えず、見えては隠るゝ様、云ひ盡すを得ず。梅雨頃の雨のをやみなく降りて、河の濁水の滔々と流るゝも、如何にも勢よく覺ゆ、又、秋の夕、雨の蕭々として降るは、一種悲哀の思を感じ、夏の夕の聚雨に、草木のうち濕ひて、ボチ／＼と雫の音たて、落つるに、日光の之に映ずるも非常に涼氣を感ず。

蟲を贈られしを謝する文

即題、一回添削

同 久保田幸事

秋冷漸く深うなり、空は高く澄み渡り、牧場に草喰ふ馬も肥えふとり交したが、又野邊や牧場にすだく蟲の音もいと朗らかに、隅もなく澄み亘る月の光と共に、如何に物悲しい秋の夜に詩情を深からしめる事てせうこの可憐なる蟲の音は、或は楽しくも、或は衰れげにも聞ゆる事てせうが、而しこの銀鈴を振る様な、優長な悲哀のこもつた音に、誰がその情を動かさぬものがありませうか。げに古き昔より、何處の國にても、蟲に關する歌のない所はありません。秋の夕、田舎の野途をたどつたならば、どれ程、古里戀し、母なつかしの情がうちよせることてせう。幸に私は貴君の厚意に依り、この詩趣や情緒を見だす事が出来ました。秋

と蟲とに何かの深い關係のある様に思はれます。蟲の音により、淋しき秋も樂しまれようし、或は増々悲しみなげく事もありませう。有難くも御送り下された蟲は、今庭の草叢に鳴いて居ります。私の心も知らずにか。

蟲を贈られしを謝する文

即題、一回添削

同 増野兼寛

親愛なる原君よ。

只今は、珍しい物を送り下されて、御禮の云ひ様がない。實の所、今、月を見つゝ、某君等と、君の噂をして居たのであつた。故郷に居た頃は、常に蟲の聲を聞いて居たが、瓦の間から月が出て、瓦の間に入る當地では、蟲の聲が非常に戀しい。清い、澄んだ中天にかゝつてる鏡の如き月に對しては、尙更に故郷か戀しい。あゝ、又蟲が鳴き始めた。此蟲は故郷から來た。故郷の事情を知つて居るだらう。しかし、僕等にそれを話してくれない。

君は、さぞ、あの美しい小川のほとりて、家業を勉めて、詩情を慰めて、居られるだらう。君と一處に、雲峰山の麓に、小さい提灯を持つて、蟲とりに行つたのは、確に九月十七日であつたと思ふ。そして、その蟲で、父の病を慰めたこともあつた。それも過去となつて、父は、雲峰山の墓場で、靜かな永き眠について居る。或時二人て、他家の垣根で、蟲を捕へ様とした時、邪見な爺が、「柿をとるな」といつて叱つたので、一

生懸命に走つて逃げたことのは、皆去てある。何につけ、彼につけ、思出多きは、蟲である。君の好意を無にする様な譯で、君は立腹せられるかもしれないが、僕は悲しみの多い蟲を書齋に入れるが、なんとなく身を刺戟する様な心地がするので、二匹をA君に、他の二匹をB君に與へ、そして、残りは此家の娘にやつた。これも、明日迄生があるかどうかは知らないが、兎に角喜んで、三坪程の庭の草叢に放した。君に謝す可く、僕はあまりに冷淡かも知れぬが、之を御禮の標として君に差し上げる。御兩親様へよろしく。亂筆一重に御宥を乞ふ。蟲なく夜に。

雨

即題、一回添削

同 井上光

雨と云へば、直ちに、何處となく陰氣な、腦の重くする様な、一種嫌な感じがするとかかり定まつたものでもない。夏の早りて蒸し暑い時、驟雨至り、溼暑を追拂つた時の快い事はまた格別である。又此の様事のある前には、屹度木の枝や葉にとまつて居る蛙がギョ〜と囁し始める。勿論我々は、蛙の様な奴に、雨の至るのを豫告して貰はなくても、其位な事はわかつて居るが、而し面白い事である。すにはか雨だと云ふと、洗足になつて走り出す。中には、其中を平氣で濡れるなら濡れよと云ふ様な顔をして、のそり〜歩く人もある。其時の變態は千差萬別、をかしいのやら氣の毒なのやら、驟雨ならては見

る事は出来ぬ。又此頃の様に梅雨近くなると、霏々として降りしきる淫雨、之も吾々の命の綱を作る用意であるにも拘はらず、苦情を云ふ。随分人間は我儘なものである。

雨

同 河野道

嗚呼、實に熱い熱い。こんなに熱くては、草も樹も皆枯死するだらう。人も獸物も、皆熱くて、咽喉は渴し水を飲むにも水はない。嗚呼、此世は焦熱地獄だ。あゝ焦熱地獄!!! 焦熱地獄!!!

鎮守の森では、今しも太鼓の音が聞える、太鼓の音もなんとなく枯れた音で聞えて来る。これは、此の村の人々が、雨乞の祈禱を鎮守の祠にやつて居るので、その人々の顔は皆今年の收穫を心配して居る様だ。あゝ雨乞の祈禱!!!

東の空から白い雲がひら〜と湧き上がつて来た。やがて雷神は遠くて太鼓をた〜さだした。今まで沈黙を守つて居た雨蛙が、芭蕉の葉の上げぎゆう〜鳴きはじめた.....あゝ夕立夕立.....

此時の村人の喜びやどんなであつたらう。雨乞の祈禱の其の効ありてか、雨を降らし給ふ鎮守の神。村人は如何に鎮守の神に感謝したであらう?

今まで水に渴して居た草も樹も縁を増して、田の面は一面に青々として蘇生して来た。村人も始めて蘇生の

思ひをした。庭の糸萩も重げに枝を垂れて居る。今まで涸れ果て、居た小川も、滔々と水の音を立て、流れて行く。やがて此の有難き雨も通り過ぎて、赫々とした太陽が照り始めた。あの熱い空気も一掃せられて、涼しい風が、そよ／＼と樹の葉を吹いて、雨滴が其の度にはら／＼と落ちて来る。此所彼所の田の中に、農夫の影が見えて来る。皆己の田の蘇生して居るのを見て喜んでゐる。あゝ尊き雨なる哉。此の村人の中には、鎮守の祠に御禮参りをするらしい者もあつた。

友人より近付を送られたるに答ふる文

即題、添削せず

同 櫻井義彦

新緑の葉末に滴る玉を、硯の海の水となし、青雲を、窓に望み見て、益々文を磨かるゝ兄の御愉快、さこそと推察奉り候。さて、先日御送下されし「羽賀臺の歴史」一篇、まことに面白く讀み下し、篇の終るを歎じ申候。兄獨得の壯快輕妙なる筆致は、小生をして、思はず快哉を叫ばしめ、遂に、足をかの地に運ばしむるに至り申候。噫、偉なるは筆の力に候か。實地を見聞して、益々、兄の靈妙なる筆致に感歎致し候。當日の有様別紙に記せるが如くに御座候間、御笑草の種として、御一讀下され候はゞ幸甚。草々。

友人より近付を送られたるに答ふる文

即題、添削

同 中村貞夫

拜啓、季は正に梅雨に入りて、四方の峰巒翠巒拭ふが如く、梅果亦漸く色づいて、一段と初夏の色彩を添ふる頃と相成候處、其後大兄には益々御健勝の由奉賀候。却説、頃者御惠贈被下候項羽が最後を弔ふの長詩、眞に感服仕候。殊に、彼項羽の微身より崛起して、よく秦末諸傑を服屬し、自ら西楚の霸王と稱せしも、沛の英傑劉邦と戦ふに及びて、克つ能はず、遂に彼の爲に垓下に圍まるゝや、四面楚歌するを聞き、悲憤に堪へず、かの有名なる、「力拔山兮氣蓋世。時不利兮離不逝。離不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。」と悲歌慷慨して、烏江に死に就きし邊、殆ど人をして斷腸の念に堪へざらしむるもの有之候。英雄の最後憐むべく、貴兄ならては、よも斯の如きを作り得るものあらじと存候。反覆讀下當時の光景眼前に髣髴たるもの有之、誠に千古の絶唱と拜察仕候。右不取敢、御禮旁々一書を呈し候。尙時節柄御身御用心專一と存候。草々頓首

羽賀臺

即題、添削せず

同 松浦梁作

中國山脈の一支脈は、北海岸に出てて、大井村福川村一帶に、茫茫たる高原を作る。是即ち我等萩中の健兒

が、過にし五月十日を期して、一日旅行を催したる羽賀臺なり。

羽賀臺、今は福川村管轄内にして、其の麓は、松、雑木の林、或は楡の木培植せらるるあれども、登るに従ひて、之等に代ふるに麥畑を以つてし、而して頂は數多の小丘起伏して、廣漠たる草原なり。

北は近く日本海に面し、脚下に大井村を望む。六島村は遙なる海中に散在して、眞帆片帆の大船小舟、黒煙吐ける汽船等の往來織るが如く、白波の巖頭に碎くる様は、壯大にして、展望殊に佳なり。西方一山を隔てて指月山を望み、人をして、漫ろに封建當時の萩城の雄姿をも思はしむ。又背後及東方は、山脈相連りて、自ら堅固なる城壁を爲す。

臺は維新前舊藩主毛利慶親卿の、益田元宣村田清風等をして、天保年間、歩騎の兵を此處に閱せしめしより以後屢々練兵の擧あり。而して渺茫たる日本海に向ひ、絶佳の景と要害とを合せたる地に於て鍛鍊されたる長兵は、向ふ處敵無く、幕末、尊王攘夷開港佐幕の論沸沸として、國家多事なる時、國の四疆に出てて幕兵と戦ひ、遂に王政復古の一原因を爲せり。

嗚呼、六十年以前には劍戟相摩したる地も、今や、四海波治れる大正聖代となり、靜に我等が活動を待ちつゝあるなり。

暑休中の追懷

即題、添削せず

同文 吉田操

屈指して待ちたる暑休は已に過去となりて、余は再び學窓の人とはなりぬ。綠色蒼蒼滴らんばかりなりし山色、漸く變じて紅色を帶ぶ。今より過去暑休の事を考ふれば、又感無きに非ず。第一學期試験は實に余にとりては大難關なりき。大峻山なりき。函谷關如何に險なりとも、アルプスの山如何に峻なりとも、余の第一學期の難關に比すれば、物の數にも非ざるなり。かかる大難關中に於ける余の感は如何なりしか。勉強家は常に云ふ、「試験は楽しきものなり」と然り、平素勤勉なる者にとりては、無上の樂なるべし。己が學力は試験によりて、大に發表するを得べきにあらずや。然りと雖も不勉強なる者にとりては、實に之より苦しきものなかるべし。己が學力の不充分なる、己が平素不勉強なるは、實に試験によりて發表せらるればなり。不勉強の罰の峻烈なる、余は實に天の賞罰の公平なるをば切に感じたるなり。されば、余は來ん暑休中休暇を利用して、大なる勉強、大なる運動をなし、以つて試験をして楽しきものたらしめんとは考へたりしなり。然れども、そは遂にあだなりき。暑休は無爲の中に去れり。山色は漸く變じて紅色を帶ぶ。余の豫想せしこととは、遂に實現せられざりき。余友に聞くに、多くの友皆云ふ、「余も然り。吾も然り。遂に豫想を實現せずして暑休を送りぬ」と。余茲に於て感あり。人々誰しも豫想を實現せんとせざるものあらざるべし。然れども、之を實現せしものに於ては多きをみず。世の失敗者、落伍者と云ふ、是れ皆この輩ならずんばあらず。苟も豫想を實現せしめんとして、日日孜孜として倦まざれば、如何て實現の光明を得ざるべき。世の成功者として意氣揚揚たるは、皆勤勉努力以て豫想を實現せし者たるなり。余は實に暑休中勤勉せざりき。勤勉せずして、いかで、豫想を實現するを得べき。若し余にして勤勉したらんか、今は豫想を實現し、第二學期試験は楽しき者となりしならん。嗚呼第二學期試験は、又もや大難關として、之れを迎へざる可らざるか。嗚呼。余は

今や大に勤勉しつつあり。大に勉強しつつあり。思ふに、著休は余に大なる訓戒を與へたるなり。

團結心

即題、一回添削

第四學年 中山節郎

我大日本帝國が、蕞爾たる極東の一小國を以て、よく東洋の霸權を掌握せるも、ローマがチベル河畔の一小村落より蹶起して、遂に、宇内を統一せるも、これ、皆、國民一致團結の賜なり。

抑、團結心強き國家は小なりと雖も侮るべからず。小と雖もこれ鐵丸なり。團結心弱き國家は、大なりと雖も恐るべからず。大と雖もこれ土塊なり。鐵丸を以て土塊を碎くに、豈碎けざるの理あらむや。

明治三十七年、極東の風雲急にして、日露の國交斷絶するや。歐米諸國は、我國の義憤をもつて、螻蛄の斧に比し、伏鷄の理を撃ち、乳犬の虎を犯す類とせり。彼等の評は、果して適中せるか、我國微なりと雖も、國民内に協同し、戰士外に團結す。交戦以來、海に陸に、前古未曾有の大勝を博し、彼等歐米人士をして、後に瞠若たらしめしにあらざや。

之より先、日清戦役の終るや。彼れ露國は、獨佛二國を誘ひて、所謂、三國干渉を試みたり。爾來十年、その非道を鳴し、何時かは之に報いんとは、これ、我が國民の、片時も、念頭より、去る能はざるものなりき即ち、五千萬の心血は、茲に、打ちて一大鐵丸と成されたり。何者の大を以てしても、豈、よく之に當るを得んや。

此の理は、獨り戦争のみに止まらざるなり。社會人事百般の事業、一として團結心の鞏固によりて、成されざるはなし。我等は、益々此の心を發達せしめ、以て常に、戦時の勝者たるのみならず、尙進んで平時の勝者となりて、富國強兵の實を擧げ、以て、國威を發揚せざるべからず。

太寧寺に遊ぶ

宿題、一回添削

同 村岡淺一

夏休中の一日を利用して、余は古跡探検の目的を以て、太寧寺に遊ばんと欲して家を出づ。此の日、天候最も好し。大空は一面に澄み渡りて、一點の雲なく、樹樹の緑は將に滴らんとす。爽快言はん方なし。絶景の地を行く事一里餘、道傍の岩に腰打ち掛けて、同伴の友と相語る。見下せば、小川の底清らかに澄み渡りて小魚などの遊ぶも亦面白し。久しからずして、湯本に着す。湯本は、深川河の中流の。兩岸に沿へる一小村にして、旅客の休憩地として、名高し。暫くして、温泉に入浴すれば、道中の疲勞、全く忘るる程なりき。時正に午なり。直ちに太寧寺に向ふ。太寧寺は、此處を去る三四町。程なく門前近く來りぬ。ここに髪洗の池及、兜掛の石等あり。髪洗の池には、昔大内義隆の敗れて此地に至るや、此の池に臨みしに、己が姿の見えざるを悲しみ、死を覺悟したりとの口碑存じ、又、兜掛の石は、その際、兜を掛けしものなりと、言ひ傳ふ。岩上に坐せる多くの地藏を眺め、遂に、太寧寺の堂に入れり。曹洞宗の寺とて、質朴にして、いと寂し。友と共に晝飯を食ふ。暫くして、寺僧出て來る。種々の物語するうちに、我等の希望を入れて、寶物の拜觀を

許しぬ。導かれて、一室に行けば、前面の床の間に、一幅の掛物を掛けたり。甲冑を着せる古武士と、束帯を装へる公卿とを畫けり。寺僧の懇懃なる説明によりて、其の人物の、大内義興、及、義隆なる事を知りぬ而して、余は、義隆の、父に比して、虚弱なりし事を忌めり。その他、寶物としては、支那交通時代の物あり。種々と見盡して後、寺僧に辭し、直に、後に高く聳ゆる太寧寺山に登りたり。この山は、當寺の墓地にして、數多の墓あり。登り詰むる所に、二つの墳あり。これぞ、大内義隆父子の墓なる。取り巻くに、彼の忠臣の殉死せる者の墓を以てす。冷泉隆豊の墓最も有名なり。一拜して去る。午後二時温泉場に於て休息し、五時ここを出發して歸路につき、程なく、我家に着す。心身疲れざるにはあらねども、余が好める古跡探検をなして、一日を楽しく暮したることを思へば、豈疲勞せりと云はんや。

釜ヶ瀧探検の記

宿題、一回添削

同 藤井 四郎

七月廿七日、余は、我徳佐村、字、半久奥なる、釜瀧を探検すべく、河村、中村の二先生、片山氏、及び、余が父、案内者留吉、都合六人、午前六時半、草鞋姿にて出立せり。里道盡きて、林間の小路に入る。林を抜くれば、野原にて、道の困難なる所もなく、或は、丁丁たる伐木の音を聞き、或は、草刈る乙女の歌など、耳にしつゝ、行く程に、何時しか、草木深く茂り、稍、進行困難なる道に入れり。清き谷水は、到る所に在りて、心地よさいはん方なし。案内者留吉は、鎌もて道を切り開き

つゝ進む。

數十日前、奥なる杉山の草を刈りにとて、人々行きたれば、通行大に容易なりしと雖も、苦しさは少々にあらず。衣服は、朝露の爲、總身づぶ濡れとなり、恰も着衣のまゝ、水中に入りたるが如し。雜草木は、我等の頭上數尺に達し、時には、トンチルをなし、時には、數人の坐し得べき臺の如き狀をなせり。

凡そ一時間にして大杉に達す。此處には、二抱餘の大杉有り。其本には、釜瀧權現と記せる古石あり。古昔早魃甚だしき時には、里人は、此處に太鼓を持ち來りて、神樂を奏し、又瀧の側に座を設けて、僧をして、讀經せしめきと云ふ。

小憩の後、再び登り初む。これよりは、道、漸く険しく、林の中なれば、草露に衣を沾す事なけれども、磯甚だ多くして、動もすれば、石車に乗りて、遙かの谷底に落ちんとす。

谷を彼方に渡り、此方に渡りて行く程に、留吉は、十餘年前來りたる事有るのみなればとて、道に迷ひ、大に當惑せり。少し休まんとて、向ふの方を見れば、瀧らしきもの見ゆ、近づき見れば、慥に瀧なり。

然れども、我等が目ざすは、これにてはあらざりき。道を求め居たる留吉は、遙かの上より、道有りたれば來れと叫びたり。

此邊、目に見ゆるものとは、唯、木石のみ。其淋しさ言はん方なし。登る事暫くにして、萬歳々々と、父の聲聞えたれば、一同大に勇み立ちて、駆け上り、重下せる綱によりて、瀧の下に至るを得たり。

仰げば、高さ三丈餘も有らんとおぼしく、彼の防長史要に一丈二尺と有るは、大なる誤なり。幅は、高さより遙かに廣し。然れ共、數日間、打ち續きたる早魃のため、水量大いに減じて、僅かに手を洗ふに足るのみ。

案内のお爺は、座席を設けて、人々の休憩に供し、河村氏は、寫生等せられたり。冷氣膚に迫りて、心地善き言はん方なし。

遊ぶ事一時間許にして、歸途につく。乃ち、記念にとて、大正二年七月廿七日SFと、側なる木に刻みたり。二三間下るや否や、先登なる留吉は、二間許の高所より墜落して、足の小指は、殆ど、落ちむばかりの怪我をなせり。直ちに、繻帯を施して下る。一時間許にして野に出づれば、冷氣頓に去りて、日光直射し、暑さ言はん方なく、汗は玉をなして、顔を流る。斯くして、午後一時半、無事歸宅せり。

暑中休暇中の一記事

宿題、一回添削

同 松原 淨二

八月五日、田舎生活の無聊に苦しみたる余は、豫て聞き及びたる、石州津田の海水浴場に赴き、一友人の許を訪れぬ。家は海濱にあり。折節貝拾ふ少女の歌面白く聞ゆ。渺茫として限りなく、緑濃き海原に、白帆の浮べる、海濱近く、數多の鳥々の散在したるをが上に、麥藁帽子の、二つ三つ見ゆるなど、畫にもしたき景色なりき。余は晝餐を終るや、出て濱邊に逍遙するに、彼方の海に突出せる丘陵あり。其の形世の常ならず。砲臺の跡かとも思はるる程なれば、その由を一老爺に問ふに、「あれこそ穴居の舊跡なれ。丘上に小山ありて、穴は其中の腹にあり。」と答ふ。余は、直ちに、丘陵に向つて進みぬ。暫くして麓に達す。漸くにして、一路を得て以て上るに、丘上の大部分は畑にして、二三ヶ所に築山の如き小山あり。これ、先に、老人

の言ひしものならんと、足を運べば、かの築山體のものは、全部、灌木、竹、茅にて蔽れ、穴居の跡の如きもの、眼に入らず。然れども、この儘に去らんも口惜しく、なほ、茅を踏み、竹を分けて、搜索するに、大なる石一個、又一個あり、遂に、穴居のそれらしきものを見出しぬ。入口は、大なる石を以て組立て、洞中を覗き見るに、入口の狭きに似ず、稍廣きが如し。余は、有毒瓦斯の發生しあらんを疑ひて、入りて見ず。暗くして、見極むべからざれども、狐狸の巢窟には恰當なり。人智未開の當時は、かくまで野蠻的なりしかと、熟々吾等が先祖の、太古の生活状態も忍ばれて、去らんとするも、去る能はざりき。

さる程に、日漸く傾きて、空は焦げ、海は黒ずみて、暮色漸く蒼然たらんとす。余は此の時、古人が、洞穴を後に、或は、敵を防ぎ、或は、食物を得て、穴に歸るの状を想見して、いとど感慨に堪へざりき。

越ヶ濱遠泳失敗の記

宿題、一回添削

同 横山 繁介

菊ヶ濱の、指月山に接近せし所、翠色滴らんとする松林中に、一小屋あり。これなん、我が巴城の健兒が、暑熱を利用して、水に親み、大いに、心身を錬磨せんとして、集り來る游泳講習會場なる。

平泳、横泳、一段、二段、三段、大抜、小抜、數多の技を習得し、萬物を焼き盡んとする日光を、全身に浴び、潮の香高き空氣を吸ひ、見るも頼もしき、金銅色の健兒。往にし日の、松本橋下より、指月山麓に至る小遠泳に、日本海を泳ぎ越し、朝鮮、支那へも押し渡らんばかりの元氣を見せたる猛者共、來ん日の越ヶ濱

大遠泳を、一日千秋の思して、待ちたりけり。
 八月一日、今日は遠泳の當日なり。朝早く、濱邊に立ちしに、北風、漸く、吹き起らんとする空合なりしかば、遠泳中止の説出てしかども、例の猛者共、いかて肯はばこそ、風激しく、浪高きは、却つて妙と、遠泳遂行のこと、直に一決しぬ。

與する者四十幾名。午前十時頃、隊伍堂堂として、指月山下を繰り出し、指月、椿の二船、之れか保護に當れり。天候次第に險しく、浪漸く激し。如何なる猛者共も、身體冷え、疲れ、上船する者相踵ぎ、残る者幾に、五六名となりぬ。前後の距離。甚遠く、椿、指月兩船の間も亦遐し。小船二艘に收容すべき人員、四十幾名なりければ、舟は、其の重荷に堪へず、次第に沈み、海水は、容易に浸入せり。椿は、水を汲み出すべき器無く、海水の浸入するに任ししかば、詮方無く、残りの者の救助を斷念し、右折して、小畑灣に入らんとせり。折しも、遙か沖にて、救を呼ぶ聲聞えしかば、指月は、後れ居たれども、之れが救助に赴きたり。又、椿は、小畑灣に入らざる前に、鶴江の臺近くにて、全く沈没し、教師、船頭二人の外、皆、濱崎に向ひて、泳ぎ出しぬ。

かくて、救助に赴きし指月は、漸く、一人を救ひしかど、其の者の言によれば、尙、二人の水泳者ありとのこととに、船あまりに重ねれば、比較的疲勞せざる者に、舟板を與へて泳がしめ、然る後、救助に赴きたり。我も、さらばと、板を腹に、海に投ぜしが、間もなく、他の者と、漁船三艘の爲めに救はれ、濱崎に達する頃、椿も、水船の儘、同所に達したり。それに積み込み居りし衣類を取り出し、乾しなどする中、指月も、濱邊に著きぬ。時、恰も、正午、二時の水泳に、纔に、指月山下より、鶴江臺沖に到りしのみ。皆皆、指月

に積みたる粥を啜りなどする中、巡查一名來り、種種聞きただして歸れり。

余は、是れ迄。幾度も難船せしこと有りしが、救助せられたるは、此度が、始めなり。されば、胸中、一種云ふべからざる感を抱きつつ、五六の朋友と共に、疲れし足を運びて、歸途に就きぬ。

墓

參

宿題、一回、前

同 西林 鴻 介

八月十五日の夕、余は例に依り、先祖の墳墓を弔はんとて、花束持ちて、家を立ち出づ。

時に、夕月、淡く現はれ出て、星も、亦、二つ三つ、見え初む。西の空は、神の畫きなし給へるが如く、麗しき紅もて、暈されたり。やがて、其の紅は、消え果てて、入相告ぐる鐘の音、寂しげに響き渡る頃、墓所に著きぬ。

月は、次第に、牙を渡りて、草葉の露は、恰も、銀玉の如し。梢を拂ふ清風は、遠く近く、蠟燭を賣る子供の聲を送り來りて、寂しさを添へ、此處彼處の墓前に、消ゆるともなく、燃ゆるともなく、光れる蠟燭の火は、鬼火の如くに、疑はれぬ、境内、一時、人聲絶えたれば、其の寂しさは、我が心を驅り立てて、來し方の嘆に、沈めたり。我は、暫く瞑目して、亡き父の、世にありし時の事など、思ひめぐらすに、何時しか、袖にさへ露の置きてなん。かくてはと、思ひ返して、香花を手向け、闍伽奉りて額きぬ、折りしも、彼處の叢に、松蟲の初音、聞きつけしこそ、時に取りて、いと悲しかりしか。

奥津城のあたりさびしき叢に

鳴く松蟲の聲ぞ悲しき

友の入營を送る

即題、一回添削

同 柴田省三

君は、茲に、國家の干城となりて、大元帥陛下統率の下に、軍務に就かれんとし、本日、入營の途に上らる。男子の面目、何物かこれに過ぎんや。

願るに、日清日露の大捷によりて、我國は、幸に、世界強國の列に入れりと雖、尙、兵力富力に於て、他の強國に及ばざる點多し。しかも、現今、北に、猛鷲の餌を搜すあり。東に、惡鬼の間を窺ふあり。更に、西に、列強注意の焦點にして、しかも、貧弱なる民國を控ふ。神國の前途、益遠く、益多事にして、國民の努力、愈大なるを要す。此の時に當りて、身を、軍籍に置くべきものの覺悟は、尙、一層、堅實ならざるべからず。願くば、君、入營の後には、畏くも、先帝の下し給へる勅諭を奉體し、以て、益、心膽を練り、身體を鍛へ、他日、君の爲、國の爲に、一身を抛つて奮闘すべき素質を作り上げられん事を、これ、余輩の、切望して止まざる所なり。

行け君よ。錦織りなす龍田姫は、四方の山山を色取りて、君が入營を祝し、天つ日の神は、麗らかなる光を送りて、君が、本分を盡されん事を望み給ふに非ずや。聊か、燕言を陳べて、君が行を送る。

秀吉と家康

即題、一回添削

第五學年 小澤亮一

上下茫茫三千餘載、偉人傑士眞骨頭あり眞男子の面目ある者、仔細に點檢すれば、晴夜の星も管ならざるなり。就中秀吉の如き、華かなる活動をなして、驚天動地の事業、端倪に遑あらざるものは、扼腕して感憤せしむるに足るものなり。其の一生の如き、臚敵の一頑童を以てして、位人臣の榮を極め、海内の諸侯を階下に摺伏せしめ、其の顔を仰ぎ見る能はざらしむ。遠く雞林八道を足下に蹂躪し其の氣宇四海を空うし、天馬空を馳驚するの慨ありしもの、實に變幻極りなく、蝸牛角上の詡詡者流に非るを見る。彼の氣宇卓犖にして、崢嶸山中我獨行の趣あり。我國彼あつて歴史の興を添ふ。偉なる哉。翻つて家康を観るに、秀吉信長と相提携して事を遂行せし爲、其の前半は彼等の巨大なる雲影に掩有せられて獨特の光彩なく、何等感興をひくに足るものなし。彼の前身は、實に艱苦の時期なり。身は諸侯の胄子と生るゝも、齊楚の間に介在せる纖弱萎微の一小國にすぎず。故に朝は東に夕は西に、轉轉蓬萍の如く漂落し、彼が年たけし十八歳迄は一城の主人たるは空名にして、敵黨の間に、玩弄物視せられし一少年にすぎざりき。然れども其の資質よく此等の辛酸に堪へ、時ありてか機智の閃あるを見る。後世傳へらるゝ石合戦の訓話等より觀れば、其の天に稟くるもの豈尋常者流と同一視すべけむや。彼や實に沈黙せる秀吉なり。世彼の老翁を以つて指斥す。然り彼の晩年は些の活

氣なく、其の手腕正大公明を缺き、孤兒寡婦を陥し入るゝに、奸策を弄して秀吉の附託に背馳したるも、適三百餘年の太平を馴致せしは、彼のよくしのびよく勘考せしを語るものか。彼一國を自家藥籠中のものとせんとするに、身はすてに凋落せむとす。晩年の煩悶焦心發して大坂陣となる。其の手腕を擇ばざるの態度は士人の共に語るを恥とするところなり。

秀吉と家康

即題、一回添削

同 三輪 一輔

戰雲怪しく空に亂れ飛び、殺伐の氣地に充ち満ちたりし元龜天正の亂世は、遂に蓋世の英雄秀吉を出現せしめたり。赤手池中を出てたる蛟龍は、忽ち風雲に會し昇天の偉業其の緒を發せり。彼が衆に抽きんでたる才知は、織田信長の爛眼に射られ、爾來幾星霜底止する所を知らざる精力と、努めてやまざる修養とは、こゝに兩兩相待ちて、彼が天稟の偉才は、益々其の光を輝かせり。恩主信長一度逆臣の毒刃に倒るるや、山崎の一戰、能く他に先んじて。其の偉圖を繼承し、以來東奔西走寧日なく、遂に亂麻の如き世をして、昌平の域に致せり。殊に彼が皇室を尊崇する事のあつき、聚樂三日の盛宴に徴すべし。秀吉が雄略神國六十餘州に溢れ餘瀝の進る所、雞林八道をも吐吞し、大明をして其の爲す所を失はしめたり。不幸未だ素懷を遂ぐるに至らずして、名護屋城頭、英魂長へに天に歸したりと雖も天下誰か壯ならず、偉ならずとせんや。翻つて家康を見るに、彼れ小なりとは云へ天下諸侯の一人たり。秀吉とは已に其の立脚點に於て大なる運庭

あり。小田原の城陥るや、關八州あげて彼が領有となりしは誰が恩ぞ、彼が天下に呼號するに到りし迄には幾多の曲折ありしとは云へ、秀吉の已に一統せし後を取りしのみ、秀吉が信長の業をつぎたるに比すれば、偉と呼び壯と稱するには足らざるなり、彼老猶いたづらに先主の遺托を蔑にし恩家に對して、權謀術策一として施さざるなく、幼孤の秀頼を亡して得々たり。何ぞ自ら大坂に馳せ參じて、孤弱の主を助け以て亡主重恩の萬分の一を報ひざる、彼が古稀をすぐるまでの、飛ばず鳴かざる忍耐は、慕ふ可く學ぶ可きも、其の隱忍なる性質は、我等が唾棄すべき所なり。況や自家繁榮のためには、朝廷をも抑へ奉りて更に意に介せざるの甚だしきに於てをや。思ふに秀吉は磊落にして、武略に達せし人にして、家康は隱忍にして、處世に長けし人なりき。人各々長短あり。其の長を取り其の短を捨てて以て我が身を律せば、聖賢も時に學ぶ可からず、凡庸も時に慕ふべし、此の兩士の如きは實に我等をして、三嘆を惜む能はざらしむる偉丈夫なり。吾人は常に其の長を學び、其の短を捨つべきのみ。

歲暮の感

即題、一回添削

同 平山 茂

隙行く白駒の足早み、春の花夏の青葉秋の紅葉も昨日今日と思ひしに、早や歲の暮も近きぬ、又來ん春のたのしさを思ふとき、尙ほ顧みらるゝは過ぎし今年の月日なり、水清く山秀てたる萩の園生の學舎に友とむつみて、驚馬ながら千里を走る駿馬と共に肩を並べん一念に、進み進みて、やうやくにして五年級に進級せし

は今年の春なりけり、余が成功の一日も速かならんことを祈り給ひし祖母君の逝き給ひしも春なりけり、生れながらの鈍才加ふるに不勉強なる私の智識は人より遙かにおくれ、徳亦半歩の進境を見ず、さりながら、めくらの常とて蛇にも恐れず、功名の念は益々燃え、従つて修養も怠らじと心懸け、勉強も人に負けじと思へど、時々は茫然忘れたるが如きも鈍才の鈍なる所以なるべし、たゞ自慢すべきは薬一服も用ひず、さしたる心配を両親にもかけざりしことのみなり。

古人は日に三度我身を省みて修養を怠らざりしと聞く、我は歳の暮に過ぎし事をば顧みて、驚きかなしみ恥づるのみ、さりながら既往はとがめじ、又來ん春は我に萬斛の希望をもたらさん、さらば逝け、さてもなつかしき大正二年よ、余は汝に謝すべき言葉もなし。

たゞ今日より後の我身に錦の衣著ることあらん時余は汝に謝すべし。

萩の城址に立ちて

即題、一回添削

同 幸月富士昌

毛利輝元公一度祖父の偉業を受け継ぎ給ひて、中國に覇を唱へられしも、太閤薨去の後、石田三成に欺かれて、家康征討の牛耳をとり給ひ、もろくも關ヶ原の一戦に山陰山陽十ヶ國を失ひ、爾後四百年間盡きせぬ恨の跡をとゞめたりしは、嗚呼實に此の萩城なり、さびれゆく秋の夕つ方、天主閣臺上に立ちて荒れにし古城の址を望み見ては、無限の感慨止む能はず。

石階崩れ苔蒸したる碧石、海岸に長く連れる破れ塀つたかづら傳れる老松、枯蘆亂れたる濠、今は城の面影見るべくもあらねど、此は皆我が長州男子に無限の感慨を抱かしむる好當の記念ならずや、草を踏めば、やはらかに我が履の下に伏し、枝を振へば籬も折れぬ、嗚呼其の昔、糾々たる武夫、劍をかゝりかして臥薪嘗膽したりけむを、今や金氣蕭殺の時、破山河在、城春草木深、春ならぬ秋は其の趣一層壯絶、にして、青々たりし草木も一面に枯れ果て、草木情無く、風氣は刀の如く、指月山半、松籟颯々として、去にし往古を語るが如し、何ぞ夫れ悽愴たる。

一度は三十六萬石の城下として山陽山陰第一の繁華の觀あり、維新の際には、燃ゆるが如き幕府に對する、敵愾心と、熱せるが如き尊王の誠心とは、合して幾多の傑士を生みたりしも、一度明治の初年、城を毀ちて後は如何に、城址の荒れ果たると共に、萩も漸次に衰へて昔日の面影なく、古長州武士の超越の氣風は失せ果て、元老に僅に眞の長州男子を残せるのみ、然れども藤公逝いて亦桂公去る、嗚呼萩否長州は將に城址の年々荒廢し去ると共に、昔日の面影漸く掃ひ去られんとす、吾人方に指月の城址に立ちて、長州武士の眞髓を込めたる往古の紀念を望み、山靈發して幾多の傑士を生みし指月の山容に接しては何ぞ覺醒奮發せざるべき。中秋の夜天主臺上に立ちて、指月山上に出づる月に、古城を照されて、去にし往時を語らるゝ時、吾人長州男子の感慨其は果して如何に。

萩城址に立ちて

即題、一回添削

同 山下眞一

余は毎夕杖を萩城址に曳きて、幽玄なる自然に接するを無上の樂となせり。落日の光を雙翅に受けたる金鴉

三つ四つ嗚々と鳴きて指月山の老樹に隠れ、風なきにガサリと櫻の一片落ちて金鳥、全く西山に没して、餘光なほ山の端三尺まで照りはゆるの時、天主閣址に登らんか、忽ち胸の大磐石もて壓せらるゝが如く覺え、涙双頬を傳うて潜々たるものあり。何の故か明に知り難しと雖も、蓋しまさに刻々に暗黒に吸ひこまれゆく萩―病み疲れたる萩の盆地を望み、足下の濠水にゆらぐ萍の力なげなるに比して、轉た世態變遷の甚しき人生の荒涼寂寞なるを感ずるにやらんか。

あゝ、今余が立てるこの荒廢の址には何ぞ知らん僅々五十年の昔までは五層の大廈屹然として天に沖し、高樓の大觀は逆しまに濠水に落ち、時刻を報ずる鼓聲は轄々として樓上より並木を抜け渡つて三里四方の盆地に響きしにあらざや。今見る、果して何物をか残せる。秋の空は今なほ高し、城壁は昔ながらに残れり、然れ共残忍なる荒廢の影は眺めをる一瞬の間にも絶えず―襲來するを見ずや。更に本丸二の丸の址には櫻樹幹を並べて、梢あらはに満土の芝生秋に枯れて、この世の哀は盡く是處に集りて見ゆ。三百年の昌平の夢、巴城の春も長閑にやありけん、長刀の武士紅袴の女房の逍遙せしは今五十年の昔なりしにあらざや。

あゝ、残る哀は矢的に見えて秋は次第に城址に深くなりまさる。指月山黒く濠水黒く城壁黒くなりて悄然杖を曳いて去る。國は破れて山河あり城春にして草木深し。今は指月山麓秋さびて昔の榮華の影とらへんとしとらふる能はず。

歲暮の感

即題、一回添則

同 小川 義雄

都大路に松竹立てわたし、山間の賤が伏屋にも、日の丸の國旗朝風に翻る新年頭に於て、この一年を思ひ見し時は、三百六十幾日は如何にも長さ日月と思はれたるなり。然れども屠蘇の香に酔ひつつ過す新春の夢何時しか醒むれば時に已に螢飛び交ふ夏の夕なり。綠陰に安坐して書を翻き、未だ其一卷をも讀み終らざるに愕然天を仰げば旅雁わたることしきりなり。いてや菊見ん紅葉狩らんと遊ぶうちに、世は又一轉して人々爐を擁して、冬の長夜に、過ぎし春夏秋の事も語る時なり。嗚呼かくして我等又この歲暮に立ちて、過去三百六十日を思ひ廻らす時は如何、その年頭に於ると多少否大いに感を異にするものあらむ。長しと思ひし一年は一瞬の夢の間なりしなり。嗚呼かくの如きは晉に一年間のことのみならむや、我等青年たるもの今にして來るべき一生を思へばさすがに長き感あるなり。然れども耳に蟬鳴を聞き、頭上に霜白き時に到つて過去五十年を思ひ見る時は、歲暮に立つて過ぎし春夏秋を思ひ見ると同じからむのみ。かの奈翁もセントヘレナに瞑目せむとせし一瞬間に於ては、かつて全歐土を巻席せし偉業も一炊の夢なりしなるべく、豊太閤も名古屋の陣に、鷄林の空を望みて薨じたる刹那には過去六十年の奮闘も、げに春の夜の夢よりも短き感ありしなるべし。

嗚呼長きが如くして短きものは人の一生なり。奈翁豊太閤公の偉業もその死せんとする瞬間に於ては夢の如きなり。然れども過去の偉業を夢みつゝ、永久に眠る彼等は幸なるかな、されば、我等は如何なる夢を見て白玉樓中の人たらんとするか、樂しき夢か果た喜しき夢か、何れをとらんも、我等が來るべき人生の春夏秋に於ける奮闘の如何のみ。

~~~~~  
 英 文 欄  
 ~~~~~

THE WINTER EXERCISES.

2nd Year. M. Nagamine.

We have many ways to make our bodies strong, but I think the winter exercise is the best way to make our bodies and hearts great for us in the winter. In our school we have Wrestling and Fencing which take place every morning from the twelfth of January to the last of the month, or for about three weeks. I am one of the boys who learn wrestling.

When we come to school it is about four or five o'clock in the morning, and there's no man on the road, but only the moon like an electric light in the blue black sky is as if she were telling me about something. As the fresh cold wind which seems to be sent by her, passes my face and neck I feel as if I were taken up to the heavens.

The clear moon, the dark shadows of the trees and the far mountains are making a very beautiful sight just like a picture.

Thinking the boys who don't get up early, can't see this pretty sight, though I can, I have often said, "Ah! How fortunate I am!"

As I come near the school I always hear the boys fencing with each other and shouting "Ya! Ya!" Like a war and my heart begins to beat so fast that I must run to the room of wrestling. What fun it is to play these winter sports! There are some electric lights over our heads and the boys look like moving pictures. When it is over our bodies are wet and very warm, though it is very cold. We are hungry that we want our lunch before dinner time.

I hope the winter exercises become most proper ones, especially among young students.

 THE CHIVALROUS CRANE.

2nd Year. Y. Nakamoto.

Two sparrows built their nest on the eaves of an old temple and every year they laid some eggs and fostered their young.

One day a snake crept up and was going to swallow them. Just then the parent sparrows found it and were much surprised. They tried very hard to keep the snake away, but the enemy was too strong for them.

A crane on the pine-tree near by saw it and took compassion on the sparrows.

Then he came up all at once and picked at the snake with his long beak, which killed the snake easily. Thus he rescued the young sparrows.

HAGI TOWN.

3rd Year. S. Morishige.

Hagi is a town which is in the northern part of Yamaguchi Prefecture. Its north side faces the broad Japan Sea, and the other sides are surrounded by high mountain ranges. A river named Annu runs along the south of this town and the upper waters of this river are called Kawakami. There are little whirl pools and the water lings flowing but slowly and here great currents are rushing against the great rocks. Near this place many men live and some of them come to Hagi on boats every day trading with the men of Hagi Town.

A little mountain called Shitsuki is in the northern end of this town. Near the foot of it is the pretty Shitsuki Park.

In this park there is built a shrine where is worshipped a powerful lord called Mori who had a castle at this place during the time of the Fendal System of old Japan.

Hagi has given an ample share of great men to the world, that is, S. Yoshida, Prince Ito, Katsuma, Marshal Yamagata and many other great men were all born at this place.

At present this town has a population of 20,000 people. There are many schools. Hagi Middle School, Hagi girl's higher school, two large primary schools and several little primary schools are in this city. The country office, the post-office, the police station, the Electric Light Company and many other large buildings shrines and temples are in this place too.

ACCOUNT OF A JOURNEY.

3 Year. R. Kawasaki.

Of course you know that the journey in summer is one of the most agreeable exercises for us. Now I will tell you a story of a journey I tried last summer vacation to show how comfortable the journey was!

At 4 o'clock in the morning on the 6th of August I started from Hagi for Ikuno village to call on my brother and to ask after his health. That morning the weather was very fair, the sky was blue, and the air was pure. After walking for an hour, I entered a dreadful mountain pass named Choyutoge.

Sometimes I jumped over the brooks or climbed the rocks clinging to trees and vines. As I saw the disgusting burial-place I was, indeed, terribly Surprised and stopped short.

Then I went on and passed over the mountain. When I reached Fukuji, the sun peeped over the top of Mt. Toyin and began to shine upon me hotter and hotter, and there I found five or six farmer's hovels in the fields. So I went toward them to ask the way to Ikuno. I went forward as I directed, but alas! when I went about 3 miles, I lost my way, for I had never gone before such a way as this by myself. I had to go beyond a very steep and high mountain.

With great difficulty and danger, I passed through this mountain, when the sun was already in the middle of the sky and showed me that it was, dinner-time. Upon this, I said softly to myself "How tired and hungry I am! If I could find a clear stream, I would drink." I then began to look round and found the brook where fresh water ran over the pebbles. I took a cup of fresh water to quench my thirst. When I reached Takasa, a distance of about 4 miles from Ikuno, the sun was ready to set in the west.

I hastened to go to Ikuno before dark. At length I arrived at my brother's house at 7 o'clock and was very glad to see him well.

Finishing supper, I went bed contented.

THE AUTUMN WALK.

3rd Year. R. Matsumura.

The season has come for sitting by the lamp-light. The hot summer has gone and the best climate, which we call autumn, has come. It was in the midst of autumn and the air was pure; at night many kinds of insects dolefully sang, and in the suburbs there were many flowers open. Very soon, all the flowers would fade; the lightest breeze would make the petals fall. But winter was not yet here. It was the best season for study.

On an autumn afternoon, after reading some books, I took a walk. Outside the sun was pouring a clear light from the blue sky and the autumn breeze was blowing softly. I left the houses behind and went in a path to the plain. By the side of the shrine there was a cedar tree thickly covered with foliage, and two or three crows were flying toward it. The white and yellow houses were standing on my right. I saw a big black dog run with something white in his mouth.

The plain was so vast and far that the mountain was dimly seen. Rice was now ripe and was like golden grain, and every one in the fields seemed to be very busy. They put up a scare-crow in the middle of the field to frighten away the birds, which came to eat up the grains of rice. Soon I came into the

meadow. A wooden bridge crossed the river by the side of which there was a little boy, who was sitting near the stream; he had a fishing-rod and line in his hand; he was beginning to fish. Above the bridge a wheel of the water-mill turned the water. The water was so clear that I could see many fish swimming, which were frightened by my shadow, and hid themselves in the water-plants. There were many flowers standing on the side of the path, reflecting their pretty images in the water. I took some little white daisies.

I found a flat stone, on which I sat and took a rest, looking at the view of the autumn suburbs. Here and there I saw some persimmon trees having red or yellow fruits. I drew deep breaths for a while.

Here far from houses, noise and dust, it was quite still like another world. I believe everything came into existence of itself. I am fond of rural-life more than city-life. As the sun soon declined westward, I started for home, and when I got home, many stars were shining.

It is good for our health to foster noble spirits by taking a walk to the suburbs.

A MERRY TRIP.

4th Year. A. Inoto.

It was the 25th of August in the 2nd of Taisiyo. As my father allowed me to go, I took a trip to Masuda with my younger brother. Ent the day scarcely dawned when we ended the preparations for the trip greatly excited.

After bidding farewell to our benevolent parents, we followed the road in the direction of Yesaki.

While walking we heard a song of the ciadus which were singing on the trees.

In a short time we arrived at Yesaki, a prosperous commercial town, and then we saw a boy who was mugging for fish, and the farmer who was mowing the grass. They were like a picture.

At last we arrived at Hinouri, where on the coast are standing many wonderful rocks, and the scenery is beautiful. The billows rose mountain-high and dashed against the rocks, and then broke into sprays. That was really a most magnificent sight. We rested at a tea-booth which was in a grove of pine-trees.

At length we reached Ichiharu. In whatever direction you look from this place, you may see the tops of some tall mountains reaching up to the sky. I related the story of topography to my brother, but in a moment we saw the mulberry fields so wide that everybody would be surprised.

We went and worshipped at the Kakinomoto Shrine that is in Takatsu, and then crossed the river of Takatsu, the largest river in Mino-gan. We lost our way, but asked an old man, who taught us the way in a friendly manner, we thanked him for his great kindness.

Finally we arrived at Masuda about noon, and visited the famous temples and shrines. As you know, Masuda is a commercial town, and the traffic is very brisk. At night we went to the bookseller's to buy some picture post-cards. Being much fatigued by the trip, we fell asleep at 9 o'clock.

Next day we were no sooner out of the hotel than the rain began to come down, and the wind to blow in a terrible manner. In spite of the rain we went to our uncle's house in order to visit the grave of our aunt.

Our uncle was highly delighted to see us, and enquired us in the most engaging manner. As our uncle recommended us to put up at his home, we determined to stop this night. When I visited my aunt's grave,

I choked with tears of gratitude for some time.

This place is so lonely that there is nothing to be seen but rice-fields and mountains.

Next day we left our uncle's house, and then returned home.

What a merry trip it was!

DON'T LOSE YOUR TEMPER.

4th Year. S. Kodama.

All the great men of all ages who long adorned the history of the world had a great self-denying spirit. Trying to strengthen it, it is weakened by anger or passion. If you are to lose your temper in a moment of displeasure and cannot control your passion, your cool head will, no doubt, be confounded, and cannot give a cool judgment.

This is as though you fell into the trap of your great enemy because of your head. If you thus all into the enemy's trap so wittily and cannot escape from it when you are in the battle-field, surely you will bring upon yourself defeat, and so you cannot fight any more, but should you fight more you would be defeated more greatly than before. So, in every case you encounter, self-denial cannot coexist with passion.

If you are swayed by passion, you cannot understand what is what; your cool thoughts will become heated; your commonsense will be lost completely; your eyes will grow dizzy; your ears will become deaf; and you cannot express what you want to speak, uttering a roar and exclamation in vain, or using violent and abusive language, and yet it will never occur to your mind that you were wrong.

Notwithstanding it seems to be a very little thing to control your passion, its real value is worthy of a hero. It is a heroic act. It can be considered an action which excels the laity, at least.

From ancient ages, many great men appeared. But running our eyes through the issue of their actions, we find that every one of them enduring his passion by means of the spirit of self-denial and self-control, repressed his emotion. It seems as if it were strange. But if a hero, wishing to control many people under his command, is enraged at every thing done, even the very little things, and cannot repress an abuse, he can never enjoy the trust of his men, and also cannot be obeyed by them.

So it is not so strange that all of the great men who appeared ere did control their passions, but it is a proper thing. It ought to be so.

Accordingly, we young men should give no thought to this thing after looking at it! We must try to strengthen the spirit of self-control, at the same time try hard to repress passions!

MT. SHIZUKI.

4th Year. B. T. Kaneko.

As you know Mt. Shizuki is projected into the Japan Sea at the north-west corner of Hagi. Its three sides look down upon the sea and made steep precipices.

At the foot of the mountain there is a magnificent shrine, in which the ancestors of the Mori family the ancient lords of the castle, are worshipped as deities, and in front of this shrine a very beautiful well-kept park is provided, and at the end of this park there are the remains of a high tower of three or five stories

built within the walls of the castle. About fifty years ago there was a large castle of Prince Mori.

Shizuki mountain is not so high, but steep and all covered with luxuriant evergreen trees of great size, some of which are gnarled and others straight. Whenever you may look on the mountain and its vicinity, you may find many ruins of the castle, walls, and wide moats.

When we see these scenes we cannot help thinking of the passions of the old times and somehow feeling very solemn. Mt. Shizuki is one of the three beautiful sceneries in Hagi. If we climb Mt. Shizuki and look out searchingly over the whole extent of our vision, several dark blue little islands lie scattered, and sailing ships run by, by twos and threes. Sometimes we can see the steamers come over the waves for a number of miles. Every now and then we can hear the noise of angry waves tossing against the rocks and breaking high with foam under the foot, or little ripples rolling on the sea-beaten shore, sometimes we can see calm sea like a mirror to the farthest verge of the horizon. Oh! How beautiful the seascape is! The beautiful sight of the whole mountain is beyond description.

Then if you turn back and look in other directions, you can see all the town between two little rivers. People, horses and carriages are running like big ants. What a fine landscape it is!

If you ramble about and observe throughout the mountain, you can find more curious formations and the wonderful beauties both artificial and natural.

Of course this castle town should have been very prosperous in old times, but now it is all done away with, though only the ruins of the castle remain and Mt. Shizuki towers up just as it were alone. I assure you that we look at these sights and are struck with infinite feelings of old times.

Every day we can see this sacred mountain through the windows of our class-room. It is very

fortunate for us to receive our instructions adjoining this.

On account of this fact we must zealously seek after our lessons, and at the same time we are always encouraged that if we acquire knowledge even in a slight degree, it is for our country's sake. Well do our best in everything at school.

OUR ANCESTORS' GREAT PLOT IN THE MIDDLE AGES.

5th Year J. Itō,

After the Southern and the Northern Dynasties were united the agitation for hundreds of years was abated. The Samurai dispensed with their swords and dreamed of prosperity. While the people in the South-west provinces, and the vagrants were assembled to make a great army, to arrange thousands of armed ships, to try a great movement,—pillage of foreign countries,—China, and Chosen. They are called *Wako*.

Probably their abilities were not mediocre, nor their hopes common. But they did not have the proper position to become *Daimyos*, and they were too brave fellows to serve a *Daimyo* as faithful followers. To use their peculiar energy, they had only piracy. So these brave fellows trespassed, and had great power on the sea. These behaviors were mostly performed in the 16th century.

In ancient times the brave Scandinavians regarded the power of the sword as their right, and they plundered the other's that they might win their happiness, left their country, one and all, for pillage. And they laid waste the coast of the Northern Sea, and Mediterranean Sea, sometimes they appeared in the

interior and destroyed much. Even Charles, King of France, did not know how to check their plundering. At last he gave Normandy to them,—scarcely could he escape from this difficulty. But small Normandy was not fit to check their energetic ambitions, their attack was begun on England,—the opposite shore. Thus they conquered England, and William, an incarnation of piracy succeeded to the throne.

Indeed this great plan was unprecedented. Though their act was a great steal in the daytime, yet, to look back, the world is a great battle field of the survival of the fittest. "The weak is conquered by the strong." That is the law. Can morality in society check them? Can the law of the country punish them? Indeed the power of the sword is their right. *Wako* was also of the same mind. They did not reflect on the destruction of everything to do their will, not to speak of the law of the country, that their hearts were brave, that their spirits were fierce out and out, they were indeed the Scandinavian pirates. The different point was only that they had no William.

They adored *Hachiman Daijōsetsu*, and hoisted a banner marked *Hachiman*, as the Scandinavians did Tor and Odin, and wherever they plundered and burned even the noise of crying children stopped at the hearing of *Babanzoku*. Then they expanded gradually, increased their pillaged place, until they had a great territory,—from Luzon, Taiwan, to Vladivostock, and controlled the marine power.

The Ming Emperor and King of Korea sent a mission to us to keep them off, but did Shogun Yoshimitsu know the way? Truly the world was their only stage. Why should they not know "God gave us a sword, there are none against us?"

The condition of their piracy is a most exciting one! They oppressed the weak at their disposal, and not only did not know how to be tyrants, but regarded it as their congenital power. They did not stop to

reflect on doing every thing their wants demanded and that they might be contented, did not refrain from drawing the blood of many people. There was no enemy, no state's law, not to speak of the world's blame or praise. They acted by brutal power, instead of by conscience. They resolved by the sword instead of morality.

Is there any distinction of good and bad under the sword, before the brutal power? What do you mean by power and privilege?

Now it is a thousand years since the fall of the Scandinavians in Western countries. It is five hundred years since *Hoko* appeared. We can not see a pirate on the sea now. What is a pirate? It is the very country, which has strong warships. Who will become the second *Hoko*?

自非讀萬卷書 寧得爲千秋人

自非輕一已勞 寧得致兆民安

吉田松陰

講壇

示諸生

特別會員 栗屋周祐

これは、安政五年の作にかかるもの、松陰先生の教育方針を窺ふ一端にもとて、ここに、その略解を試みることにせり。たゞ、十分に、文意を發揮し得ざるを憾む。

村塾寛畧禮法、擺落規則、非以學禽獸夷狄也。非以慕老莊竹林也。特以今世禮法末造、流爲虛僞刻薄、欲誠朴忠實、以矯揉之。己新塾之初設、諸生皆率此道、以相交、疾病艱難、相扶持、力役事故、相勞役、如手足然、如骨肉然。增塾之役、不多煩工匠、乃能有成、職是之由。

〔解〕 わが村塾にて、禮儀や規則の事をやかましくしないのは、何も、禽獸や夷狄の眞似をする譯でもない、また、老子、莊子、或は、竹林の七賢人（晋時代の嵇康阮籍山濤向秀劉伶阮咸王戎をいふ）が、禮儀を無視し、我儘勝手の生活をした風を慕ふ譯でもない。ただ、今の世は、禮儀の果が、終に、虚偽刻薄（うそいつはり）をいひ人情の薄（うす）いこと）になり、外面の體裁ばかりを重んずるやうになつたので、誠朴忠實（心まことに

して飾りけなく、せめやかなることの心を養うて、この風を矯め直さうと思ふのみである。ところが、幸にも、この村塾が新に出来てから、諸生は、皆、この方針に由つて交り、氣病はたがひに救ひあひ、艱難は互に扶けあひ、力を勞する仕事は骨折を分ちあひ、お互ひの間は、恰も、手足の關係のやうに、又は、骨肉の間柄のやうな有様であつた。村塾を建て増す工事にも、大工の手を煩はすことが少くて、立派に出来上つたのは、その結果である。

村塾が始めて出来たのは、安政三年七月であつた、藩から、杉氏の宅地内の小舎で、家學の教授をするこゝとを許されたのに由る。増塾の事は、翌四年十一月にあつた。其の設計は、先生の友人中谷正亮の指圖で、工事は、大抵、先生や門人の手で出来たので、大工を備つたのは、僅か一二日に過ぎなかつたさうである。

吾嘗訪大和谷翁三山。三山曰、吾以充耳講學、所喜者諸生相親愛、如兄弟骨肉。然因學數事誦之。余時歎美不已。謂亦有德之言也。數爲諸生道之。諸生幸深諒此意、久次相授、雖廣川之門、無以加也。因謂是不難矣。

〔解〕 谷三山翁は、名は昌平といひ、大和の人である。十一歳の時、耳を患ひ聾となつた爲め、師に就いて學ぶことが出来ず、専ら、字書に頼りて獨學し、終に、當時に名高い學者となつた。松陰先生が訪ねられたのは、嘉永六年のことである。

自分が、先年、大和の谷三山翁を訪ねた時、翁の曰はるるには、われは、聾の身ながら、田園の間で諸生に學問の講釋をして居るが、諸生が兄弟骨肉の間柄のやうに互に親しみ愛しむのが、誠に嬉しいとて、二

三の例を擧げて話された。その時、自分は、羨しさに堪へず、これは、誠に、有徳の人の言葉であると思つて居た。この事は、其後、幾度も、諸生に話して聞かせ、諸生も、亦、この意を曉つて、塾生の間は互に親しみあひ、久しく塾に居るものが、後から入つたものに、順順に業を受けついで教ふることは、かの前漢の董仲舒の廣川の塾にも劣ることはないやうである。そこで、この事は甚だむつかしいことではないと思つた。董仲舒は廣川の人で、その塾にては、常に、帷を垂れて門人に講說をして居た。門人等の間では、高弟が順次に新弟子を教へて、先生の顔は見たことがないやうな有様であつた。

又嘗讀王陽明年譜、謂其警發門人多於山水泉石間、竊服其理矣。吾非陽明也。然朋友切磋亦當如斯。是以會講連業、未嘗設繩墨、交以諧謔滑稽、如匡稚圭說詩故事、如近春米鋤圃之舉、亦寓此意耳。

〔解〕 王陽明は名を守仁といひ、明時代の人で、宋の朱熹と並び稱せらるる大儒である。

また、或る時、王陽明の年代記を讀んだが、その中に、多くは、山水泉石の間を逍遙しながら、門人どもに道を説き聞かせると謂つてあるのを見て、心中その道理に感服した。自分は陽明ほどの人物ではない、しかし、我等朋友が、互に、學業を研究するには、また、かうなくてはならぬと思ふ。そこで、我等が、日頃集つて書物の講讀をするにも、別に、規則を設けず、昔、漢の匡稚圭が巧みに詩を説いて、人を笑はせたやうに、時には、おどけや冗談を交へて居る。近頃、米を舂き、或は、畑を耕しながら學問の話をして居るのは、この王陽明の故事にかたどつた譯である。

匡稚圭は名を衝といひ、前漢の元帝に仕へ、丞相となつた人である。

至擊劍踏水二事、武技之最切要者。時方盛夏、邊警又殷、不可一日弛然、徒視爲遊戲、不尙實用、消光陰、荒學業、亦可慮也。要之學之爲功、氣類先接、義理從融、非區區禮法規則所能及也。

〔解〕殊に、擊劍と游泳との二事は、武術の最も大切なものである。今、時候は夏の盛であつて、游泳には最もよい時期であり、その上、この節は外國船が出入して、警報が度度傳はるので、武術の事は一日も等閑にすることは出来ない。しかし、武術をただ一の遊戲と見て、實用を尙はず、光陰を空しく過し、學業を怠るやうなことは、考へねばならぬことである。

以上述べたことを一まとめにしていへば、學問といふものは、同氣同類の氣のあつた者が相集り交つて、その中に、自然に、道理が會得せらるるものであつて、些些たる禮儀や規則などで出来ることではないのである。

邊警又殷といふのは、嘉永六年米艦が始めて浦賀に来てから、その後、露艦や米艦が長崎や下田に屢々出入したことを指したのである。先生の考では、この際、幕府はとも頼みにならぬから、長藩が出て天下に號令せねばならぬ位に思つて居られたので、殊に武術のことを獎勵して居られるのである。

學者無所自得、嗶嗶多言、是聖賢之所戒。而偶有一得、沉默自護、余甚醜之。

凡讀書何心、非欲以有爲乎。書古也、爲今也。今與古不同、爲與書何能一一相符、不符、不同、疑難交至、開悟時有、乃同友相質、寧得已哉。

〔解〕學問をする者が心中何の得る所もなく、とやかく言ふのは、聖人賢人の戒められたことであるが、しかし、時に、何か心中得る所があつても、人に語らず、おのれ一人得意で居るのは、自分の醜む所である。凡そ、書を読むのは何の爲めであるぞ。大いに、世の爲めに盡さうと思ふからではないか。一體、書物は古のもので、實地に行ふのは今のことである。ところが、古と今とは様子が違ふのであるから、書物と實地とはどうして皆皆符合せうぞ。符合しない爲めに、色色、疑が起つて來ると、時に、心中に悟ることがあらうその時、同友が互に質しあふことは當然のことである。

然則沉默自護者、非無自得可語、則以人爲不足語矣。吾志則不然、已無可語、則已苟有可語、雖牛夫馬卒、將與語之。況同友乎。諸生來村塾者、要皆有志之士、又能卓立俗流、吾無憾焉。然意偶有所感、故聊言之。六月二十三日
二十一 回生書

〔解〕さうして見ると、人に語らず、おのれ一人得意で居る者は、何も人に語るだけの自得がないのか、或は、人を語るに足らない者とするのである。しかし、自分の考はさうでない。人に語るだけのものが無い以上は致し方ないが、語るだけのものがあれば、如何に卑しき者どもに向つても、與に、相語らうと思ふ。

況して、同友に對してはなほさらのことである。諸生の、この塾に來て學ぶ者は、皆、志の有る者で、世間の風俗の者に立ち勝つて居る。これには、自分は、遺憾はないのであるが、心中、偶々感ずる所があつたので、聊か、意見を述べた譯である。六月二十三日、二十一回生(先生自ら二十一回猛士といはる)が書す。

この時は、先生二十九歳であつて、この歳の十二月には、再び、藩の獄に入られたのである。して見ると塾の開かれて居た間は、二年半に過ぎない。この僅の日子の教育に由つて、あれ程の人物を輩出せられたのであるから、先生のこの教育方法が、如何に大なる感化を諸生に與へたかは、想像するに餘あるであらう。(終)

馬淵本縣知事訓諭要旨

K. A. 生 筆記

今日本校に來りて諸子の修學の狀を一覽し、諸子が孜孜として勉むるを見、甚だ満足に思ふなり。本校に來れる目的は諸子を集めて談話せんとは非ざれども、校長の囑望もあり、又余もこの様な機会を得ることには甚だ難き故に一場の談をなすことを快諾したるなり。併しながら多くの時を用ゐることを得ず、唯胸中に浮べる大切な事に就きてその大略を云はんとす。

近來世間に往々青年の精神墮落して不良少年甚だ多く、特に學校を卒業せるものにして不徳義のもの多しとの批難多し。この批難を聞きては現在修學中の諸子は如何なる感想を起すか、又學生を教育する任に當れる職員並に教育の局に當れる吏員もこの批難を聞きて如何なる感あるべき。學生諸子は勿論、職員並に當局吏

員に至るまで決して満足の思はなかるべし。抑々この批難は果して當れりや否や、思ふに其批難も多少の無理もあるべけれども、學生にも亦その批難を受くべき事實なきには非ず。但しこれは固より本校の諸子に就きて、この批難を受くる人ありと云ふに非ず。實に一般青年に就きて云ふのみ。さて教育と云ひ、學問の目的と云ふ事に就きては世人往々誤解あるが如し、即ち學問は諸種の學科を修むることのみ思ひ、教育とは教師が學校にて學科を教授することのみ思ひ、畢竟智啓發の方面に重きを置きて、徳器成就の方面の事は顧みざる傾あり。これ即ち誤解なり。夫れ普通教育の目的は善良なる國民を作るに在り。善良なる國民とは智能の達せるのみならず、徳器も成就したるものを謂ふ。是即ち學校教育の目的にして學問の目的と云ふも亦此に外ならず。然るに今中等教育に於ては教師各々その心を自己専修の學科に傾けて、その知識を授くるに勉め、人格養成を総合的目的を達せんとするもの少く、從つて學生も亦自ら其傾向ありて人格を養成することを等閑に附し、各科の知識を收得するのみに偏するは實に已むを得ざる現象なり。職員たるものかゝる努力に止まらずして能く各學科を連絡せしめて、人格と云ふ総合的の方面に留意し、學生亦自ら人格養成を目的として修學せば、是學校の目的を善く知るものと謂ふべし。

古の學生は蓋し今の所謂不徳義云々の批難も今日の如くに甚しからず。維新前の教育の狀況を考ふるに藩内の學校——今日の語にて云へば官立の學校——の數至つて少く、概ね藩中唯一個のみ。それも學徳の秀でたる人の出づるを待つて始めて學校を創立するなり。且私塾を開くものも、學者其人が建設者となりその高足の門人これが教授を助くるに止まり、要するに其人なければ學舎興らざる狀況なり。然れども一旦學舎の建設せらるゝに至れば其教ふる所は孔孟の非されば老莊の學にして或は陽明學を奉ずるものもあるべく、何に

せよ皆道徳を以て教育の基本となし、天文醫術其他専門の技術を教ふるにも一として倫理に關せざるものなく、師は己が曾て教科書として學びたりしものをそのまゝ又教科書として己の門人に施し、其學說の源は我國體に適せざるものも、師はよく之を我國狀に適する様にして生徒に教へ、生徒亦力を道義に用ゐて修學せり。其狀況は絶えて今日の學校に於て各科の教員各々その學科の知識を授くるに汲々として道義の事をば倫理一科に委ねて敢て關せざるが如きに非ず。此點にて古今の狀況自異にして今日は遂に知識を重んじ徳義を輕んずる弊に陥りたり。然りと雖もこの今日に於ける弊は別論としても、單に制度の上より考察するも、その徳義の方面に力を用ふることは古今自ら輕重なき能はず、これによりて世の批難者古を以て今を律し、今の教育が徳義を輕すと云ふは亦道理なきに非ず。故に假令前述の如き弊なしとするも今の教育が徳義を等閑にし易きを視て唯制度の弊之を然らしむるのみと一任しあらば——今日の青年唯世人の批難を受け居るならば——當局者も甘じて看過するならば我帝國前途の徳義を奈何せんや。故に必ずやこの一點に留意し假令今日は諸學科知識の教授多きため、人格養成に意を注ぐ時機少くとも古の人に及ばざるに甘ずることなく奮起一番が肝要なり。望むらくは諸子維新前の狀況と今日の制度とを比較對照し更に之を今日一般の通弊に鑑みられんことを。夫れ弊なくとも猶古今を比して今の古に如かざるに甘ずべからず、況んや弊あるに於てをや諸子宜しく自らその綜合的養成——人格の養成に勉めて以て夫の一般青年の受くる批難の部分を補ひ間然する所なきに至らしめよ。余はこゝに再言す、普通學校特に中學校教育の目的は綜合的即ち善良なる中等國民を作るに在り。智能啓發固より必要なれども、徳義の養成を忽にせば決して立派なる國民となること能はず。かゝる智能一偏の國民を作るは實に中學校の目的にあらず。勿論智能啓發は徳器の成就に必要なり。併

しながらそはその手段のみ。徳器成就の一手段として智能啓發が必要なるのみ。即ち成徳の助なり。結局は立派なる人格の高き國民を作るに歸す。想ふに職員諸君もその積なるべし。一層の精勵を望む。爰に大體今日の通弊を述べて諸子が學問の目的を過らざらんことを望むために一言せるのみ。

海軍紀念日に於ける白井海軍大尉の講話

平山 茂 筆 記
小川 義 雄

本日は、今より九年前即ち明治三十八年五月廿七八兩日に涉りて日本海大海戦のあつた紀念日である。兩日の中にて、何故に二十七日を紀念日としたかと云ふに、當日我海軍の主眼目的が此日を以て果されたからである。我海軍々人はこの日を如何に過すかと云ふに、水交社で祝賀の儀式を行ひ、三十八年十二月二十一日東郷大將つ出された訓辭を朗讀し、當時を追懷して、楽しき一日を暮すのである。水交社に行かぬ者も、心の中に彼の文を誦する事となつて居る。

さて當時の主眼目的は何であつたかといふと、即ち海上權を得るといふことである。海上權を得ると云ふ事は、平時商工業の發展を謀る上にも勿論重要な事であるが、當時にありては殊に必要であつた。我陸軍の連戰連勝するに對しては、糧食兵器等の補充をどんどんやらねばならぬ。之をやるには安全に海上權を專有する事が最も必要である。是が即當時我海軍の主眼目的であつたのである。是から其主眼目的を達したまでの梗概を御話して見やう。

仁川沖で、瓜生指揮官の率ゐる千代田・高千穂・淺間がワリヤーク、コレーツを撃沈したのが二月のはじめで、是が戦闘開始であつた。

これと同時に、旅順の沖では、驅逐艦二十隻で敵艦を襲うて損害を與へたが、これより万事都合よく行つて、陸海軍は連戦連勝して、三十七年十二月二十三日に彼の二百三高地が陥落し、尋いで旅順の敵艦を全滅して、三十八年一月に旅順は開城した。ウラジホ艦隊の奴が弱いものいじめのいたづらを始めて、津輕海峡その他に出没し、御用船を撃沈める。そしてそれが中々巧妙で、我軍の輸送を妨げるから、八月十四日、上村艦隊はリュウリックを撃沈し、ウラジホ港口に水雷を沈設した。旅順は我有に歸し、ウラジホ艦隊は封鎖せられたので、露國艦隊は日本海北太平洋に手出しが出来ぬ。それに反して、日本は安心して仕事も出来、戦争もやれるよい状態になつた。

然るに茲に我軍に取つて一大心配が有つた。それは露國が、ロゼストウエンスキイをしてバルチック艦隊即ちリバー軍港の艦隊を率ゐて、旅順陥落前に、東洋に著せしめるといふ事のそれであつた。旅順の奴もそれを知つて居たので、戦闘は益々悲惨を加へた。若し日本が、旅順艦隊とバルチック艦隊とはさみ打ちをされた日には、兵力上から云ふと如何なる損害を受けるかも知れぬ。かゝる重大な問題があるので、主上にも非常に御心配遊ばされ、乃木將軍の許へ、度々詔書が下つたさうであり、又日本國民の心痛も一通りでは無かつたが、我軍の肉弾攻撃は、遂に三十八年一月の一日二日にかけて、旅順を占領し、奉天も三月に陥つて、残るは我海軍のバルチック艦隊撃破の一事であつた。かく大責任ある仕事を二十七八兩日に果したが、第一日が順當に行つたので、第二日には敵の總督を捕へることが出来た。そこで此日を選んで紀念日としたのである。

る。是から日本海の大戦の話にかゝるのであるが、其前に準備の概略を一通り話さねばならぬ。

艦隊出動の準備は如何にと云ふと、軍艦はドックに入れて掃除修繕をなし、又兵器もよく整理し、兵員の補充交代をもせねばならぬ。

それがすむだら今度は技術の練習である。技術は平生から練習を重ねてやつては居るが、これによいといふことはないから、すはとすると一層練習せねばならぬ。又兵員の休養も必要である。かく各方面の準備をするうちに、敵はだん／＼近づいて来る。空前の大戦は刻一刻と迫るのであつた。海軍の戦闘は第一が敵を求むることである。我艦隊の第一第二は本隊で、第三及特務艦即ち假裝巡洋艦は索敵が目的であつたが、敵を求むるには敵味方共に苦心したのである。

露國の遣東艦隊は二部に分れ一部は喜望峯を廻り、一部は地中海よりスエズを経て印度洋に出て、マダガスカルに集まつた。此時旅順は陥落したので、計畫は全く齟齬した。そこで露國では、ロゼストウエンスキイ中將の率ゐる第二太平洋艦隊だけでは戦争は出来ぬと云ふので、御前會議の結果、ポロ軍艦を集めて、一艦隊を組織し、之を増遣することにした。するとロ提督はそんなものは却つて足手まといとなつて戦闘が出来ぬと言ふたが、國民が承知せず、遂にネボカトフ少將をしてそのポロ艦隊の司令官たらしめて派遣した。是が第三太平洋艦隊である。

我國では、敵をなると暇どらせるため、シンガポールを通過する前にをどしてやらうと云ふので、笠置千歳に御用船八幡丸亞米利加丸を加へて、先任艦長指揮の下に南清方面に出動させた。マニラあたりで、人々に見せるため、同じ艦が幾回も幾回も同じ港に出入した。その計効を奏して、敵がマレイ半島に来る前に

日本艦隊の居ることを知った。當時その艦に居た戦友に聞くと、露艦隊の探照燈を耀して居るのを見たそう
だ。ロ提督は、石炭が欠乏して航海が困難であるので、「大膽なる所置は安全なり」との格言を守つて、虎穴
に入る思ひでシンガポールを通過した。敵ながらさすがに天晴であつた。かくしてカムラン灣に入つて、第
三艦隊を待つて居た。この時我國の一商船が敵に捕へられた。之が爲に、此方面に於ける我商工業は頓る不
振の状態に陥つた。然しその間に我戰鬪準備は全く出来上つて居た。聖上陛下より東郷指令官に御下問があ
つた時、この事を奏上せられたから、それではと云ふので我國は、佛國に對して、中立國の領地より敵艦を
立ち退かしむる様にと交渉を申し込むと、佛國も承知したので、露艦も不精々々にその港を出て、其近傍に
まごついて居て、五月九日に第三艦隊がホンコーへ灣に來着したのに合同した。

敵が五月十四日たホンコーへを出港したのは、シンガポールの所謂日探によつて知ることが出来た。我國から
は、當時各重要の港には日探が出してあつたが、是は無論露國もさうであつたらう。敵の出港を知つた我軍
は準備をさ／＼怠りなかつたが、敵の通路が疑問であつた。津輕海峽なるか。宗谷海峽なるか。但しは對馬
水道なるか。又は三分して三所を通るか。二分して二所を通るか。我軍にては、島や岬等の出張つた所に望
樓を置き、三名乃至六名の兵をして、有線無線の電話を以つて、そのあたりを通過する船を一々報告せしめ
た。我軍では、二十三日頃には、敵が對馬海峽に現れること、期待して居たが、一向來ない。それで上下
非常に心配した。殊に當時の參謀長加藤海軍中將の心痛は一通りてなかつたが、東郷大將は確信せられる所
があつたと見えて頗る平氣なものであつた。二十五日に、上海の日探より、露國の運送船が水や糧食を取り
に來たのを知らせたので、敵の支那海に入つた事が知れた。是に於て我軍は益々警戒を嚴にした。敵も我軍

を欺くに苦心して、二隻の分遣隊をして太平洋を廻航せしめたが、その計略は無効であつた。我軍からは信
濃丸、亞米利加丸、八幡丸等四隻の警戒船が出してあつたが、これではおぼつかないの、更に第三艦隊が出
張つて、濟州島には須磨、五島列島には和泉が見張つて居た。警戒線は網の如く、見張は嚴しく、戰機はい
よ／＼熟した。二十六日の午後に至りて、全艦隊は「何時も出動の出来る様船を入れずして漂泊すべし」と
の命を受けた。當時、私は八重山艦の航海士でありました。この艦は、旅順沖では通報艦、日本海では第三艦
隊の通報艦であつたが、今は老朽の廢艦となつて居る。當時第三艦隊はこの様な老朽艦のみで編成されて居
たので、我々はゴロ艦隊と呼んで居た。航海士は艦の信號を掌るので、何時も艦橋に立つて居らねばならぬ。
殊に通報艦であるから、小使が手紙を持つて歩くのと同様である。そこでもうチャント「敵艦見ゆ」との信號
の準備もし、又飯も腹一杯食つて、武士は死様が大切だと云ふので、フンドシも新しいのを締更へて、一時
に寝たが、さて一向敵艦見ゆとの報知が無い。八重山は他の三艦と交る交る油谷對馬釜山の間を往來して、
ウラジホ艦隊を警戒して居た。今でも忘れられぬ事がある。それは軍艦が飛び歩くので石炭が不斷入用であ
る。その石炭は將校士卒が力を合せて積み込んだ。それが又非常に困難であつた。將校士卒が自ら石炭を積
むと云ふことは日本海軍のみであつて、實に日本の誇りであらう。石炭積みは各艦競争的にやつたので、迅
速にはかどつたが、之がため全身まっ黒くなつて、誰彼の見分けもつかなくなつた程で、石炭積みは戦争より
もつらかつた。嘗て石炭積みが終つて、某水兵の妻君が面會に來たが、水兵がまっ黒な顔をして居たので、
さて二十七日に至りて、いよ／＼大海戰の幕は開かれた。信濃丸は當日午前四時半五島列島の西北二十海里の

所で、暗夜濃霧の中に燈火を見出した。近よつてよく見れば敵の病院船である。敵艦隊は屹度其附近にあるに相違ないと、ます／＼近よれば、敵は自分の味方と思つて信號してゐる。ふと気がついて見れば、此時全く敵中に突入して居たのであつた。信濃は素より假裝艦で、頗る危険であつたから、遂に決心して彈著地をばなれ、「敵艦見ゆ」との報告をなした。時に午前五時であつた。この報告に接した我輩は喜び勇んで用意の信號を掲げ、出動用意をした。この時八重山艦に日常はあまり働けもせぬよぼ／＼の老兵曹が居たが、敵艦見ゆとの報に接して、又戦かつと叫んだ聲は非常に若々しく聞えた。つゞいて「敵は二〇三地點にあり」と報じた。二〇三地點とは必要上海面を幾區分した名であるが、旅順の運命を定めたのも二〇三高地、この海戦に敵を認めたのも二〇三地點、二〇三は日本にとつては不思議な運命の數である。この報告は和泉がなしたのであるが、その艦長は大佐の石田一郎といふ長州の人で、極めて剛膽な人であるので、人が呼んでヤッキと云つて居た。和泉は目下廢艦となつて居るが、石田艦長はこのボロ艦に乗じて大膽の行爲をなした。後信濃と共にこの艦も威状をもらつたのである。石田大佐は敵にくつゝいて、敵の勢力行進方向・速力・陣形等を詳しくしらべて報告せられた。敵にくつゝいて居るのは自分獨だが、この大任を果し得たなら自分は沈んでもよいと決心せられたのである。後日人に語つて「敵が自分を殺さなかつたのは不思議だ」と云はれたさうである。かくして和泉は安全に職務を果した。然し内地ではこの事を知らぬので、博多から、第三共同丸が客を乗せてズン／＼やつて來るから、信濃より信號して逃げさせた。又陸軍の運送船の大連に行くのが、陸兵を乗せてノコ／＼やつて來た。船長は敵ありとも知らず、兵を甲板に上げ、和泉を見て萬歳を稱へた。和泉は信號したが通ぜないので、側まで行つて知らせさせて逃げさせた。石田艦長は實にハラ／＼せられたさうである。

對馬附近に居た我第三艦隊は敵艦見ゆとの報に接し、たゞちに出勤、午前十時頃敵と衝突した。其任務は敵の所在を失せずして、之を對馬・角島・見島の間の袋の中に誘引するのであつたから、時々攻撃しては逃げて行き敵を誘ひつゝ北進した。十一時十二時頃になつても、我主力艦隊は姿を見せなかつた。全體主力艦隊は、敵の航路如何によつては、遠く津輕宗谷へまでも迅駛せねばならぬといふので、甲板上にまで石炭を積むて居たのが、敵艦いよ／＼朝鮮海峡に現れたから、上村司令官は「石炭捨て方」といふ珍無類の信號を掲げられた。それから戦闘準備に取掛つて、平常清潔な軍艦をも一層清潔にし、又死傷者の血糊が甲板に附着すると滑るから砂をまいておき、大砲の手入れをなし、賄の方でも握飯を多く作つて、彈を打ちつゝ、食事の出来るやうにした。軍歌を歌つて士氣を鼓舞するものもあれば、死を眼前に控へながら、伸氣に寝て居るものも居るなど、意氣既に敵艦を呑むの概があつた。いよ／＼出勤といふ時に、大本營に打つた電報が、「敵艦見ゆとの報に接し、聯合艦隊はたゞちに出勤、これを撃滅せん」とす。天氣晴朗なれど波高し」と云ふのであつた。今に名文として傳へられて居る。是時敵艦隊は全部にて、對馬水道二十三度東の位置に在り、十二哩の速力を以つて、浦鹽に向ふと知れたので、我軍では、速力を十五哩とし、旗艦三笠の橋頭に、彼の有名なる「皇國の興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ」の信號が掲げられた。これを見た全艦隊の士氣は一層振ひ立つた。午後二時十分、八千米の距離で、敵先づ火蓋を切つたが、我艦隊は満を持して發せず、七千米に至りて一齊に射撃を始めた。見島から程遠からぬ地點であつたから、長州北海岸の人々は砲聲を聞いたであらう我艦隊は絶えず露の主戦隊を左に見て、その頭をおさへる様にして、常に有利の地位を占めて居た。敵は準備が無いから、目標も定らなかつたが、日本はチャンと定めてあつて、先頭の二艦を撃沈するのが最大有効

であるとして、オスラビヤ、スワロフを目標として打ち出した。スワロフには總指揮官が乗乗して居た。されば戦闘の初期に於てこの二艦は既に火災を起したので、陣列は亂れる。次いでアレキサンドル三世、シツイベリキも惨害を蒙つた。午後四時頃が最も激烈であつて、多くの敵艦は損害を受けた。七時二十六分、日が暮れたので、戦闘は中止せられ、各艦は鬱陵島に集合すべき命を受けた。是れから水雷艇の活動舞臺である。七時二十五分、待ちに待つた水雷艇隊は襲撃に取掛つた。通報艦龍田、千早が教導して行つたが日頃ならば、波が高いので、乗つてゐる連中が我儘を云ふのであるが、今日は喜び勇んで行つたから白い。波が餘り高いので、體を柱に結びつける程であつた。是時我艦隊は、水雷艇隊を先導する通報艦と戦場は最も壯烈であつて、敵の報告によると、大砲の下まで押掛けたのでどうすることも出来ず、日本士官の號令までよく聞えたさうである。かく冒險極まる大活動をやつたので多少沈没したが、晝の戦闘には軍艦の沈んだのは一つもなく、彼我勝敗の大勢は是日に於て既に定つた。

二十八日、各艦隊は鬱陵島に集まつたが、四時二十五分頃、巖島が前方に黒煙を認めたと、八重山は其何なるかを確かめよとの命を受けた。早速出て見ると敵の敗殘艦なることが知れた。我輩は大喜びで、敗殘艦五つ、巡洋艦一つと報じたが、これは誤りて、實際はチボカトフの率ゐるニコライ、アブラキシン、アリョール等の五隻で、戦艦は二隻であつた。こんな時には物が多く見える様だ。十時過、我主力艦隊は、之に向つて約五分間の攻撃を加へた所が、敵は直に降伏旗を上げた。我々のまん中に降伏艦を置き、松島巖島の軍樂隊が君ヶ代のマーチを奏した時には、我々は我を忘れて萬歳を稱へた。こんなうれしかつた事は無い。是時

ウーシヤコフは逃れやうとしたから、八雲等追掛けて降伏をすゝめたが、聞かなかつたから撃沈めた、この日の夕方五時頃、鬱陵島附近で、我漣と陽炎とが敵の驅逐艦二隻を発見して追撃した。速力の速い方は遂に逃げてしまつたが、残つた方は降伏した。これには重傷を負ふたロゼストウインスキー提督が坐乗して居たので、これを捕虜とした。漣陽炎は之が爲に感状をもらつた。かくしてロシアの東遣艦隊は全滅し、我艦隊は豫想以外の好成績を収め、東郷大將以下之を御稜威の致す所神明の加護に因るものとして深く感謝せられたのである。これに海上権も見事我専有に歸し、商工業も平時と同じくなり、目的は達せられたのである。これを聞いた滿洲軍は奉天を取つたよりもよろこんださうである。

さて右の御話で戦争談は終つたがロシアの敗因に就いて少し話して見やう。當時の某雜誌にのせてあつたが某新聞記者が、加藤閣下の許へ勝因を聞きに行つたら、たゞ一言「勝つべき戦争に勝つた」と云はれたさうだ實際兵力は同じであつたので、勝敗の因は無形にあつたと云はねばならぬ。

第一、ロシアの兵員は雇兵的だが、日本はこれに反して、軍人となつて國に盡すのを最大名譽と思つて居る。

第二、東洋に派遣せられた艦は、長途航海のため、半年ばかり兵員の訓練が不足となり、兵は倦んで士氣が落ちて居た。

第三、或士官の話によると、露艦がマダカスカルに泊つた時、士官に海邊の散歩をゆるした所が、酒を食つて腰を抜かす様な奴が居たので上陸を禁止し、水兵は逃走の憂があるので絶體に上陸させなかつたさうだ。

第四、戦法及技量がまづかった。技量の如きは、縦射撃ほとんど日本の足もとにもよれなかつた。

第五、訓練にも秩序が無く、何にも油断が多かつた。

第六、上下の意志が疎通して居なかつた。

以上の諸件は主なる原因であつた様である。日本は之と正反對であつた上に、數度の戦争を経て意氣旺盛に經驗に富みて居たのである。次は天祐であるが、目出度戦果ををさめて、東郷大將が聖上に上られた報告文の中にも「天祐により」云々の言葉があるが、天祐は故なくして降るものでない。寝て居て天祐を待つても駄目だ。準備によつて天祐は來るのである。日本は非常に準備がよかつたので、天は日本を助けて下すつた。諸君は今戰場に出る準備をして居られる、天祐と神助とを得る目的で勉強し、落ちついて準備を充分にせねばならぬ。「事細ならざれば膽大ならず」である。細かに準備せねば大膽な仕事は出來ぬ。諸君充分この點に注意せられんことを希望致します。

古谷少將訓話の要旨

兼重政輔筆記

私は今から此演臺に立つて、諸君の目的について、暫くの間愚考を述べやうと思つて居ます。諸君が將來君國に報いるには、或者は文を以てし、或者は武を以てしやうと種々な考を持つて居るでせう。然し諸君は意志を鞏固に持たなければ、其目的を貫徹することが出來ない。私が足痛の身を提げて、態々本校に來て演説

をするのも畢竟諸君が前途をあやまらないうらにしたいと思つてのこととあります。第一、諸君が學問をせらるるには、國體と云ふことに注意せられねばなりません。御承知の如く、世界には君主國も多い。支那も現に昨春まで君主國でありました。然し國體の變つた國も少くありません。今は交通が便利になつて、外國の書物も、容易に之を机上に見ることが出來るやうになりました。外國の書物を見ると、兎角外國の精神に氣觸れるものである。現に我國にも社會主義者なるものが出て、一汚點を刻んだてはありませんか。何ぞ諸君は外國の精神に氣觸れないやうに讀書してもらいたいものであります。次には、我防長二州の歴史を知ることが必要であります。御承知の如く、明治初年に於ては、豪傑の士も多數輩出して居る。又之と同時に、二州人の性格を考ふることが必要であります。私に思つて見るに、防長人の適所は、實業家として世に立つよりも、文武官となつて世に處して行くに適した方ではありますまいか。素より、實業界に身を投じて立身出世した人がないと云ふてはないが、文武官となつて成功した方が多い。文武官も殊に武官の方が多い然し私が斯く云つたからとて、必ずしも武人になれと云ふのではない。諸君は何の職業に赴くとも、其は諸君の勝手であります。唯一途に國家の隆盛を計りさへすれば、縦令下流社會に居たからとて、何等妨げはないのであります。私は軍服を著て居るから、軍人になれと諸君に御進めする次第であります。一體開闢以來國家が一度も外國に侵されたことのないのは、武があるからであります。然るに今日では、武官になれと進むる者を詰るものがある。此も畢竟する所、現世の風紀が懦弱になつたからであります。思うて見るに、明治初年、私共が勉學した頃とは、趣が大分違つて居ます。維新時代には同朋の制裁が厳しく、身邊を飾る者は皆制裁を受けたものである。然るに現世にては、身邊を飾ること非常に甚しく、而して之に制裁を加へる

人は少い。諸君心にはづる所はありませんか。又或時山縣老公が云はれたことがある。「明治初年の學生は、講堂で講釋を聞いて居て、寢氣がさして來ると、公然と机の上に寝たけれども、今の學生は机の下で寝る」と。能く今世の有様を云ひあらはした話ではありませんか。今世は徳義もなく、禮儀もなく、恥も知らない而して、元氣がないかと云ふに、そうでもない。社會一般、國民の元氣を示さなければいかん。然るに、新聞紙上にて屢々見る如く、暴舉をなす者が多い。而かも其中に中學生が居る。元氣を示すには、そんな暴舉をしなくても、外に種々方法はあります。又近來同盟休校をすることが流行る。元來本縣にはなかつたものを新輸入して、昨今續發したが、實に卑怯であつて、徳義も禮儀もないと云はねばなりません。私共の少年時代にはあんなことはせず、直接談判に行つたものであります。こんなことは些細なことであるが、何にしる遠い前途を持つて居らるゝ諸君は、何事にも、君國の爲と云ふ精神を忘れぬ様にしてもらいたいのであります。武官志望者の中に申譯に志願する者がある。かゝる人は歓迎せぬ、又目的も達することは出来ない。どうか諸君が眞實に目的を立て、立派に成功せられんことを望む。私は武官養成に従事して居るので。試験不合格者から悲痛の手紙を受けることが度々あるが、斯の如きは手後れてある。失敗した後で悔いても無駄であるから、前以て十分に勉強しなければいけない。兎角油斷は失敗の本である。武官志望の者は申譯に志願する様なことがあつてはいかん。昨年乃木將軍に面會した時、將軍は「防長二州に有爲の者があるか」と問はれた。私は「將軍の如きよい手本があるから澤山に出來る」と答へた。將軍は「又富豪にもあるか」と問はれたが、私は「あります」と答へることが出來なかつた。今度は、私から「學習院は如何でありますか」と問うた。處が將軍は云はれた。「駄目である。先日も教室を巡視した時、純銀のペン軸に純金のペン先をつ

けた者もあり、又高價の色鉛筆を所持した者があつた。こんな者が居るから駄目である」と。諸君の中には或はかゝる物を持つて居る人はありませんか。なければ至極結構であります。縣下から多くの軍人も出て居るが。將軍の言の如く、富豪からは極めて少い。次に幼年學校にも、生徒が三百五十人位ある中で、四分の三は中學から行つた者で、残りが小學校からいつたものである。然るに小學から出た者の方に優等者が多い。是はなぜであるかと云ふと、小學生の方は、小學校から入らなければ、幼年學校へはもう入學することが出來ないと云ふ覺悟があつて奮勵努力して、少しも油斷がないのに反して、中學生の方には、之がないからである。故に諸君は油斷してはいけない。今年山口高等商業を卒業した者の中に苦學をした者がある。三年間車をひいて勉勵し九拾六名中第三十何位にあつた。私が「車をひいて一ヶ月の収入が何程あるか」と問ふて見たら、彼は、「九圓の収入があります、之は皆私の學費ではありません。私のは内から出ます。然し、弟のが出ませんから、其を私が出してやるのであります」と答へて。斯の如く、三分の一以内の地位にかゝる苦學をした者がはいつたのは、其以下の者は皆油斷して居たと云はねばならぬ。又昨年は、一苦學生が當校を卒業した。元來かゝることは多くしない方がよいけれども、不義の金を人に借りるよりも、苦學した方がよい。何事にも大事なものは精神である。さて世界には種々なことがある。一方には平和を稱へて、軍備を減さんとするかと思へば、一方には之に反して、軍備の擴張に務むる者がある。此までは、幸に一般國民に君國に報ゆる意氣もあり、又上將にも畫策をよくする者があつて、大國にも打勝つことが出來たが今は如何であらふか。諸國は大に意氣を持たなければならぬ、遺憾ながら我國は貧乏國である。一旦世界の平和が破れたならば、是非戰端を開かねばならぬが、其の時は先づ近國と戦ふが普通であらふ。そうすれば

第一が支那であるが、支那は一旦我が國に敗を取つたけれども、中々の大國で侮るべからざる大敵である。第二がロシア。此は先年の復仇の思もあり、又國家は富んで居るし、常備兵ばかりでも百三十萬ある、畏るべし強敵である。第三がアメリカ合衆國。財政は豊に、軍備も整つては居るが、百萬の大兵を彼地より送るのは一寸困難であるから、是は先づ平和の破れる様なことはないとしてもよからう。以上孰れにしても、侮ることの出来ぬ剛の者である。然るに我國の常備兵は何程あるかと云ふに、只の二十四萬、とても數に於て彼等に勝つことは出来ない。そうすれば、如何しても氣で勝たねばならぬ。故に諸君は意氣を壯大にしなければいかん。諸君、武官に志すならば、大隊長位に止まつてはいけぬ。先輩も澤山あるから必らず上將にならねばならぬ。我國にて百萬の兵を出すを得ば、他の國は之に比例して多くの兵隊を出すことが出来る。故に上長に良將があつて、之れを指揮し、兵士は意氣壯大ならざれば勝つことは出来ない。諸君は、何處までも心を此に注いで務めなければいかん。今各國の兵隊を見るに、人口千に對して七強乃至八、九、十弱にして、佛國ばかり千に十五強である。然して日本は千に四内外である。故にどうしても氣で勝たねばならぬ。然して氣力は之れを學生時代に修養せねばならない。今其についてよい一例をあげやう。岩國の出身で幼年學校へ入校した白銀某といふ人がある。幼い時父を亡ひ、母の手一つで育てられ、小學校からすぐ幼年學校に入り、成績抜群で、昨年九月、第一位を占めて卒業し、中央幼年學校に入り、今尙勉學中である。此子は小學の時から心掛けよく、冷水浴は早くからやり、衛生上の注意は何一つ不足なく、病氣になどなつたことなく、幼年學校に入つてからも、學問は勿論、外のことも何一つ出来ないものはなく、實に有爲の才である。校長も彼は畏ろしい人であると稱賛して居た。是は全く氣力があるからである。一二年の人は之を手

本に出精するがよい。諸君は何事も放棄してはいけぬ。何んでも人がすることはどうでも成就しやうと云ふ考でせねばならぬ。人には天性美質を備へた者もあるが、學ばねば大成しない。磨かぬ金剛石は砂石に異ならぬと云ふ様に、勉強は大成の本であります。是から少し防長人の缺點をあげてみやう。少しく才能ある者は人を馬鹿にすると云ふ癖がある。例へば中學校を卒業して高等の學校へ入學すると、成績が次第に下る者があるが、是は高慢心が生ずるからであらう。東北地方の人にはあんなことはない。又何事も多く口へ出さない。中將三浦子爵は、「山口縣人は小才をたのんで人の忠告を聞かぬ。例へば、大提灯をともして之についてこいと云つても、之にはついてこないで、只己の蜚程のあかりをたどつて行くと云つた様な事が多い、是は大なる缺點である」と云はれた。又昨年、寺内伯が養成所に宿られ、縣下學生四十五六名の前で、「縣人はちしやつばと同じである。初の内は味も誠によいが、かみしめるとしぶくなる。人間といふものは斯の如くあつてはいけない」と諭された。又縣人は、人が成功すると、「あれが」といふ。之には馬鹿といふ意を含むと同時に自分はよいと云ふ意を含むのであつた、甚だ面白くない。之れも心得の一つにまで云つて置く。先帝からも、質素については色々の御誼もあつたが、明治十六年に軍人に賜はつた詔勅の中に懇に御諭しになつた。然るに此の頃の世の風儀は、素朴を離れて奢侈に流れやうとして居る。誠に畏れ多いことを云ふが、先帝陛下の御聖徳は口も筆も及ぶことでない。國民は此の御聖徳を忘れてはならない。先帝は六十二歳で崩御あらせられたが、此間御遊幸御避暑も遊ばされず、近侍の者が御進め申し上げても御聞入れがなかつた。是は全く、儉素を重んじ給ふ御聖徳から出たことであると伺はれる。御附の者が或時此事を申しあげた處が、「卿は毎年かく云ふが陰は卿等に見せるものがある」と仰せられて、文庫の中から黒い

紙を出して其者に示し給うた。是は維新當時御習字遊ばされたものである。之に由りても平生御質素の程が伺はれて畏れ多い。古は些々たる事にも命をすて、腹も切らなければならなかつたが、今は諸君が如何なる職についても、生命に危険はない。但破廉恥の行をなせば此限ではないが、人の人たる道をふんで行けば何の危険もない。諸君は吉田松陰先生のダイカラを見て何と思はれるか。我二州は多くの先輩を出して、維新の大業をなしとげたが、是は上下儉約を守つて、國力が充實して居たからである。民俗が華美であつて、其國が盛になつた例はなく、武備がなくて其國が治まつた例はない。然るに武官になる者を語るには何といふことか。今から武官志望者に對して云ふ。近年我縣の學生の軍人となる者が、陸軍では第三位を下つたことはないが、海軍の方は比較的少い。諸君は之に志願しなければならぬ。いな其目的を達しなければ駄目である。目的は高遠に持たなければならぬ。又たえず進まなければならぬ。何とぞ多く海軍に志願せられよ。中には海軍には先輩が少いと云ふ者があるかも知らぬが、先輩に依頼してはならぬ。先輩より以上になる覺悟が必要である。海軍にも佐官位には人物が多く居る。大に諸君の前途を示して居る。私が竊に思ふには、陸軍は毎年八百人を召集して居るが、今後之だけ召集するかどうかは確でない。若し半分になるならば、幼年學校が三百人であるから、中學からは百人である。故に全部山口縣から出すと云ふ意氣込で進まなければならぬ。陸海軍志願者には、特に問題集を分配する。然し之を棚にしまつて置いて研究しなければ何の益もない諸君の目的は何であつても、兎に角に目的に向つて突進せられよ。終りに臨んで諸君の特に體格に注意せられんことを祈ります。

開校記念式に於ける村上校長訓辭

H. F. 生 筆記

本日は本校創立第十四回記念日に相當するを以て、只今より其式を舉行する。生憎降雨にて、式後例年の通り運動會も出來ざれば、幸に本校教育の主義方針に關する愚見を吐露して、諸子の注意を引くこととしやう本校は創立以來年を経ること十四、毎年一百名内外の新生徒を收容し、六十名内外の卒業生を出し、十三回の卒業式を挙げ、六百三十二名の卒業生を出した。其等人々は、或は大學を卒業し、或は高等商業高等工業醫學専門學校等を卒業して、現に社會に活動して居り、又陸軍士官學校海軍兵學校を出て軍職につき、國家の干城となつてをるものもある。六百三十二名が各多少の貢獻をなしつつありとすれば、我が萩中學校は確に存在の價値なしとは云はれないのである。此價値をして益々大ならしむるには、職員生徒上下一層の奮勵努力を要する。此記念すべき日に於て、來賓諸賢列席の前に愚見を開陳するは最適當の事であると信ずる。」

我邦教育の大方針は、先帝の下し賜ひし教育勅語によりて既に定れるが上に、又戊申詔書の炳焉として、國民一般の心得を示し給へるあれば、今更事新しく言辭を費すまでもなく、全國諸學校其揆を一にしてをることではあるが、土地に便否の差あり、人情に厚薄の異あり、各地方其々特有の點あれば、之に應じて適宜の方法を設け、地方の特色を發揮することは亦忘るべからざる事に屬するであらう。

然らば我萩の地には如何なる特異の點があるか。如何にせば我萩學生の教育方針に適するであらうか。我萩の抱負は如何。是余が本日諸子に語らんとする主眼の點である。我萩の地は王政維新の策源地である。維新

事業に、身命を抛ちて國家に盡したる先輩は枚舉に遑がない程である。而して、殊に其先輩の先輩たる吉田松陰先生を有して居る。是は實に此郷の誇である。天下に對して誇る價值がある。此先生の皇國臣民たるもの、當に履行すべき規範を示されたるものが彼の有名なる士規七則である。此士規七則に示されたる所が即ち我々教育の主義方針である。詳言すれば、教育勅語戊申詔書、其に士規七則を加へたるものが、我々上下の日常服膺すべき大訓である。其故に、我々には、別に校訓など云ふものを定める必要はない。士規七則は恰も松陰先生が豫め我々の爲に作り置かれたるが如き感がある。松陰先生が諸生を訓へられた方針は即ち我々教育の標準である。

かく云つたばかりでは餘りに抽象的にして、本旨を捕捉し得ぬこともあらう。故に、今少し具體的に布衍して話して見やう。松陰先生は讀書の人であつた。恐ろしい勉強家であつた。然しながら、決して單に道樂に讀書したのではない。著述して名利を求むるのではない。博聞多識を衒ふが爲ては尙更ない。然らば、何の爲に學問したか。そは唯知徳を修めて、國家の爲に有用なる人物となるといふに在つた。自分が此精神で學問せられたばかりでなく、門生にも此精神を鼓吹せられた。士規七則に述べられたる要旨が即ち其であつて其精神は、國家有用の人物となれと云ふのである。諸子は何處までも之に則らねばならぬ。學問修業の標準とするは言ふまでもない、坐作進退にも、此精神を忘れぬことが肝腎である。縱令如何に學問が出来ても、國家社會に裨益がなければ何にもならぬ。此の如きは本校教育の本旨でないばかりでなく、實に松陰先生の遺訓に背くものである。故に諸子は有用の人物となると云ふ目的を以て學問もし、勉強もせねばならぬ。」諸子が他日國家に有用なる人物とならんとするには、學生時代に於ても亦有用なる人物でなければならぬ。

學校に於ては學校に有用なる人物、家庭に在りては家庭に有用なる人物でなければならぬ、今日の學生界を見渡すに、試験の爲に勉強する者が餘程多い様であるが、此は學問の方針を誤つて居ると云はねばなるまい。學問技藝に熱心なるは悪い事ではない。是も必要な事ではあれど、そもそも末である、枝葉である、大本ではない。故に諸子は有用の人物となると云ふ精神を片時も忘れてはならぬ。學校に在りては學校に有用なる者となり、家庭に在りては家庭に有用なる者とならねばならぬのである。我々にて、平生常に諸子に戒告して、家事業の手傳をせよと云ふは是が爲である。松陰先生の行事を尋ねて見よ、先生の精神が明に知得せらるゝてあらう。先生は、幼年にして吉田家を續かれた。吉田家には、資産といつてなかつたので、杉家にかゝつて居られた。學問に熱心であつた處から常に勉強せられた。元日も一年の内であるからと云つて、元日にも學問を廢せられなかつた位であるが、其讀書著述の暇には、勉めて家事を補助せられた。其一斑は、今日尙松陰神社に保存せられてある米搗機を見てもわかる。先生は、心身を國事に傾注し、暇あれば書を讀み文を講じられたが、一方に於ては、或は島に出て草を取り、或は米搗機に上りて米を搗かれた。米を搗き草を取るにも、決して其のみに時間を消費せられなかつた。米搗機の上に棚を吊つて、米を搗きながら書見せられた。松陰門下の傑出者故野村子爵から直に聞いた話にもかういふ事があつた。「先生は、草を取りながら、我輩に古今の事例を引き、人間の大道を講説せられた。其が今より考へると實に有益であつた。」と。希世の大人物たる松陰先生が、國家の事を憂慮して維日も足らざる中にも、此の如く學問を勉め家事を助けられたのは實に我々の好模範であるまいか。

學生が英雄を崇拜するは善き事である。之に由つて人格を高め器量を大にすることも出来る。しかし其方法

は往々にして誤つて居て、學ぶべきを學ばずして、學ぶべからざるを學ぶことがあるのは慨嘆すべきである。松陰先生が四方に週遊して、天下の志士に交際せられたからといつて、今日の學生が矢鱈に方々飛びまはりて衆人に交際するが如きは、甚しき間違と云はねばならぬ。我々の行ふ行事は時代に伴はねばならぬ。松陰先生と時代の異なる今日の學生の學ぶべき所は學問の勉強家事の補助である。其事柄は必ずしも米搗と限つた事はない。今日は、自身にて飯米を搗く内は少いから、必ずしも米搗などやるには及ばないが、草取などは今日も適當であらうと思ふ。然るに今日の學生の内に土いぢりを愧づる者のあるなどは以ての外のことである。

今日の中學卒業生が兎角、鋤鎌を執る農業、前垂を掛ける商業に従事するを愧ぢ、筆を持つてやる仕事なら何でも一段高尚のやうに考へる事は甚遺憾な事である。士農工商何の差異もない。而るを商を愧ぢ農を嫌ふ者の心がわからぬ。中學卒業生の就職者を見るに、家事を繼ぎて農となり商となるよりも、小學校の教師役場の吏員たるを希望する者の多きが如きは了解の出來ぬことである。勿論教師や吏員となることがよくないと云ふのでは決してないが、商工の家業を繼ぐよりも、筆を持つ職業を一層樂て又一層貴いと考へるものがあるらば其は大なる誤である。教師吏員素より國家に缺ぐべからざるものである。然れども算盤はじき前垂掛亦必要なるものである。此の誤れる精神から、在學中より既に家事家業を助くるを厭ふのではあるまいか。そんな事であるならば、他日有爲の人物たることは決して出來ない。米も搗き草も取り帳面もつけ算盤もはじく人にして始めて有用の人たることが出来る。今の少年が他日有用の人とならんとするには、實力を養ふことを忘れてはならぬ。實力を養ふは即ち家庭に在りて家業を助け、學校に在りては校事に服し、以て家庭に

有用學校に有用なる人となるに在り。此方針に適せしめんが爲めに、本校は、諸子をして、學問の傍には家事家業の補助をなさしむるを以て校是として居るのである。

前述の如く家事家業を補助せしむるを以て校是とすといふも、是決して豫習復習をも廢して家事家業の補助をせよと云ふのではない。豫習復習を怠らず、十分に學課に力を傾注して暇ある時、之を空費せずして、家事家業の手傳をなせと云ふのである。此處を誤解してはならぬ。家庭に有用なるものにして、國家にも有用なるものとなることが出来る。昔或書生が書物ばかり讀んで、室内の掃除をばなさずして、塵埃の堆積するに任せたるを見て、人之に掃除を勧めた處が、我志は一室にあらず、天下を掃除せんことを欲すと云つたといふ話がある。此は實に空論である笑ふべき話である。一室の掃除も出來ずして、どうして天下の掃除が出來やうか、書生などにはとかく之に類する空論が多い。他日國家に有益なる人物となるべき程のものは、今日家庭や學校に在りても既に有益なる人でなければならぬ。

將來に有爲なる人物とならんとするには、今日に於て十分實力を養つておく事が必要である。實力を養ふには、家庭や學校に在りて實務に練習すると共に、又學問上の實力を蓄へることを忘れてはならぬ。一片の卒業證書は恃むに足らん。卒業證書で通つた時代は既に過去つた。今日は實力を見て人が之を採用する時代となつた。實力を養成するには時間を要し年月を要する。速成を望むことはいけない。速成を望むは間違である。實力を備へて卒業せねばならぬ。辛じて卒業するよりも、落第しても實力を備へた方が先の爲かよい。Slow and steady. にやるがよい。この道理を十分に了解せねばならぬ。それには今度薨去された桂公は好き模範である。公は維新の際の勳功に對して賞典祿二百五十石を賜られた、それが公の二十二歳の時であつた

然るに公は將來國家に盡さんとするには智見を廣め置かざるべからずと、賞典祿をば賣拂ひ、私費を以て獨逸に留學せられた。其時獨逸に於いて學ばれた事が、後年我陸軍軍制改革の基礎となり、帝國の陸軍をして今日の發達あらしめたのは、公の力が多かつたことであるが、公は此留學の爲に進級は非常に遅れられた。山縣公は之を遺憾に思はれたけれども、公は之を心に留めずして大尉に拜命せられた。此時元の同輩諸氏は既に大中佐であつたさうである。公が軍事上の新智識を得て居ながら大尉に拜命せられたのは所謂 *Slow and steady*、後年遂に位人臣を極むるに至つた。公の生涯は *Slow and steady* の精神を遺憾なく實現したものである。松陰先生と云ひ桂公と云ひ孰れも吾々の好模範である。此好模範を有する吾々は、此諸先輩の精神を繼承する事に努めねばならぬ。諸子は今後學校に有用なる生徒たると同時に家庭に有用なる子弟となり、他日は國家に有用なる人物となるやうに心掛けることが肝要である。淺薄なる學問は社會國家の益に立たぬ。學校に有用なる生徒といふことにつき茲に一言を加へておく。今回本校に運動會を舉行するにつきて、諸子が準備の爲に奔走盡力して居るのは甚だ結構な事であるが、此ばかりではいけない。後片附までよく遣らねば十分とは云はれぬ。其がよく出来る様であつて、始めて學校に有用なる生徒といはれる。諸子は將來に於ても、此精神を以て社會に立たねばならぬ。何事に限らず始めた程の事に後片附の出來ぬ様な事ではいかぬこんな處にもよく松陰先生の精神を味はねばならぬ。本日来賓諸賢の前に於いて、之を諸子に語るを得たるは余の大に光榮とする所である。諸子がよく我意を了して、他日社會國家に有用なる人物とならんことを希望する。

村上會長の陸上大運動會評

柴田省三 筆記
松原海二

抑々運動會は單に教員生徒の慰みと考ふべきものに非ず。なるべく之をして教育上意味あらしむる様つとむべきなり。茲に余は、本年の運動會につきて些か批評を試みんとす。本年の運動會は概して立派に舉行せられたり。然れども諸子は決して之に満足すべからず。益々望蜀の念を高めん事を望む。此心ありてこそ、人は向上するものなれ。本年は連日の暴風雨の爲、開校記念日たる十八日に之を舉行すること能はざりしは甚だ遺憾なりしかども、これ却て吾人が修養の資となすを得べし。即ち人の生涯には、幾度か障礙に打勝たざるべからざることを感得すべきなり。諸子は本年の運動會に依りて、遺憾なく不屈不撓の精神を發揮したり三年級の綠門の風雨の爲に倒れたるにも拘らず、再び見事に作られ、而も意匠の勝れたりしが如き眞に喜ぶ事なり。然れども之を作るには稍多額の費用を要したりと聞く。多くの金錢を費して立派なる物を造るは當然の事なり。今後はなるべく經費を節約して、立派なるものを造る如く心を用ふべし。本年の競技は多く勇壯なるものを選び、徒らに小兒婦女子を喜ばしむるが如き者のなかりしは甚だ喜ぶべき事なりしも、競技者の其競技に對する努力の足らずして、中途にて廢し、或は體力續かずして落伍せし者の有りしは遺憾なりき以後益々體力の養成に勉め、最後まで奮闘する心掛け無かるべからず。かくしてやがては世界の大競技會にも參加する榮あらんことを望む。次に競技者の、よく役員の命に服従して、圓滑に競技を進行し得たるはよけれども、往々運動帽を戴かざる者のありしは遺憾なり、こは必ず著することゝすべし。又優勝者の姓名を

揭示するに當り、其學年を記さざりしは不備なり。今後は之をも書添へたし。運動場に紙屑繩切の散亂せざる様注意すべし。本年の運動會は、幸に早朝より開始するを得たれば、別に不都合は無かりしかど、運動會は紀念式後に舉行するものなれば、明年は殊に番數と時間とを考へて番組を作るべし。或は中隊選手競走は暮色蒼然の裡に行はざれば興味少しなど云ふものありとの事なれど、將來中學生たるべき少年も多數來觀する事なれば、彼等にもこの壯觀を見せたく、且は後始末の都合もある事なれば、必ず日暮前に終る様にしたきものなり。本年の運動會に於いて前例なき美譽を見たり。即ち競技開始前に嚴肅なる儀式を行ひて、五年級生より全般に親切なる訓戒を與へし事なり。今後も必ず之を舉行すべし。要するに本年盛大にして整然たる運動會を舉行する事を得しは、主として下級生がよく上級生に服従せしに依る。此の如く諸子が上級生に從順ならば、諸子が上級生とならん時、下級生は亦諸子に從順なるべし。運動會の批評は先之に止め、次に二三注意すべき事あり。そは別事に非ず、近時茶話會の頻々として催さるゝ事と、本校附近の菓子店に出入する者の往々之ありと聞く事となり。學生は父兄に對する徳義としても節儉を旨とせざるべからざるに、此の如き噂を耳にするは甚だ慨歎に堪へざる所なり。今後は必ず之を慎むべし。又本月より始めて、中隊の團結を圖る爲に、各中隊毎月一回宛中隊教練を行ふべし。之によりて各自の中隊を愛する心を養ふを得ば甚だ満足する所なり。尙前に言漏したればこゝに一言附加すべし。今年の運動會に於ける相摸は形式は整ひたるも、相摸の實力の足らざりしは遺憾なりき。今後は形式は今年位に止めて、大に力量と技術とを養ふことを努めざるべからず。

松陰追慕會に於ける村上會長講演の大要

平山茂 筆記

本日は松陰神社の秋季例祭であるから、例により、先生の追慕會を開き、配布して置いた先生の遺文に就いて、聊か講演をする積りである。

諸友に與ふ (安政六年二月野山獄中より)

平時喋々、臨事必啞、平時炎々、臨事必滅。孟子浩然之氣、助長の害を論ずるを見る可し。八十送行之諸友有拔劍。比又聞、暢夫在江戶有斬犬之事。是等の事にて、諸友氣魄衰萎の由を知る可し。僕今死生の念全く絶えぬ。斷頭場に登り候はば、血氣敢て諸氏の下にあらず。然れども、平時は大抵用事の外一言せず。一言する事は、必温然和氣、婦人好女の如し。其れが氣魄の源なり。慎言謹行卑言低声になくては、大氣魄は出るものに非ず。張良鐵椎及時の面目を想ひ見る可し。僕去月二十五日より、一盞の肉、一滴の酒をも絶す。是れてさへ、氣魄を増すこと大なり。僕已絶諸友、諸友亦絶僕。然れども、平生の友義の爲、區々一言を發す。是れ僕が鑿空の語に非ず。實踐の眞、又聖賢傳心の教なれば、輕視する勿れ。

血氣尤是害事、暴怒亦害事。血氣暴怒を粉飾する、其の害更に甚し。

本日、特に先生の「諸友に與ふ」と云ふ書翰を選んだ理由を一寸説明すると、本校生徒は、縣下の他校に比して淳朴であり、從順である。是は甚だ喜ばしい事であるが、一方より見れば、元氣に於て比較的關けて居は

しないかと思ふ。余は、諸子の元氣がもう少し旺盛ならんことを望むが故に、この文に就いて、元氣とは如何なるものであるかを説明したのである。

元氣元氣と謂つても、空元氣では何の役にも立たぬ。元氣にも眞の元氣と空元氣とがあるから、今から本當の元氣とは如何なるものであるかと云ふことを説明するから、諸子はこれによつて、本當の元氣を養つてもらひたい。

元氣と謂へば、何ぞと云ふとすぐ人の頭でもなくるやうなことも、思ふたら、其こそ大間違ひである。教場に於ても先生に名を呼ばれた時、大きな聲で、隣席の者を驚かす様な返事をして、元氣のある如く心得る人もあるが、あれも本當の元氣では無い。頓狂聲は駄目だ。そうかと云つて、女學生みたくやうに、蚊の鳴くやうな聲で物を言ふも悪い。實際返事の仕方によつて、その人の元氣があるか無いかかわかる。元氣のある人の返事は、必しも唯聲の大きなのでは無くて、腹の底から聲が出るのである。

さてこの文は、松陰先生が死なれた八ヶ月前即ち安政六年の二月に、諸友に與へられたものである。安政六年二月と謂へば、先生が現今の古萩にあつた野山の獄に居られた時であつて、諸友と云ふのは先生の弟子達を指されたのである。謙讓なる先生は、常に門人を待つに友達を以つてせられたが、これによつても、先生の人格をうかゞひ知ることが出来る。

先生は、陰曆十月二十七日即ち太陽曆の本月本日、江戸の小塚原で死刑に就かれた。其八ヶ月前、獄中から態々此文を諸友に與へられたのも、その門下生の中に空元氣の人が居る様だからといふのであつた。

平時はべらべら饒舌つて、元氣に見えても、さて一旦事に出遇ふと、青くなつて、意見も何も出ぬ。これ

が空元氣で、先生もこの事を憂へられた。そこで、此文の始めに、「平時喋々、臨事必啞」と述べられた。又かゝる男は、時には腕力をも振ふが、大事に臨めば、腰が抜けてしまつて、何の役にも立たぬ。これを「平時炎々、臨事必滅」といはれたのである。太平無事の時には、元氣に見えても、事ある時に、啞の如く、火の滅えた様では駄目である。孟子は浩然の氣を養ふと云つて、元氣のことを浩然の氣と名づけられた。そして之を養ふにも法があつて、助け長ずるは、却つて此氣を亡すのであると云はれた。其例として説かれたのがかうである。昔宋の國に、一人の百姓が居つて、稻の成長をもどかしがつて、或日その苗を引張つて見たそして家に歸つて、今日は苗を成長させるために非常に、疲れたと云つた。家族の者が不思議に思つて、田に出て見ると、苗は枯れて居たと。之と同様に、平時大言壯語したり、腕力を振ふたりするのは、普通の者は、元氣のある様に思ふか知らぬが、之は空元氣で、眞の元氣を養ふことが出来ぬのみならず、却つて元氣を害ふことは苗を引くと同じである。之を「孟子浩然之氣、助長の害を論ずるを見るべし」と云はれた。先生の門下にもかゝる人が有つたと見える。

本文に、「八十送行之諸友有拔劍之事」とあるは、佐世八十郎が他所へ行く送別會の時、諸友が、元氣を示すため、席上、劍を抜いて大騒ぎをしたのを戒められたのである。八十郎は前原一賊の元の名である。又「比又聞暢、夫在江戸、有斬犬之事」とある暢夫は高杉晋作の字であるが、高杉が江戸で犬を斬つたといふ事を聞かれて、困つた男だ、元氣を見せる爲に犬を斬つたのかも知らぬが、犬を殺すのは犬殺しのやる事で、武士のすべき事では無い。又元氣を示す法は、他にいくらかもある。こんな事は、却つて元氣の衰へて居ることを示すものであるから、「諸友氣魄衰萎の由を知るべし」と慨嘆せられたのである。

「僕今死生の念全く絶えぬ。斷頭場に登り候はゞ、血色敢て諸子の下にあらず」。これが即ち松陰先生の元氣である。人は命を惜しがるのに、先生は、死生の念は全く失せて、何時でも命をすてるといふ勇氣が出来た先生は三十歳で死なれたが、その年まで、修養に修養を加へて、安政六年十月に刑に就かれたが、此手紙を書かれた二月には、もう全く死生の念が絶えて居たから、「斷頭臺上に登り候はゞ、血色敢て諸子の下にあらず」と公言せられた。先生は、頼山陽の子で、有名な慷慨家であつた頼三樹三郎や、「妻臥病床兒泣餓」と歌つた梅田源二郎等と同時に刑に就かれたが、當時の有様を能く知つて居る人の話によると、果してその自白の如く、先生の死様が最も立派であつたさうである。これ即ち先生平時の學問が耳から入りて口に出る口耳四寸の學問でなかつた證據である。眞の元氣はかうなければならぬ。

「然れども、平時は大抵用事の外一言せず。一言する時は、必温然和氣、婦人好女の如し」。あれほど元氣な先生も、平時は空元氣な男とは反對に、用事の外はあまり物もいはれない。云はるゝ時は恰も婦人の如く靜かた、温然たる和氣を含んで居られた。こゝが先生の偉大な點である。平時婦人好女の如き人が、斷頭臺上にあつて色を變ぜず、人を驚かす大元氣を出すのである。劍を抜いて騒いだり、犬を斬つたりする様では、元氣は養へぬ。日常女の如く、温和な氣象が「それが氣魄の源なり」である。角力を観るのに、下手な奴に限つて、出ると直ぐ組付くが、大關や横綱になると、中々仕切りに念を入れ、しつかり精神を落付けてからでなければ立たない。先づ靜にして然る後大に動くことが出来、先づ黙して然る後大に氣焰を吐くことが出来る。それ故いざといふ場合に大氣魄を出さんとせば、日頃は婦人好女の如くして居らねばならぬ。そこを、先生は「慎言謹行、卑言低聲になくは、大氣魄は出づるものにあらず」と云はれた。漢の高祖の三傑の一

人であつた張良は、容貌は女の様に柔しかつたが、その心は非常な勇氣に満ちて居たのである。張良が未だ高祖に仕へぬ前は、韓の臣であつた所が、韓趙魏等が秦の始皇帝のために亡ぼされたので、始皇帝は、張良に取つては不倶戴天の仇であつた。だから、何時か始皇帝を殺して、恨を晴さうと思つて居た。一見婦人の如き張良が、天下を統一した始皇帝を、一浪人の身を以つて殺さうとした勇氣は、實に感心の外はないのである。かくして、時機を待つうちに、始皇帝が國內を巡幸して、博浪沙といふ所に行つた時、一人の壯士をやとひ、始皇帝の車を目がけて、大きな鐵の槌を揮はせかけた。運悪く槌はそれたが、その元氣は大したものといふはねばならぬ。それを、李白といふ有名な詩人が、「蒼海得蒼士、椎秦博浪沙、報讐雖不成、天地皆震動」と歌つてほめて居るが、「張良鐵椎及時の面目を想ひ見る可し」だ。日常輕舉妄動するものには、かかる大事は出来ないのである。

「僕去月二十五日より、一盞の肉、一滴の酒をも絶す。是れてさへ氣魄を増すこと大なり」。この浩然の氣を養ふに精神の修養が第一である。それに、今時の人は、元氣を養ふには身體が第一だ、身體を作るには滋養が肝要だと云つて、肉や乳や卵やらむやみに用ゐて、まるで病人がする様な事をやつて居る。かゝる輩は、肉食者流と云つて、偉い人の居ないといふことが、昔から通り相場になつて居る。學生たるものは、富者も貧者も、共に一様に質素でなければならぬのである。先生の此の辭の精神をよく味つて見ねばならぬ。肉や酒やビールでは元氣は出ない。精神がしつかりしてさへ居れば、元氣はいつでも出る。

「僕已絶諸友、諸友亦絶僕」、この言葉は、當時を説明しなければならぬ。當時、先生が、幕府の命令で、京都に上つて來た間部下總守を打取ると云ふ意見を以つて居られたが、門下生の中にも、それはあまりに過激だと云

ふものがあつた、先生と門下生との間に、意見を一致せぬ所があつたので、先生は、お前等とは事を共にすることは出来ぬからと云つて、交りを絶たれた。此二句は、其事實を指されたのである。されば、今更手紙を出すには及ばぬことではあるが、是迄の友義もあれば、黙止するは人情でないといふので、次に、然れども、平生の友義の爲、區々一言を發す。是れ僕が空の語に非ず、實踐の眞、又聖賢傳心の教なれば、輕視する勿れ」との一言を添へられた。是の意味は、僕の言ふ所は決して先ばかりの空理では無い。自分が實踐して悟つた眞理であり、又聖賢が、心を以つて心に傳へられた教であるから、輕視してはならないと説かれたのである。先生は何處までも至誠を以つて貫く人である。従つて、何處までも親切である。既に絶交するまで言つて見たが、矢張り、門生等を捨てる氣になれない。そこで、親切丁寧に、肺腑を披瀝して訓戒せられたけれども、未だ物足りなく感ぜられて、更に「血氣尤是害事、暴怒亦害事。血氣暴怒を粉飾する、其の害更に甚し」と云つて、血氣暴怒を飾つて非を遂げるのは、更にその害が甚しいと、重ねて訓戒の意を述べられたのである。

以上の解釋で、松陰先生の元氣も分るであらう。本校生徒も、空元氣でなく、先生の如く、腹から元氣を出さねばならぬ。その元氣は、修養によつて得られるので、いたづらに大言壯語しないで、却つて温順にして落附いて、勇氣を養ふことを忘れてはならぬ。本日晝食後、松陰神社に參詣して、先生の靈を拜し、先生の如き眞の勇氣のある人となることを努めたいものである。

校 報

元朝廢賀

一月一日の拜賀式は、諒闇中なるを以て廢せられたり。

始業式

一月八日、午前八時三十分より、例に依りて始業式を行はれ、校長の訓話あり、終りて直に授業に移る。

澄田教師の紹介式

一月二十日、零時五十分、文學士澄田福松先生の紹介式ありたり。先生は、中村教諭の後を承けて、本學期間英語の教授を擔任せらるべく就任せられたるなり。

共通入學試験規程

二月七日、馬淵本縣知事は、訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試験施行規程を定めらる。試験

は縣立各中學校に於て施行し、學校長之を監督す。三月十五日までに、學校長は、入學試験問題案を知事に進達し、知事之を選定し學校長に交付す。學校長の知事に進達すべき問題案は、國語講讀六題、作文二題、算術六題とす。而して右成績評點は、一科目百點を以て滿點とし、國語科は、之を講讀六十點作文四十點に分つ。學校長の選定したる試験答書調査委員は、三月三十一日午前九時までに、入學志願者名簿を携帶し縣廳に出頭し、答書調査に従事すべし。入學區域は、入學志願者現住所の關係に依り、左の如く定めらる。

入學せしむべき學校	入學志願者の現住所
山口中學校	吉敷郡、佐波郡、厚狹郡他府縣
萩中學校	阿武郡、美禰郡、大津郡他府縣
豐浦中學校	豐浦郡、下關市、他府縣
岩國中學校	玖珂郡、大島郡、他府縣
徳山中學校	都濃郡、熊毛郡、他府縣

馬淵知事來校

二月二十八日、午前九時、馬淵本縣知事來校、各級授業の實況、校内の各部を巡視し、十一時三十分より、全員を講堂に會し、一場の訓話をなし、其より直ちに實科女學校に赴かれたり。當日訓話の要旨は收めて講壇欄に在り。

卒業證書授與式

三月二十七日、午前九時より、第十三回卒業證書授與式を舉行せらる。校長卒業證書並に賞品賞狀を授與せられ、例に依りて學事報告告辭朗讀等あり、眞中本縣事務官、知事代理として告辭を朗讀せられ、次に來賓總代萩町長内田一心氏の祝辭演説、生徒總代下瀬一郎君の祝辭朗讀あり、卒業生總代として椿武忠君答辭を朗讀し、式後引續きて賞品授與式をばれたり。此日來賓の主なる者は眞中本縣知事代理田中春風、野北陸軍中佐、玉置神代の兩陸軍少佐、遠藤萩警察署長、米原實科高等女學校長、山村檢事、中村正路、鈴木美德、花村防長新聞通信員外十數氏

なりき。卒業諸君の姓名は卒業生一覽中に載せあれば此に擧げず。校長知事の告辭、受賞者姓名並に賞品左の如し。

校長訓辭

卒業生諸君、諸君は今や業を我中學校に卒へ、國家は諸君に認可するに諸君の特權を以てし、社會は諸君に期待するに將來の貢獻を以てす、諸君の得意想ふべき也。當諸君の得たるのみならず、諸君の父母も之を喜び、兄弟姉妹も之を悦び、諸君の教養に従事したる本職等も亦無限の喜悅を感じずんばならず。然れども諸君は果して能く國家の認可に酬い、社會の期待に副ふことを得るの自信ありや否や。諸君は高等普通教育を受け、五年の修業を積みたりと雖ども諸君の智識や未だ熟したりと謂ふべからず、諸君の品性や未だ完しと謂ふべからず。諸君は將に未熟の智識と未完の品性とを以て、競争更に劇烈に、而かも誘惑更に繁多なる社會に入らんとす。本職は諸君の前途に望を屬すること多きが故に、又諸君の爲めに不安の念に堪へざるものある也。方今東西兩洋の交通日に容易に月に繁劇にして、歐米の學問技術の發達の間に我邦に輸入せらるるは、文化の爲に甚だ喜ぶべしと雖ども、是と共に不健全なる思潮の世上に氾濫するは洵に痛嘆長大息に堪へざるなり。或は自然主義と曰ひ、或は社會主義と呼び、徒らに刹那の満足を求めて、理想の追求すべきを知らず、功利の末に趨りて道義の大本を忘却し、世を擧げず浮華を好み、輕佻に流れ、忠實の風俗の俗、地を拂つて亦觀るべからざらんとす。諸君にして益智

識を磨き品性を修め、半手として抜くべからざる眞骨頭を養成するにあらざれば、則ち此危險なる風潮の渦中に没せざらんと欲するも亦難矣哉。而して人格を修養する道は先づ理想を確立するに在り。諸君の理想にして造次飄沛にして猶能く諸君の眼前に覺悟たらば、希望の光益明に自信の力愈強くして、誘惑多き競争場裡に能く特立獨行することを得べし。今や諸君は將に此校を去らんとす。諸君を送りて、尙特に二事の諸君に告ぐべきものあり。語に云く、少時血未定戒之在色。及其壯也血氣方剛戒之在闘。諸君の血氣に將に漸く旺盛ならんとす。諸君にして能く皓齒蛾眉は性を便るの弊なることを知らば、婦女子の爲に其志を喪ふが如きことなからん。諸君にして能く夫の尺蠖を學び、一時に屈して將來に發展する工夫を著せば、一朝の念に其身を忘るゝが如きことなからん。行矣諸君、須く自重自奮して以て前途に勇往邁進すべし。志有る者は畢竟に成る。古人の言決して諸君を欺かざる也。諸君の卒業に際し、尋常一様の告辭を爲さずして、聊か規戒の言を以てするは是亦本職の老婆心のみ。諸君其言の文らざるを待めずして其微意の在る所を諒とせば甚幸也。

知事告辭
卒業生諸君、諸君が多年營書の故空しからず、茲に卒業證書を受くるを得たるは諸君並に父祖の光榮にして、本官も亦喜ぶところなり。

抑中學校は我國男子に須要なる高等普通教育を爲す所たり。故に諸君は、郷に歸りて家業を勵むと或は進みて専門の學術を修むるとを問はず、皆等しく國家の中堅となり國運の發展を期すべき重

大の任務を有するものなり。然れども今や只其基礎を得たるのみにして、前途甚遠なりと謂はざるべからず。宜しく既修の教訓を服膺し、忠孝の大義に基き、益々其志操を堅實にし、其品性を修養し、其業務に精勵し、以て各其目的とする所を遂行し、上は聖恩に酬い奉り、下は家名を發揚せんことを期すべし。以て告辭とす。

受賞者並に賞品

- 銀時計一個 卒業生 河崎松之助
- 右本職賞與規程第一條第一項に依り縣知事より授與せられたるなり。
- 英和雙解熟語辭典一部 卒業生 梅 武 忠
- 入學以來克く校則を守り學業に精勵して一日も懈怠せず且つ伍長と爲りては其任務を全らし卒業の際成績特に優秀なるに因り前記の物品を賞與す。
- チェンバース英語辭典一部 卒業生 堀 信 一
- 入學以來五ヶ年間一日も懈怠せず其精勵實に衆生の模範とするに足る因りて頭書の物品を賞與す。
- チェンバース英語辭典一部 四學年 下 瀬 一 郎
- 本學年間精勵し學力俊秀にしてよく校則を守り且つ伍長となりてよく其任務を盡したるにより前記の物品を賞與す。
- 半紙貳束 卒業生 上 岡 謙 照 雄
- 四學年 光 本 照 夫 同 長 谷 川 濟
- 同 小 川 義 雄 同 三 學 年 齋 藤 八 郎
- 同 西 林 鴻 介 同 村 岡 淺 一

同	高木 彦三	篠原 隆三	田中 政太
二組	池田 實三	竹内 浩作	吉村 潤一
同	中村 博	國近 圭三	金子 武
三組	瀧口 純	金子 重恵	若松 小一
同	花田 好定	吉田 博	兒玉 三郎

木田教諭の紹介式

四月十二日放課後、木田教諭の紹介式行はれたり。教諭は藤井教師の後を承けて、數學の教授を擔任せらる筈なり。

入學式

四年十三日、新入學生の入學式舉行せらる。附添父兄に博物地理歴史の標本、理化の實驗を示し、定刻に及びて、一同を講堂に會し、例に依りて、「父兄保證人に望み、生徒必携」の二小冊を配付し、勸語捧讀、校長の談話等あり、組長舎監より必要なる心得方に就き詳細なる説明注意をなせり。

毛利男の來校

四月三十日、午前九時三十分、毛利男爵來校、各教室を巡覽し、十二時より、校長以下職員一同を講堂に會し、左の意味の談話をなされたり。

ことも亦其特に力を用ふる事の一つであります。故に見る物、聞く事、何に限らず精細な注意を拂つて觀察する様に仕込んで居ます。又低能者には時間外に特別の教授をなします。以上の諸點は英國教師の特に力を入れる所であります。我教育家も十分考慮すべき所であらうと思ひます。

山口中學校修學旅行團の來校

五月六日、山口中學校第四學年諸君一百六名は教師五名に引率せられ、夕方來着、當夜大阪屋に一宿、翌七日午前、松陰神社に參拜し、十二時過本校に來り、寄宿舎談話室にて晝飯を喫し、二時より指月山に登臨せり。本校は茶を供し、夏蜜柑二百四十個を寄贈したり。

白井大尉講話

五月二十七日、吳鎮守府より、大尉白井忠雄氏を派遣し講話せしめたり。(要旨は講壇)

土江教諭の紹介式

六月三日、土江教諭の紹介式あり。教諭は地理歴史の教授を擔任すべく、順天中學より轉任せられたり。

松本江頭兩教諭の告別式

七月十九日、第一學期試驗終るや、直に一同を講堂に會し、校長より休業中の心得方を申渡され、了り

私は防長教育會に關係して居る所から、本縣の教育事業には淺からざる縁故を有するものであります。今日でも、常に出来る限りの注意を拂つて居ますのみならず、本縣の教育事業に裨益すること、出来る限り微力を致す考であります。今回防長教育會の用務を帯びて來校しましたので、一寸此校をも參觀しました譯であります。村上校長から何か諸君に御話する様にとの依頼でありましたが、何の用意もありませんので、御參考になる様な御話は出来ませんが、折角のこととありますから、私が嘗て滯英中に見聞しました昔話の一二を御話いたします。

學校で生徒の徳性を涵養することに務めるのは、何處でも同様であります。英國では特に人格の養成といふことに重きを置いて居まして、教師は授業の際にも、授業時間の外にも、常に生徒の人格を高めると云ふことに注意して居る様であります。此點は我教育家の大に學ぶべき事であらうと思ひます。英國の教師は教室外に在りては生徒の朋友であります。生徒と親密に接近し、生徒の個性を知ること、各人の短處癖處を矯補し、長處優處を助長するに務めます。命令に服従することは、子弟に取りては大切な徳行であると云ふ所から、特に務めて此習慣を養成することをやつて居ます。猜忌心を抱くと云ふ様なことも其深く戒める所であります。次には虚言することを戒めます。虚言も悪意なく人に害を及ぼさぬこと事ならば、さまで深くも尤めませんが、故意に謀りて人を欺くが如きは最深く嫌ふ所あります。又敢て忍耐の氣力を養成し、少年の時よりして、事に當りて必ず成すと云ふ精神を持たしむることに務めて居ます。觀察の力を養ふといふ

て松本江頭兩教諭の告別式を行はれたり。松本教諭は病氣治療の爲東京に歸住せられ、江頭教諭は福岡縣立中學校修館に轉任せらるゝが爲なり。

明治天皇遙拜式

七月三十日、七時半より、明治天皇御一周年祭遙拜式を講堂に行はる。指月神社神職田村繁治氏齋主として遙拜の詞を奏し、校長以下順次玉串を進めて敬拜し、式終りて、校長の訓話あり、九時一同退散す。

第二學期始業式、紹介式

九月一日、七時三十分より、例に依り、第二學期始業式を行はる。校長の訓話あり、大要次の如くなり。

此第二學期に入りて、再び諸子と此に相會するを歡ぶ。諸子は新涼入郊墟、燈火可稱觀、此勉學の好季節に於て大に奮勵せざるべからず。諸子受業の心得は、柔細道の道場に於て教師に對すると同様の心得を以て、ドシ／＼先生にブツツカラざるべからず。余が茲にブツツカルと云ふは、決して先生に反抗するの意にあらず。要領を得たる質問を盛に發して、新智識を得るに努めよと云ふなり。肯綮に當れる質問は豫習の至れるにあらざれば決して發することを得べからず。されば諸子は十分力を豫習に用ゐざるべからず。肯綮に當れる質問は、自己の利益を受くるのみならず、他にも益を及すこと少からざるべし。此意味に於て、諸子がドシ／＼有益なる

賞問を試みんことを希望す。又品行の點に於て、諸子は十分注意して益々名譽を得んことを希望す。世間には余が諸子に對して厳打制裁を許可せるが如く云傳ふるものもある由なれど、そは大に迷惑に感ずる所なり。余は決してかゝる事を許さず。若し學友間に不都合の行爲をなすものありたる時は、平生懇親なるものゝ一兩名にて切々懇々忠告するは火に善し。多數殊に全組全級の人員が會合して強迫し毆打するが如きは酷じて之を許さず。之が爲に前學期に於て、已むを得ず一二の處分を行はるるに至りたるは余の大に悲む所なり。諸子の十分に此意を了得して誤解なからんことを望む云々と云ふに在りたり。

右終りて、澁田福松窪田隆三兩先生の紹介式ありたり。澁田先生は、本學期間松本敬雄の役を承けて、就職せられ、窪田先生は江頭教諭の後任として就任せられたるなり。

久原氏奨學金給與

河崎松之助

第五高等學校第二部生徒

白石 英男

東京高等工業學校電氣工學科生徒

右兩君は、九月二十七日に於て、久原氏奨學金を給與せらるゝ事に決定せり。東京高等商業學校生徒徳永(舊姓)英介君は給費生に選拔せられたりしも辭退せられたり。

上山氏來校

十月三日、防長教育會主事上山滿之進氏來校、各教

室授業の狀況を巡覽し、午後、一同を講堂に會し、左の主意の演説をなされたり。

抑、現今の學校狀況を十年前に比較するに、教師の供給、學校の設備、其他總ての點に於て著しく豊富發達せるにも拘らず、其卒業生は實力に於いて、十年以前の卒業生に比較して進歩の見るべきもの無きは何故なるか。現今の學生は完備せる學校良好なる教師に就きて學ぶことを得るが故に、僅なる勞力を以て多大の効果を收むるを得。是を以て安逸に狎れ、自覺自奮の念に乏しく實力無し。而して吾人の目的とする所は單に卒業證書を得るにあらざして國家の使命を果すに足る人物となるにあり。國家てふ觀念は吾人の靈氣にして、此靈氣を先にし己を後にしてこそ眞の幸福は得らるゝなれ。現代の青年間に流行する成功なる語は青年の意氣消沈せる證據にして、苟も國家を憂ふる者の口にすべきにあらず實に慨歎すべきなり。學生たる者は徒に成功を目的とせず、國家を愛する念より、實力を養生すべし。彼の教科書に教師の講義を書入れ、復習の勞を省かんとするが如きは己の目的を忘れたるものにして、實力を養ふ所以にあらざるなり。萩は、地勢上、歴史上、教育地なれば、此の地に學ぶ者は、小成に安することなく、奮勵努力して、徳體智の三育を完交し、圓満なる人たらんことを期せざるべからざるなり。

古谷少將來校

十月六日、古谷少將來校、放課後一同特に陸海軍志望者に對して訓話せられたり要旨は講壇欄に收む

校長訓話

十月七日、放課後、校長より一場の訓話ありたり。其主旨は、元氣を持すべきこと、よく質問して教師に閑暇なからしむべきこと等にして、本學期始業の際に於けると相近きものなりき。

記念式

十月十八日、午前九時より、例に依り開校記念式を舉行す。校長の訓辭、野北中佐の祝辭等あり、終りて生徒の書畫並に地理歴史に關する作品陳列場に來賓を案内して觀覽に供したり。當日の來賓は野北中佐玉置秋山神代原の各少佐室田海軍少佐遠藤萩警察署長米原女學校長外十數氏なりき。式後大運動會書畫歴史地理作品の展覽會を開き公衆に縱覽せしむる筈なりしも、雨天なるを以て二十日に延ばされたり。

藤井技手の講演

十月二十五日、放課後、郡農技手藤井氏の肥料成分及び施肥方法に關する講演ありたり。

本保教諭の告別式

十月二十七日、晝食前、本保教諭の告別式行はる。教諭は石川縣第二中學校に轉任せらるゝ事となりた

るが爲なり。

天長節祝日拜賀式

十月三十一日、午前八時三十分より、天長節祝日拜賀式を行はる。

久原氏奨學金給與規程の追加

十一月四日、現行規程第五條の次に左の一條を加へ、第六條以下を順次繰下くることゝなれり。

第六條

初めて給費生と爲りたる者には七拾圓の支度料と汽車賃一哩貳錢車馬賃一里貳拾錢の割合を以て旅費を支給す
高等學校を卒業して更に帝國大學に入學したる者には再び前項の支度料及旅費を支給す

松陰追慕會

十一月二十一日、午前十時より例に依り松陰先生追慕會を開かれ、村上校長の講演あり、零時三十分より松陰神社に參拜せり講演要旨は載せ講壇欄に在り

足立教諭紹介式

十二月八日、始業前足立教諭の紹介式を行はる。教諭は本保教諭の後任として縣農學校より轉任せられ

たるなり。

澄田西川兩先生の告別紹介式

十二月二十四日、午前十時四十分より澄田教師の告別式西川教諭の紹介式ありたり。澄田教師告別の辭は大要次の如くなりき。

余は今回にて四回此境上に立てり。諸子との關係は可なり深しと謂ふを得べし。今諸子と別れんとするに臨み、簡短に所感を述べて諸子の参考となさんとす。人間は食せざるべからず。食するに働かざるべからず、何かの職業を執らざるべからず。かくて上下職業に熱中する所より、今や其弊害の社界の上下を通じて大に現れ來れるを見る。食ふ事は生命の初なり、然れども生命の終に非ず。職業教育素より必要なりと雖も、之に由りて教育せられたる國民は漸く精神的方面を忘れて諸種の弊害を見るに至れり。

諸子試に今日の状態を見よ。實業に偏せる弊は社界の各方面に見來れるに非ずや。されば近來教育に宗教を加味すべしなどいへる説も盛に稱道せらるゝに至れり。初より精神教育に注意したらんには、今更に宗教を云ふするの必要もなかりしならん。此の如くにして教育せられたる國民は、立身出世しても修養なく理想もなく、私人としては家庭を亂り、公人としては世間に迷惑をかく。現に上流の地位に居て縷縷の辱を受けるが如きもの頗々として之あるにあらずや。是餘りに實利に馳せ、目前の利を逐ひたる結果に外ならず。實用教育の弊此に至りて極れりと云ふべし。彼等は己の位地に對して安心なく、無仰なり。人世觀を問はば食ふ爲

に職業に就くと答へんのみ。諸子請ふ思へ、人世の歸趣は何處に在る、文明の眞意義は如何。個人の奉公的努力の如きは世人は殆ど之を忘れたるが如し。社界の風潮既に此の如く我々青年社會にまで浸染し來りて、中學校の生徒が目前の利益を逐ひ、成るべく抵抗なき道を行き、人の目を偷んでも甘く科程を終へんとの剛劣なる精神を以て遂に試験に不正を働くに至る。此の如き青年に充つる社會の前途は果して如何。諸子請ふ思へ、食ふは生命の初にして終に非ざることを。一片の婆心、別に臨みて聊か所感を述べて諸子の一考を煩す。情迫りて語を成さず、諸子幸に微意の在る所を斟酌せよ。終に臨みて我中學校の萬歳を祝し、諸子の健在を祈る。

右終りて、下瀬一郎謝恩の辭を述べ、西川教諭代りて壇上に立ち新任の挨拶あり且曰く、

余は此の光輝ある歴史を有する萩の地に來りて、本校に就職するを得たるを光榮とす。不肖と雖も全力を傾注して諸子が學校に於ける父兄とならん覺悟なり。長き前途を有する諸子自ら勉めずんば之より大なる不幸なからん。相互に力を協せ、各自の本務を全くせん。是余が新任希望の第一なり。尙過去の歴史を考ふるに、萩は明治維新の策源地とも云ふべし。此の立派なる歴史を有する本校の學生諸子は維新當時の青年の元氣と抱負とに鑑みて奮勵努力せざるべからず。今日は時世は變りたれども、或點に於ては同様なり。この進歩と云ふべきか、激變と云ふべきか、變化極りなき世に處するには如何にせば可なるべきか、深く考慮せざるべからず。

らず。維新當時の萩の青年が維新の原動力となりたるが如く、大正の萩の青年は日本の前途を處理する原動力とならざるべからず。之を新任希望の第二とす。而して、唯今澄田先生の述べられたる精神上の教養は余の最も切望する所なり。

右終りて第二學期の終業式に移り、校長は一同に對して次の如き警告を與へて式を終へられたり。

今や第二學期を終へて、本年も將に暮れんとするに及びたり。諸子の中には好成绩のものも有り、不成績のものもあるべし。良きものは更により良くすべく、良からざりしものも年と共に面目を一新すべし。希望の有る所に元氣あり。新なる希望を有して元氣ある生徒となれ。既往は深く悔ゆるもかひなし。精神を沮喪すべからず。割れたる茶碗は組合はせて見るとも元には復せず。來年度より奮勵一番人を驚かす程の勉勵をなせ。唯學科のみならず、品行に於ても面目を革新せよ。我は教師に脱まる。此學校にては到底良好なる成績は收むべからず。など思ふものあらば極めて僻事なり。教師には決して期待を持越して生徒を見るが如き事ある筈なし。若しかゝる考あらばそれは邪推なり。邪推して自暴自棄するは甚不可能なり。善き事惡しき事共に既往は既往として深く心に留めず、氣を新にして清福なる新年を迎ふべし。行に不善なく、自ら反して救しき所なく、心廣く體胖なるは清福なる新年にして、身に疾患なく、家災禍なきは幸福なる新年なり。清福なる新年を迎ふる方法如何。諸子は是より家庭の人となり、家事家業の手傳をなせ。此に幸福なる新年を迎ふることを得べし。小人閑居して

不善をなす。爲す事なきは人の大患なり。家事に勤めば心中自ら無限の愉快あらん。此冬期休業中殊に年末年頭は、諸子が家庭に在りて家事を手傳ふ機會甚多し。諸子が此機會を閉鎖することなからんことを望む。色々述べたき事あれども、それは來年に譲りて、偏に諸子が幸福なる新年を迎へんことを祈る。

一坪農園

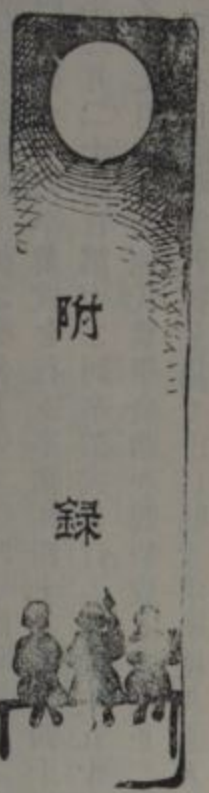
昨年より着手せられたる一坪農園は、漸次趣味を了解すると共に發展進歩し來りたるが、今は既に開拓すべき餘地なく、希望者にして班地を受くること能はざるもの少からず。其收穫の額亦鮮少にあらざれども、通學生の分は詳細に計算し難ければ、寄宿舎にて調査せられたる舎生の收穫高を左に掲げ以て一般を推すの料に資すべし。

種別	數量	價額
白菜	一一〇、三〇〇	四、九四、六
大根	二二、五〇〇	二、七七、三
大芥子菜	五四、六三〇	二、七七、四
水菜	一〇、〇六〇	〇、四八、九
春菜	一、六五〇	〇、〇八、三
高菘		〇、一七、五

菀豆	馬鈴薯	春菊	胡瓜	茄子	蕪菁	山東菜	ソケギ	玉葱	葱	菠薐草
						一二、二〇〇	九、四〇〇		三、〇九〇	一、三〇〇
	一、四〇〇					〇、五三、八	〇、六九、〇	〇、二八、〇	〇、五四、五	〇、一七、八
						〇、〇二、〇	〇、一七、八			
						一四、七六、五				

附言

以上は寄宿生八十名圃場八十坪に對する收穫にして、しかも或は親戚朋友に贈與し、或は暇日に自宅に持ち歸りたる殘餘を寄宿舎炊事部に賣却せるなり。其の價格も亦一般市價に比すれば頗る低廉なりしは論なし。



山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に濫觴す
 ○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所管に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる○同年八月重見氏轉任し線貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○廿一年一月職制の改正あり線貫氏校長に任ぜらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一

日線貫氏萩分校主事を命ぜらる○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事心得となる○同年四月渡邊盛作氏主事に任ぜらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職制並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九拾三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盛作氏校長心得を命ぜらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷善太郎氏校長に任ぜらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名。是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病沒せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる○同年十二月七日塚本氏校長に任ぜらる○三十八年三月二十七日第

五回卒業式を行ふ卒業生四十三名。是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる。同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる。○九月長崎縣立島原中學校長羽石重雄氏校長に任ぜらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名。○四十年三月二十三日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名。○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名。○十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ。○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩岡中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任ぜらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を願つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名。○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名。○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○七月一日久原氏奨學金給與規程成る。○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學

試驗施行規程を定めらる。○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生五十九名。○十一月四日久原氏奨學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることとなれり。

國體といふは、神州は神州の體あり。異國は異國の體あり。異國の書を讀めば、兎角異國の事のみ善しと思ひ、我國をば却て賤みて異國を羨む様に成行くこと、學者の通患にて是れ神州の體は、異國の體と異なる譯を知らぬ故也。

松 陰

職員表 (大正二年十二月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身、英語、歴史	校長	大正二年四月十日	村上俊江	山口縣
代數、幾何	教諭	大正二年四月十日	西川五郎	神奈川縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	藤原甚吉	山口縣
國語、幾何、三角	教諭	大正二年四月十日	藤野多介	同
國語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	安藤紀一	同
算術、幾何	教諭	大正二年四月十日	山田兵吉	愛知縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	藤井百輔	山口縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	木田藤吉	三重縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	山元章次	滋賀縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	田中市郎	山口縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	廣田近三	大阪府
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	土江知太郎	島根縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	窪田隆藏	大分縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	田代百合之助	山口縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	栗屋周祐	同
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	長束有鄰	香川縣
英語、漢文、習字	教諭	大正二年四月十日	金子乙助	山口縣

學級數及生徒數表 (大正二年十二月末現在)

種別	學級數	生徒數	種別	學級數	生徒數
普通科	1	62	體育	1	62
補習科	2	87	音樂	1	87
學年第五	2	88	美術	1	88
學年第四	2	101	英語	1	101
學年第三	2	111	英語	1	111
學年第二	3	124	英語	1	124
學年第一	3	151	英語	1	151
合計	11	515	合計	11	515

武學貸費生表 (大正二年十二月末現在)

年學五	年學四	年學三	年學二	年學一	合計
伊藤實三					1
	加藤萬壽夫				1
	片岡勝資				1
					2

卒業生一覽

第一回(明治三十四年三月)

會計検査院
廣島縣高等師範學校助教諭
大阪高等商業學校卒業商業
二從事ス
大津郡日置村酒造業
死亡
大津郡川尻在宅
福岡縣立嘉穂中學校教諭
下關養治小學校訓導
死亡
工科大學卒業
東京商船學校卒業商船乘組
死亡
枝光製鐵所在勤
海軍大尉海軍大學校在學
高知大林區署山林屬
豫備海軍少尉冒險世界主筆
早稻田實業學校卒業
東京三越吳服店員
陸軍步兵大尉
商業在上海
死亡
未詳

厚東太郎
山本政人
岡村喜與
堀精一
河野厚造
天野正六
山田藤介
宮川鐵藏
三浦徳一
都野正一
横田直藏
梨羽次郎
香原祐江
三戸基介
坂上五一
阿武信一
田中三造
平田由之
中村章一
原山良四郎
平田千秋

阿武郡生雲村開業醫
海軍大尉
死亡
在米國桑港實業ニ從事ス
農科大學卒業新潟縣林業技手
陸軍步兵大尉在郷路
東洋協會專門學校
卒業在朝鮮
死亡
陸軍工兵大尉在小倉
東京商船學校卒業商船乘組
陸軍工兵少尉(日露戰役旅順
ニ戦死)
東下谷電話交換局在勤
モト山田
東京下谷電話交換局在勤
死亡
陸軍步兵中尉
陸軍砲兵中尉在下關
以上三十七名
第二回(明治三十五年三月)

柏村登
山本吉徳
藤井達吉
兒玉良三
宮原朝吉
岡本精一
中村敏輔
齋藤良輔
木川貞輔
勝野清
光藤健介
石田藤八
伊藤治郎
山本豊
井上四郎
藤井清
阿武清
石津街楯

長崎醫學專門學校卒業
法科大學卒業陸軍理事
海軍大尉
陸軍步兵中尉(二一)
德島電信電話建築官
駐在所
死亡
未詳
農科大學卒業在清國
死亡
哲學館大學卒業
萩泉福寺住職
陸軍砲兵中尉
士官學校九隊長
未詳
三田尻專賣支局平生出張所
在勤
朝鮮仁川小學校
山口縣立萩中學校教諭
石油會社員
法科大學卒業在郷
陸軍步兵中尉(歩一八)
在東京
清國陸軍大佐
神戸石炭商會員
陸軍步兵中尉

野村正一
湯原綱
山本松四
前田正敏
土屋小七郎
小澤泰二
林章貫
栗屋春太郎
佐伯益豊
森信丸
中村喜代藏
安江棟生
品川鴻介
河野安宅
栗屋周祐
山根省吾
菊屋孫輔
山根孝一
柿並誠一
上原多一
三宅彌太彦
阿川義介

第三回(明治三十六年三月)

愛媛縣立西條中學校教諭
愛媛縣立西條中學校教師
豫備陸軍騎兵少尉
海軍大尉
在郷
死亡
東京帝大農科卒業陸軍二等獸醫
菘中學校教諭豫備陸軍歩兵少尉
日立鐵山
陸軍歩兵中尉
早稻田大學卒業小坂鐵山
陸軍一等軍醫(山口四十二聯隊)
門司稅關官吏
臺灣協會學校卒業臺灣製糖會社
國學院大學卒業下關高女教諭
死亡
第三回(明治三十六年三月)
(以上四十二名)
奈良女子高等師範學校教授
京都帝國大學卒業
モト藤井
兼常清佐
死亡
海軍大尉
東京帝國大學院
陸軍砲兵中尉
(續前五大廣島)

河野通毅
佐藤虎介
和田專三
阿座上長一
木村彌三
渡邊五六
山本百合熊
江川暢
青水英一
波根良一
茶川一
増野榮三
岸野市助
原川國介
山本慈雲

死亡
東京美術學校師範科卒業
死亡
下關(組事務員
海軍大主計
死亡
農科大學林學實科卒業
石川縣立第一中學校教諭
根室商業學校教諭
陸軍中尉(歩四一)
東京高商卒業大阪スタンダー
ドオイル會社員
長崎郵便局在勤
海軍書記
東京高商卒業臺灣製糖會社
明治大學卒業
神戸稅關在勤
兵庫縣技手
門司三井物産會社員
大吹崎燈臺守
東京高商卒業臺灣銀行
在郷運送業
海軍大尉
海軍機關大尉
在下關實業

吉田光胤
羽根義三
寺田林市
阿部昌介
曾根昌一
藤井勉
宇野英一
林壽香
片山市太郎
白上貫之助
赤川省吾
飯尾強介
島尾平七
大多和作太
島田八重丸
三浦國藏
渡邊儀賢
弘毅太郎
紀藤庄介
義妻規一
山田正一
田村能介
田坂信一
栗屋勝

在東京、實業
兵庫縣屬
東京慈惠醫學校卒業
在下關、商業
死亡
早稻田大學商科學卒業
大阪帝國通運會社
在郷
在京城、商業
在神戸
モト見玉
未詳
慶應義塾大學卒業
東京高工染織科卒業
農科大學實科卒業
大阪商船會社三ヶ濱支店員
大阪高等醫學校卒業
通信省在勤
朝鮮釜山稅關在勤
陸軍歩兵中尉(歩四二)
內務省福井縣土木出張所
事務員
在郷製油製糖兼米商
モト永富

坂本治郎
松本淳
口羽雅介
高木孫治
大玉完
中島常介
末岡周介
松本民介
稻田茂太
今井省三
中野清
杉道助
篠原五郎
厚東健二郎
波多野晋平
田中唯一
内田贊
八谷俊一
上田米太郎
片山熊雄
友永儀三郎

第四回(明治三十七年三月)

東北農科大學卒業モト厚東
陸軍砲兵中尉(野砲七)
海軍大尉海軍大學校
神戸高商卒業在新加坡臺灣銀行
工科大學卒業三菱會社員
京都帝國大學理工科大學卒業
三池炭坑在勤
朝鮮總督府在勤
未詳

陸軍步兵中尉(二一)
神戸燐寸會社
休職陸軍三等主計
三池炭坑事務員
陸軍步兵中尉(步四二)
陸軍步兵中尉(步四二)
海軍中尉
慶應義塾商工學校卒業
東京帝大法科卒業
京都帝大文科卒業
死亡

東京高等工業學校機械科卒業
收稅屬
死亡
陸軍經理學校卒業
死亡

津田 武雄 豫備陸軍砲兵少尉
香積 見弼 未詳
佐田 健一 朝鮮郡山郡吏
佐々木 義彦 死亡
兒玉 馨四郎 東京高等商業學校卒業モト植木橋
林 俊 香 海軍中尉
白根 正 補 應務局在勤
中村 良 弼 東京帝國大學法科大學卒業
寺西 啓太郎 在滿洲
山下 盛太郎 早稻田大學
宮原 藤 吾 遼陽石光洋行行員
木津 谷 泰 夫 東京商船學校卒業
松尾 英 一 大阪商船會社役員
乃美 忠 次 右朝鮮
陸軍少尉
杉山 俊 亮 東京外國語學校獨語專修科卒業
安間 定 次 在京
福田 信 彦 在郷酒造業
久保 田 庄 作 陸軍曹長(步四二)
三浦 九 一 陸軍中尉(步四二)
村田 發 太 山口高商卒業
兒玉 武 男 三見高等小學校教員モト小池
吉見 市 郎 京釜鐵道在勤
藤井 晴 一 慶應義塾大學卒業
新田 順 一 東京外國語學校獨語科卒業在郷信

伊藤 傳次 未詳
室田 貞一 陸軍工兵少尉(工五廣島)
山本 公平 早稻田商業學校卒業
佐古 芳次郎 在朝鮮
能美 留 壽 以上五十二名
高橋 熊太郎 東京高等商業學校卒業
浮里 俊 道 住友倉庫會社員
青原 忠 一 東京帝國大學法科大學
今井 武 方 東京帝國大學法科大學
吉武 傳 一 東京高等工業學校卒業
橫田 三 介 大田福田寺住職
井山 正 作 撫順炭坑在勤
原田 信 藏 海軍中尉
山田 俊 江 陸軍中尉(步四二)
中村 敏 介 陸軍中尉(臺灣)
桂木 庄 市 山口高商卒業
村橋 孫 市 東北農科大學卒業
和田 正 敏 大連製鹽公司
和 田 正 敏 陸軍中尉
木村 精 男 森魚市場
有吉 武 彦 慶大商業卒業
正木 孝 介 熊本高工探鑛冶金科卒業
根 來 行 藏 在朝鮮
國 武 尚 死亡

第五回(明治三十八年三月)
以上五十二名

佐々木 竹四郎
西村 昌一
後原 孝一
山田 昌介
大谷 清記
大賀 幾太
榮 正 範
仲 義 輔
寺田 幸 吉
前原 四郎
大谷 卓三
南方 秋 亮
中村 芳 樹
大田 三 郎
村田 仁 介
中村 助 順
横地 素之 進
赤川 義 助
林 井 俊 治

死亡
岡山醫專卒業陸軍二等軍醫
在朝鮮元山
八幡製鐵所在勤
早大卒業小學校教員
岡山醫專卒業
早大卒業
在郷商業
慶大卒業
在郷商業
神戸市役所在勤
早大卒業日本人造肥料會社
死亡

長崎醫專卒業
大阪高工卒業
滿洲鐵道會社在勤
京都佛大卒業菟庭生寺住職
明治大學卒業
京都佛大卒業
豫備步兵少尉森中學校教諭
陸軍測量部技手
在郷
在郷
未詳

羽崎 勝五郎 臺灣銀行支店員
下 瀨 政 三 死亡
厚 東 洋 豫備陸軍步兵少尉
野村 英 一 瀬戸崎小學校教員
太田 健太郎 以上四十三名
增野 純 亮 長崎醫專卒業
佐村 武 一 死亡
百井 盛 一 山口高商卒業京都第百銀行
河野 利 長 第五高等學校
高橋 信 一 大阪高等工業學校
國 弘 壽 東京帝大法科
吉富 嘉 春 東京帝大法科
坪井 海 乘 山口高商卒業在朝鮮
岡田 信太郎 東京帝大法科
落合 兼 文 在臺灣
神崎 一 郎 東京帝大醫科
河名 謙 雄 東北農大卒業在郷
田中 義 雄 宗頭小學校教員
藤津 亮 然 死亡
中村 正 治 陸軍中尉(步一一)
堀 兼 治 奈古小學校教員
口 羽 素 介 海軍機關中尉
日 比 豐 東京外國語學校科卒業
水津 貞 輔 兵庫縣警部

東谷 光 亮 海軍機關中尉
國 重 熙 慶應義塾大學卒業
山田 八 郎 東京帝國大學
和 田 涉 海軍中尉
藤田 太 兵衛 陸軍步兵少尉
中子 德 一 小學校教員
井上 欽 一 大阪高工卒業在郷
田村 繁 人 東京帝大法科
森 重 操 慶大卒業日立鐵山
口 羽 順 藏 實業(在旅順)
繁 澤 利 往 陸軍少尉(步一二)
堀 永 伸 三 在東京
上 堀 太 郎 山口高商卒業防長農工銀行
石津 牛 治 生命保險會社員
田中 武 雄 在郷
岡 萬 藏 山口高商卒業
阿川 與 一 在朝鮮
大 深 眞 輔 三見小學校教員
福本 義 亮 東京妹尾銀行員
長崎高商卒業在佐賀

佐々木 竹四郎
高木 良 輔
箕妻 準 二
山本 良 輔
長谷 千代 一
石村 勘次郎
長井 寬 治
三浦 惟 一
溝部 九 一
柏村 堅 吉
白井 嘉 幸
岡藤 甚 三
松野 研 一
平 島 哲 郎
堀 澤 正 政
大 中 秀 次
山本 爲 善
伊藤 農 輔
山縣 四 郎
青野 直 彦
宮原 道 廣
永井 要 輔
石原 忠 亮

明倫小學校教員
賀田和社員
北海道三井炭坑
在郷
椿東小學校教員
新聞社員
在郷果樹栽培
千葉醫專卒業福岡大學病院
早大商科卒業阿武郡書記
山口縣師範學校卒業
格西小學校調導
白水小學校教員
在郷
鹿兒島電氣鐵道會社員
未詳
未詳
死亡
大阪高工卒業日立鋪山
死亡
未詳
第七回(明治四十年三月)
以上六十一名
奈古小學校教員

金子精一 陸軍三等主計
藤井龜松 山口高商卒業日韓銀行員
加藤保一 東京高商卒業
杉山判二 東亞同文書院助教授
山本敏造 陸軍三等主計
山科元二 山口高商卒業在臺灣
奧田又助 京都大學工科
木村六郎 第五高等學校
齋藤民治 海軍少尉
長澄市衛 陸軍少尉
西山七郎 格西小學校教員
鹿野政一 山口高商卒業三越商店員
講井毅一 大阪高工卒業
三好謙一 早大商科卒業
井山謙輔 死亡
小田太吉 陸軍少尉(步三五)
栗栖康生 陸軍步兵少尉
波根又介 小學校教員
伊藤八郎 東京商船學校卒業
陸軍砲兵少尉
厚東剛夷 第四高等學校
東京高商卒業

關東都督府大連土木出張所員
山口高商卒業
大阪坂鶴鐵道會社員
在東京
死亡
神戶稅關吏員
第八回(明治四十一年三月)
以上五十六名
死亡
山口高商卒業
海軍機關少尉
東京高師卒業相馬中學教諭
岡山醫專卒業
東京高工卒業
陸軍步兵少尉
陸軍步兵少尉
海軍少尉
海軍機關少尉
東京高工卒業
山口師範學校二部卒業
東京高工卒業
東京高商卒業
大阪高工卒業
陸軍步兵少尉

福岡四郎 長崎造船所
田中豐 在郷
中村誠一 千葉醫專
河野次郎 在朝鮮
奧野眞一 陸軍砲兵少尉
兒玉忠彦 在朝鮮
陸軍步兵少尉
以上五十六名
在東京
小野田セメント會社大連支社
大草又七 山口高商卒業
三戶山彦 三池炭坑
富田義介 在郷
細政竹雄 早稻田大學
山根四朗 在郷
平川新太郎 在郷
石光憲次 東京商科專門學校
濱屋七平 川崎造船所
本原直孝 山口師範二部卒業
津守完 長崎高商卒業
波多間靈 未詳
村田泰三 死亡
木村生三 未詳
栗屋謙一 未詳
小倉誠一 大阪高工卒業

杉本基良 山口師範二部卒業
原純一 日置小學校調導
中村信介 未詳
齋藤新一 早稻田大學師範科
田坂榮助 未詳
岩崎利一 未詳
藤田秀八 東京帝國大學工科
吉岡良平 同法科
河內通祐 東京高工卒業
末永一郎 同上
藤井愛咲 京都帝國大學理科
津守猛 陸軍步兵少尉
上田重一 山口師範二部卒業
岡德一 小學校教師
早川鏡一 未詳
竹重頼三 在臺灣
山本頼祐 陸軍步兵少尉
岡藤又七 東京高等商業學校
松浦鈍一 在郷
伊藤時重 大阪高等工業學校
山中喜一 未詳
中村道生 大阪高等工業學校
西村基助 在福岡
小倉誠一 死亡

野村昇輔
落合實藏
齊藤徹多
白井洗
早川富正
中村誠一
兒玉一男
長井要藏
神田直光
西村武光
齊藤武夫
堀野修一
堀野芳彦
安藤芳彦
石川光一
渡邊謙
渡邊進
大谷祇詮
村田三介
松野十一

京都醫學專門學校
陸軍步兵少尉
死亡

山口高商卒業
京都帝國大學法科
在臺灣

在鄉實業
山口縣師範學校一部卒業
三陽明倫小學校調尋
山口高等商業學校
未詳
未詳
未詳
陸軍步兵少尉
吉部小學校調尋
在鄉

千葉園藝學校
陸軍步兵少尉
東北大學林科實科
仙崎小學校調尋
在鄉

第十回(明治四十三年三月)
以上三十八名
東京高工卒業
田中實

齊藤定一 東京帝國大學工科
黒瀬積祿 工兵少尉
永松力 神戸高商卒業
松野信次 陸軍步兵少尉
古谷實 大阪高工卒業 荻電燈會社
瀧退一 第五高等學校
同良之 神戸高等商業學校卒業
三村惣一 山口高商卒業
宇野四郎 陸軍步兵少尉
香積元清 電信學卒業 朝鮮釜山郵便局在勤
伊藤義雄 陸軍步兵少尉
中西作介 陸軍步兵少尉
吉澤正太郎 死亡
武安明 水産講習所
山本傳一 東京高等商業學校
金子勘助 山口高商卒業
大田良吉 海軍少尉
桑原雅亮 千葉醫專
白井曉彦 山口高商卒業
松浦好輔 應慶大學理財科
窪井隆三 在郷水産業
白水小學校教員
山口高商卒業
熊本高工卒業

相島啓祐 陸軍步兵少尉
中原吉雄 第八高等學校
平佐幹 關西大學商科
田村孝亮 慶應義塾大學
植村九一 在郷
工藤峻 東京農大實科卒業
善市亥三郎 山口高商卒業
戸田剛三 京都醫學專門學校
田中敬藏 在東京
梅田吉郎 在臺灣兵役
玉木正之 山口師範二部卒業
和智孝任 三陽小學校教員
山口高商卒業
藤井醇一 岡山醫學專門學校
小野太亮 門司鐵道院
枝村匡輔 在大阪
阿部時治 山口高商卒業
驛元三郎 未詳
繼元博 小川小學校調尋
渡邊寛治 山口高等商業學校
土井武一 熊本高工卒業
村田繁 慶應義塾大學
上利賢介 在郷
安達茂作 在郷
山田耕作 在郷

金子眞一
福田敬二郎
石津美橋
益田直養
山一源吾
落合健
福島俊一
村井勝
阿武重元
野北重利
朝枝櫻英
横田秀一
齊藤忠明
柴田信智
三浦嘉七
根本勝虎
藤井百合松
高信一
前田孝男
田邊健
須子伴二
佐々木四郎
三好敬一
松浦茂

以上四十九名

第十一回(明治四十四年三月)
近衛師團入營
在郷

第一高等學校
第三高等學校
海軍兵學校
陸軍士官候補生
山口縣師範學校第二部卒業
山口高等商業學校
第三高等學校一部乙類
山口高等商業學校
梅東小學校調尋
第七高等學校
第三高等學校
在郷
陸軍士官學校
東京高等商業學校
大田小學校調尋
陸軍主計候補生
第七高等學校
在東京
山口高等商業學校
兵役
陸軍士官學校
東洋協會專門學校

藤村良作 在東京
廣榮來藏 淺田小學校教員
大谷雄介 大阪高等工業學校
松井隆美 第七高等學校
波佐間久 山口高等商業學校
村田新一 熊本高等工業學校
矢田篤一 大阪高等商業學校
塚本清一 白水小學校調尋
西山彦三 在東京
兼谷善二 小野小學校教員
寺戸篤 山口高等商業學校
植木史朗 在郷
齋藤二郎 在郷
末成茂 第五高等學校
栗栖勝 在郷
古橋清一 山口師範學校二部
上野義清 在郷
兼田唯助 山口師範學校二部
山崎秀輔 在北海道
飯尾三郎 山口師範二部卒業
大田茂輔 東京齒科醫學校
伊藤道顯 在吳

厚東剛四郎 新潟醫學專門學校
桑原義輔 第三高等學校
三浦敬造 第三高等學校
小枝義雄 東北大學農科豫科
河口百合長 第三高等學校二部甲類
山本直正 第三高等學校二部甲類
富田強吉 東亞同文書院政治科
津田等 東京鐵道院
齋藤武文 陸軍士官候補生
柴田龍三 同
豐中善實 同
守永自由 東京高等商業學校
松崎周介 主計候補生
林孝一 東京高等商業學校
原田正三 岡山醫學專門學校
江原茂 東京高等工業學校機械科
藤原政一 在朝鮮
上田嘉一 陸軍士官候補生
信國久 同
大野暢夫 佐々並小學校教員
櫻井秀康 在旅順滿鐵會社
高橋藤太郎 陸軍士官候補生

伊藤香
長宗純
原敏造
辻野喜一
高橋保勝
大津正一
有倉誠
黒瀬知一
厚東四郎次
日野二郎
波根彌六
室田五郎
渡邊四郎
田村眞一郎
佐々木四方介
廣瀬五郎
陶村政一
伊藤義彦
羽島陳
石田四月
岡正
内藤千里

山口高等商業學校
東京美術學校豫備科日本畫科
山口高等商業學校
在東京
山口高等商業學校
未詳
陸軍士官候補生
同
京都佛教大學
同
兵役
陸軍主計候補生
在東京
陸軍士官候補生
在東京
山口高等商業學校
陸軍士官候補生
長崎醫學專門學校
在郷
在東京
大阪高等工業學校應用化學科
山口高等商業學校
大阪高等工業學校探礦冶金科
東洋協會學校

平島公平 在京
秋本一郎 山口師範學校第二部
河內山隆輔 在郷
伊佐小次郎 在朝鮮
松永隆亮 長崎醫學專門學校
松原慶市 山口高等商業學校
下村福治 兵役
佐伯繩四郎 山口高等商業學校
南部法電
守重哲成
渡邊梅吉
梯並修三
秋丸哲夫
生駒林一
吉田耕造
村上正文
伊藤清忠
杉山守輔
藤本貢
片山豐助
岩崎吾一
木村榮太郎
岡田行雄
福田忍

福永隆太郎
坪井三介
奧田準一
上野實造
松永知義
豐田延雄
山田專一
佐藤政之

以上五十二名

第十三回(大正二年三月)

陸軍士官候補生
第五高等學校
陸軍士官候補生
大阪高等醫學學校
東京高等工業學校
陸軍士官候補生
同
東京高等商業學校
山口高等商業學校
陸軍士官候補生
第七高等學校
在朝鮮
陸軍士官候補生
岡山醫學專門學校
第七高等學校
大阪高等醫學學校
兵役
在郷
東京農科大學農科實科

モト枝村

椿武忠 在郷
河崎松之助 在郷
鈴木清 在郷
上岡讓熙 在東京
白石英男 在郷
卜部豐 在郷
柳屋良輔 在東京
德永英介 山口高等商業學校
竹内久治 在郷
森重幡雄 在朝鮮
柏村稔三 在九州
馬場秀藏 山口高等商業學校
遠藤俊雄 熊本高等工業學校
松尾一潔 在東京
增野雅治 京都佛教大學
赤川雅勝 在郷
大田元輔 在東京
竹重英治 在東京
村田芳彦 在臺灣瑞芳金山

香取敬也
浮里宜也
上利祥介
藤永智介
口羽忠一
金子生一
藤田俊彦
村上愛二郎
守永喜平
村田義嗣
磯村惣吉
岡田節藏
馬場健一
原田勝二
河野莊介
三上孝之
岩本南洋
伊藤藤諒
上田久芳
小野富貞

